

史料と人物 II (中津歴史民俗資料館分館医家史料館 資料叢書 8)

Michel, Wolfgang

Yoshida, Yoichi

Oshima, Akihide

<https://hdl.handle.net/2324/14235>

出版情報 : 2009-03. Board of Education, City of Nakatsu
バージョン :
権利関係 :

中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書Ⅷ

史料と人物Ⅱ

ミヒエル・ヴォルフカング

吉田洋一、大島明秀 共編

中津市教育委員会、平成二十二年三月



中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書Ⅷ

史料と人物 Ⅱ

ミヒエル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀 共編

中津市教育委員会、平成二十二年三月

編者前書き

昨年度の叢書では、本耶馬溪町の屋形家を中心として中津藩周辺の人物と国内外の交流を取りあげましたが、その後も引き続き村上医家のコレクションの目録改訂に取り組みながら、屋形家旧蔵史料の整理と目録化を継続しています。

屋形家の史料の所々には、書写者や蔵書者としての個人名が確認できましたが、とりわけ江戸時代の歴代家督の流れはこれまで不明でした。その後、幸いなことに、家屋の取り壊し前に行われた再調査で待望の家系図が発見されました。これは屋形家の史料の位置づけなどに不可欠な基本史料であり、その系譜全体を掲載することにしました。

つづいて吉田洋一は、屋形家史料の中から備忘類関連の史料を抽出し、特に江戸末期の屋形家の事情に関する検討を試みました。平成二十年四月から熊本県立大学で教鞭を執っている大島明秀は、村上玄水の天文観がまとめられた「天地分體論」の読解とその背景の解明に取り組みました。

以前大江医家史料館で活躍していた細田富多氏は、村上玄水が「外療集驗方」(五)でまとめた東西の薬方に関する記述を解読しました。最後には、村上医家史料館の改訂された文書資料目録の第一部(医学)を掲載します。

これまでは、叢書の編纂者は一人でしたが、共同の調査分析作業などを考慮し、これから三人の共同体制で出版の作業にあたることにしました。

平成二十二年 春

編者一同

目次

編者前書き

凡例

【論文】

耶馬溪屋形家の系譜

ミヒエル・ヴォルフガング・吉田洋一・大島明秀 …………… 1

江戸時代後期における地域医療の実情―屋形家史料を素材として―

吉田洋一 …………… 11

村上玄水著「天地分體論」とその背景

大島明秀 …………… 71

「外療集験方 五」(二丁～二六丁)

細田富多 …………… 96

「外療集験方 五」(二丁～二六丁)の特徴について

ミヒエル・ヴォルフガング …………… 117

村上医家史料館 文書資料目録 第一部 医学 …………… 129

【凡例】

- 一、底本は中津市歴史民俗資料館蔵「年中書紳録」及び村上医家史料館蔵「天地分體論」（史料番号 二部 四七）、大江史料館蔵「外療集驗方 五」を使用した。
- 一、原文の欠字・改行・平出・削除線その他体裁は総じて底本の表記を反映するように記した。
- 一、異体字・略字などは通用する字句に改めた。
- 一、「年中書紳録」原文の繰り返しの記号は全て、（または、）とし、（割書）、「頭注」、「挿入」はそれぞれ該当すると思われる箇所に「」にて補足した。
- 一、「年中書紳録」「天地分體論」の原文で、見せケチや削除線は二重線で、修正前の文字が判読できないほど塗りつぶしている箇所は■、破損等で判読不能な箇所は□にて示した。
- 一、「天地分體論」原文で、玄水が文章を挿入している箇所と挿入する文章の先頭には、○をつけて示した。
- 一、「天地分體論」の欄外の記述に関しては、「読み下し」に反映させるよう考慮した。
- 一、「天地分體論」は、原文に付されている訓点に従って「読み下し」を行ったが、そのままでは文意が通りにくい箇所についてはその限りではない。
- 一、「現代語訳」は前後の内容も考慮してなるべく簡略に理解できるよう配慮した。

耶馬溪屋形家の系譜

ミヒエル・ヴォルフガング・吉田洋一・大島明秀

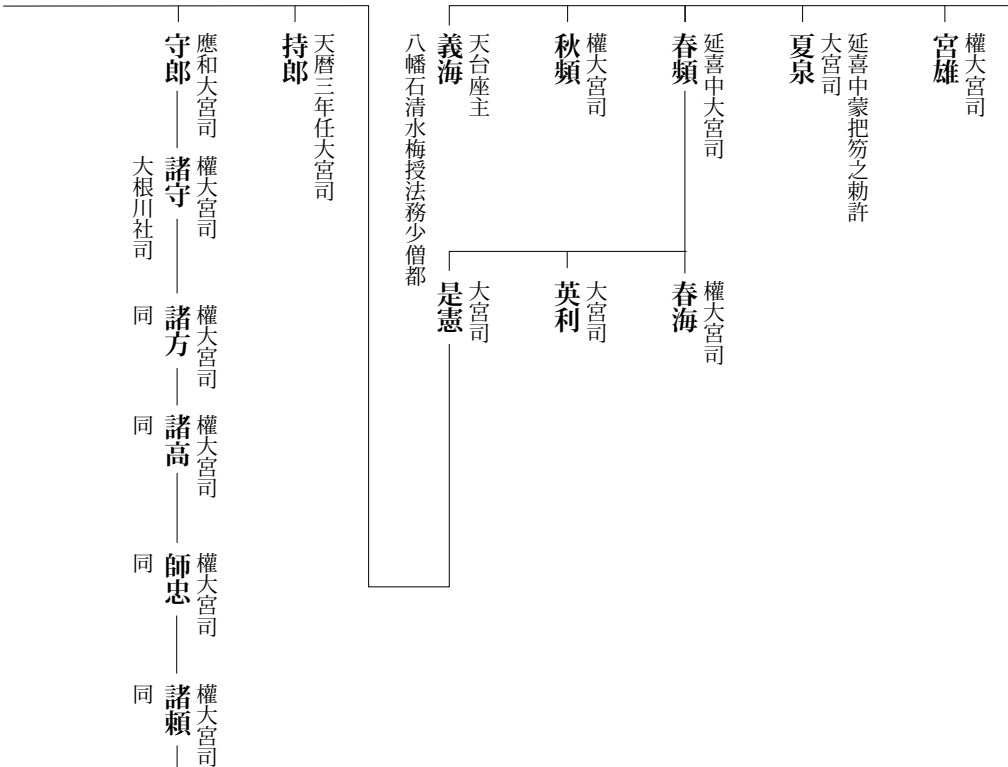
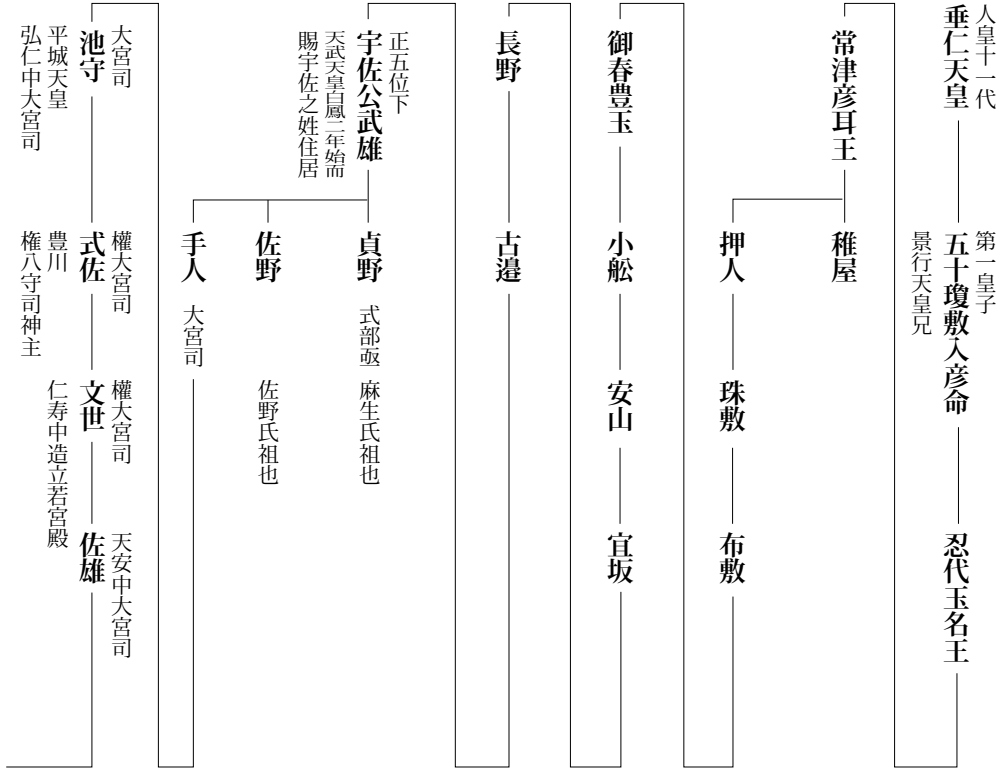
「屋形家家系図(仮)」を収納した桐箱(縦二九・〇糎×横七・三糎×高四・九糎)は、全面上部に赤色の付箋が貼付されており(縦九・〇糎×横二・九糎)、「壽 惠 廣」と墨書による記載がある。箱の中には卷子状にまとめられた史料群が二点収納されている。ここに掲載するものはその内の一点(縦二七・〇糎×横四八九・〇糎、楮紙・継紙一四枚)である。「垂仁天皇」を始祖とするもので、屋形家歴代名(傍系を含む)を墨書、系脈を表す線および個人の来歴などの補足が朱書にて記されている。この系図では、江戸末期の当主である屋形諸光までの名を確認することができる。紙面の都合により、上段には系図をそのまま転載し、下段に文字のみ翻刻を施した。

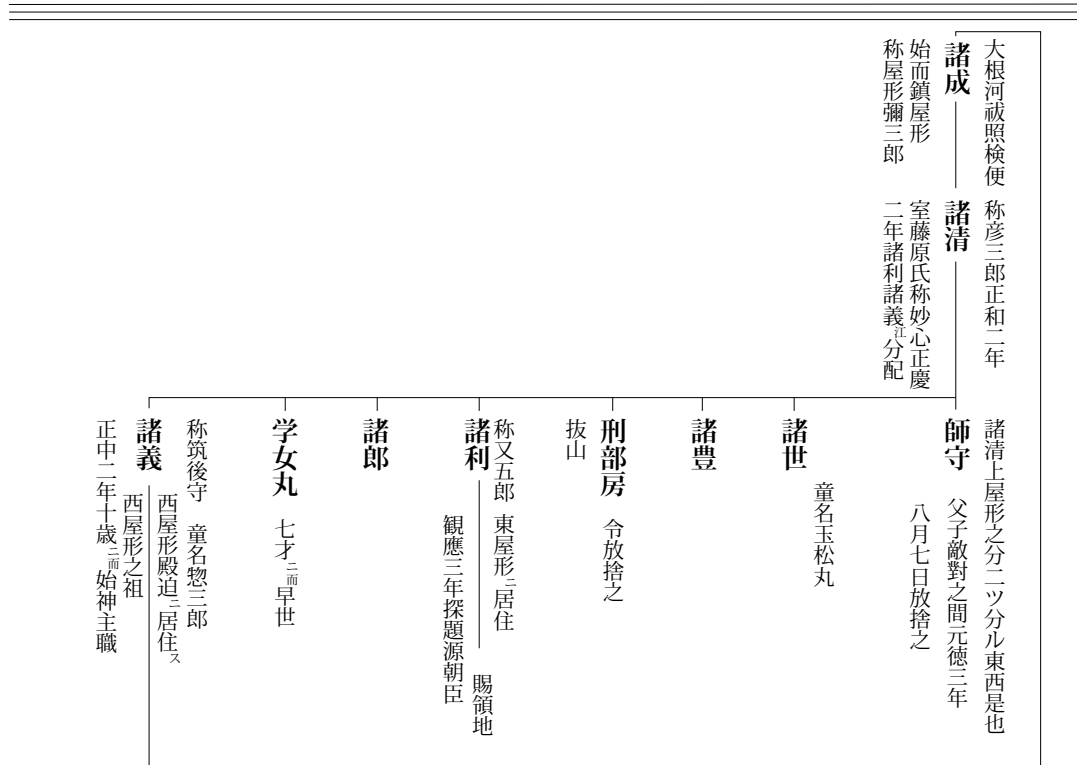
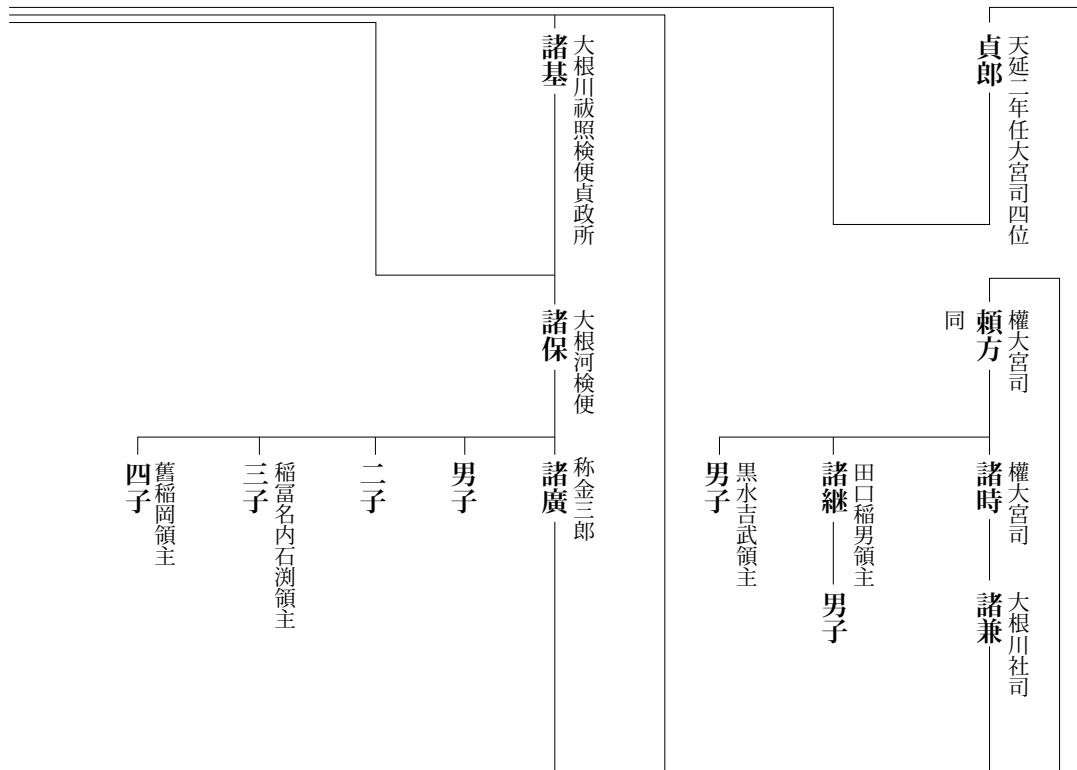
なお、もう一点の史料群は、「屋形氏略伝」と記され明治四(一八七二)年の奥付が確認できるものや、永和年間(一三七五〜七八)諸弘の代からの系譜の断片など数点が一括されているもので、今回掲載したものを系譜の清書と推察すると、これらはその下書きを一括したものであると考えられる。なお、今回は破損等で判読不能の箇所があるため割愛した。

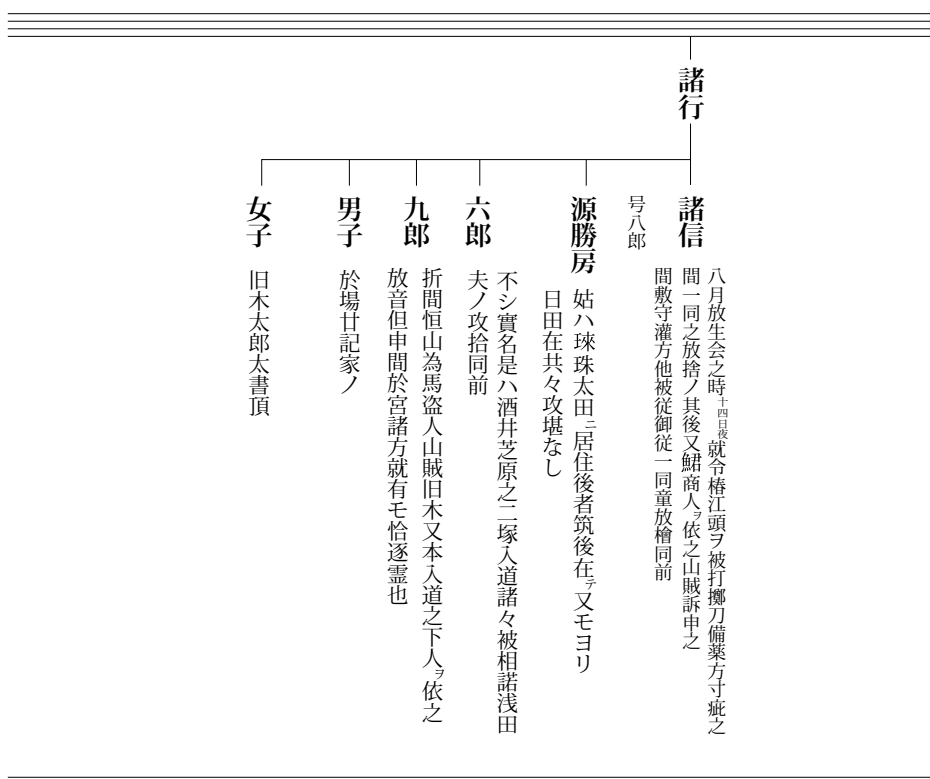
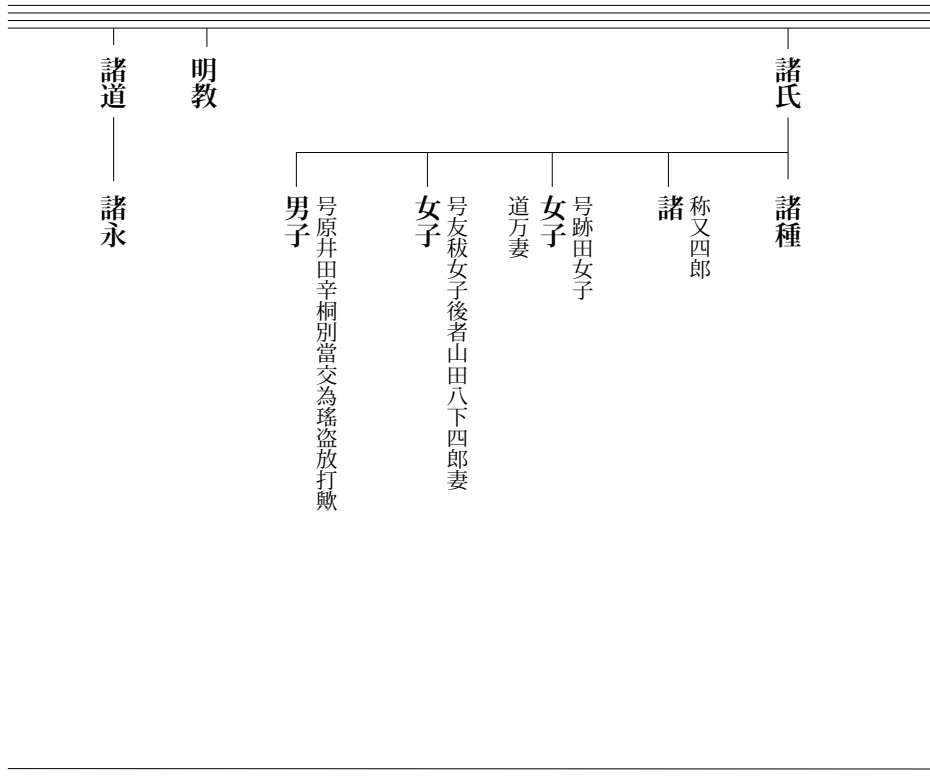


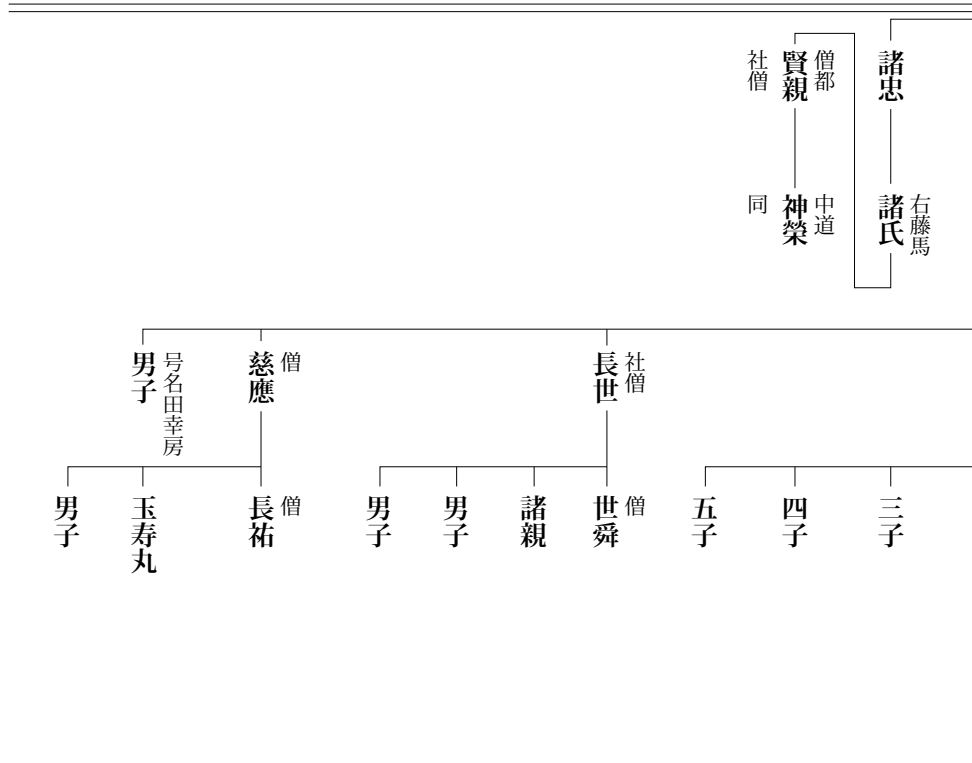
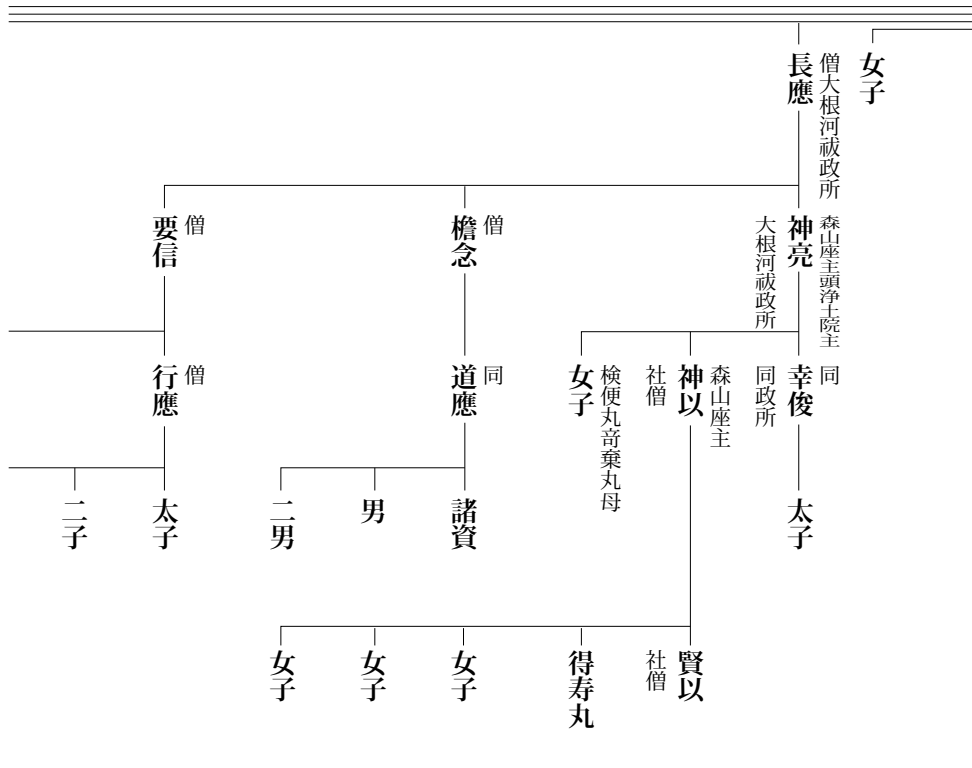
図一 桐箱入りの屋形家家系図(中津市歴史民俗資料館蔵)。

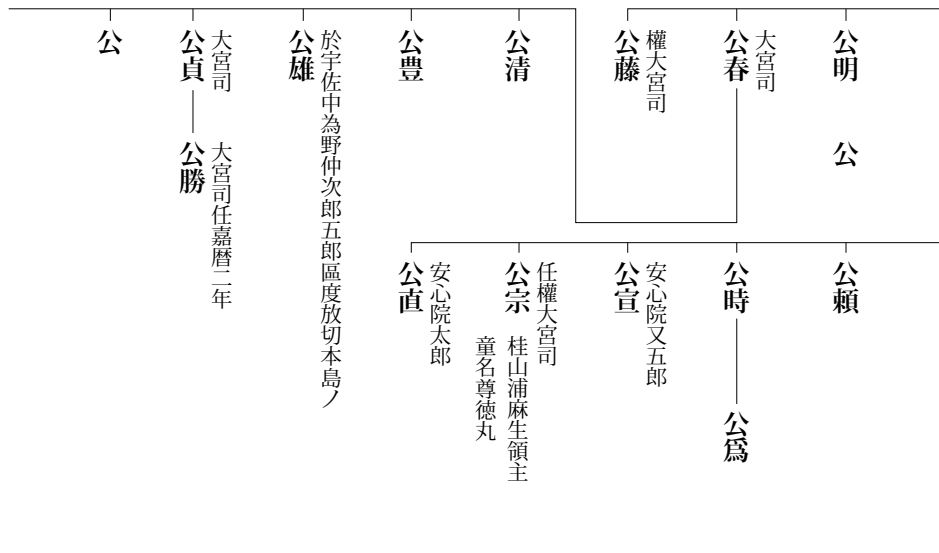
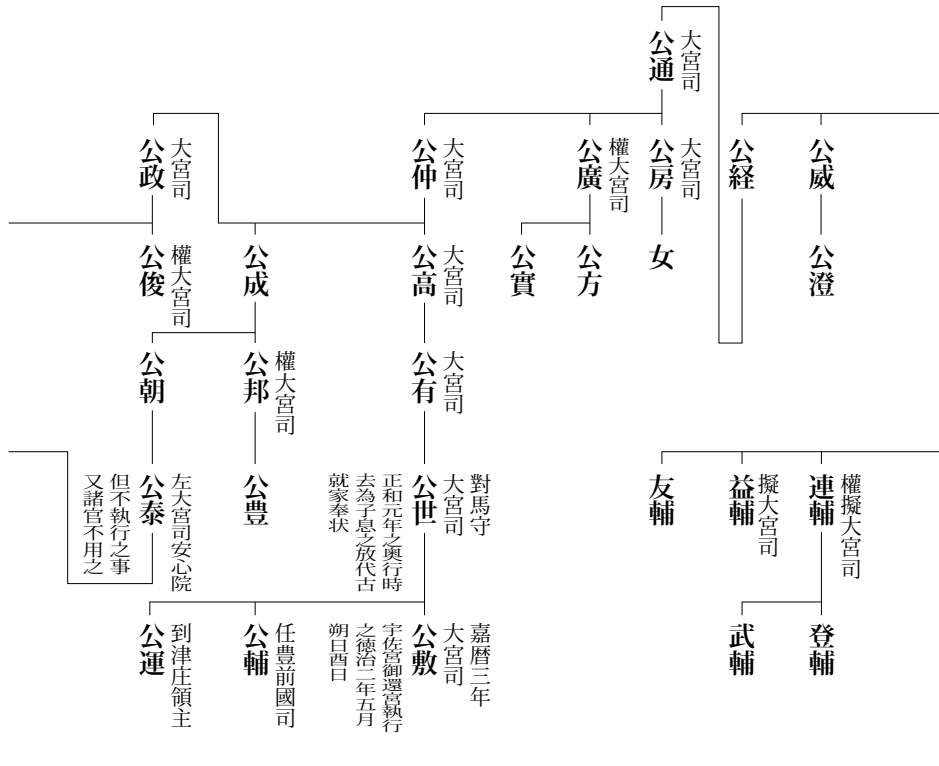
【史料】 屋形系図











称屋形掃部介治右近将監
諸内

貞和二年香積殿下向豊前國御知所合戰軍忠

称五郎
諸弘

称助五郎
諸永

称筑前守
諸綱

文明四年受讓

称備前守
氏諸

称飛騨守
諸宗

諸繼 割分地對論戰行状リ天文五年九月諸勝流罪

称掃部介
兼諸

永録十一年大門輝弘公ヨリ於周防國賜領地

諸忠平右衛門 童名又五郎称忠兵衛掃部介
權七

諸利

属大友氏与野中兵庫合刀於所々有戰攻慶長五年九月十三日
於豊後國石垣原大友父子為播時於陣中自殺^又

称新助
諸吉

始而分谷ノ前居任同所
一族之祖也

称惣左衛門 谷ノ前住
統諸

属大友氏与野中兵庫合刀
所々有戰功有リ

称新助 谷前別居
重次

称市右衛門 父諸利死去之後為孤母子據親族移居谷ノ前
諸忠

正 寛文五乙巳五月卅日卒

社家
住谷ノ前二世為村長任社家
稱市左衛門
諸泰
伊織安永丁酉冬十一月令辰認略系有リ

稱權七
諸正
正保年中再旧地殿迫_三居住_又
元禄三年庚午十二月廿日卒
室

稱八郎左衛門
諸久
宝永六年_丑六月五日卒
室
稱新助
直諸
享保六年_丑六月十三日卒
室

稱嘉助
諸武
寛延元辰十一月七日卒
室
稱權六
諸雄
宝曆二年_甲二月七日卒
室成恒佐々木氏女

稱吉右衛門
諸政
天明三_卯十一月七日卒
室東屋形屋成氏女

稱貞右衛門
諸利
室中殿村大木氏女
稱房吉
諸家

女子
山國宮岡氏某妻
稱嘉助
諸榮
無嗣子養弟令継家
文化三_寅八月十五日卒
室森山村圓正寺女

女子
田口村木崎氏利左衛門某妻
諸道

称養民号来徳始^マ以医為業 以梁字訓屋形
諸道

文政九年十一月廿三日卒
室秣村稲用氏女

称元亨繼医為業

諸文

天保十一^子九月三日卒
室中津奥平臣廣瀨氏女

女子 秣村白木原氏房右衛門妻

童名黙治
男 早世

女子 跡田村宮都宮氏寛司朝久妻

称權八郎

諸光

實田口村木崎庄兵衛 末子諸文之為養子

女子 養子諸光

女子

江戸時代後期における地域医療の実情

―屋形家史料を素材として―

吉田洋一

中津市に寄贈された「屋形家資料」(平成十六年)は、江戸時代以降における耶馬溪地域の医療活動の実態を把握する上で有益な史料群である。本年度は、前年度に引き続き、屋形家・家長が記した備忘史料を翻刻し、新たに知り得た情報について報告したい。

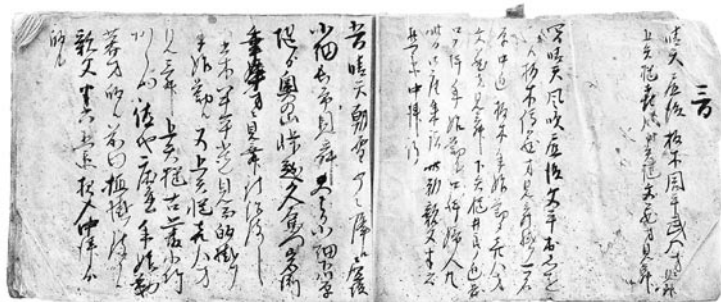
本年度翻刻した「年中書紳録」は、表紙に「文久三年癸亥正月吉辰」とあり、同年(一八六三)元旦から十二月廿八日まで、ほぼ毎日記録されている。先ず当日の天候から書き始め、家内の行事や、診療と思われる記述(史料中には「見舞」とある)を規則正しく綴る。同史料の正月元旦と二日の記述は次の通りである。

元旦

晴天 申朔日養民秀之丞新造
八社宮参詣 新造秀之丞谷ノ前
年始勤ル藤右衛門召連養民
直ニ上矢櫃喜八下矢櫃文蔵方二
見舞皈ル同月内年始廻リ

二日

晴天 昼内寺川内要吉方二見
舞一ノ瀬岡平前鶴年始勤ル²



図一「年中書紳録」写真は一丁裏～二丁表
(中津市歴史民俗資料館蔵)。

正月には養民・秀之丞・新造³と共に八社宮に参詣し、新造と秀之丞は谷ノ前⁴に年始挨拶に、養民は上矢櫃⁵・下矢櫃⁵に「見舞」に行っている。「見舞」は、以降ほぼ毎日記述がなされているので、現在の往診と考えて間違いなからう。

平成十九年度の調査において、屋形家の事蹟を検討することができるものとして、「年中行事日記簿」（明治二年）の史料翻刻を行った⁶。その際の「解説」にて、「臥雲堂」という屋号の記述があることから同一人物の著述と推察した⁷。しかしながら、今年度の調査で屋形家の系図類などの検討を行った結果、前年度発見された九点の備忘録は、屋形家歴代のある人物が一人で記したのではなく、諸光・養民二代にわたって記された可能性が表出した。それは、前年度の成果物である「年中行事日記簿」、本年度翻刻した「年中書紳録」の双方に共通する記述として、「養民」という呼称が記されていることである。江戸末期から明治初期にかけて、「養民」を号するのは一名だけであり、「年中書紳録」中では「養民」の記述が八箇所確認できる⁸。したがって、養民は既に医療活動に従事しているものの、文久年間（一八六一〜六三年）から明治初年にかけての当主（家長）は、養民の父・諸光であったことがわかる。

また、九点ある備忘録については、文久三年〜明治五年（計五点）と明治一五年〜明治二五年（計四点）とは時期に約十年の隔たりがある。養民は明治六年に四十二歳であることは判明しているので、発見された九点のうち、ある時期で著者が諸光から養民へ受け継がれたと思われる。このことに関する検証は次年度以降の課題としたい。

「年中書紳録」は、往診の記録だけでなく、日々の雑事の記録も見られるが、本文の補足説明として挿入紙に記したのもある。

【史料】八月二十一日の条に次のようにある。

廿一日 早朝仕立桜峠跡見而山口氏二

立寄上麻生吉兵衛方見舞夫より六地ヨリ

雨二合床並越し致し井河織の近二

立寄馳走二合高並峠越し忠右衛門伯父

之宅二寄夫より城之助方立寄落合西氏

老母参居同所二而大キ二馳走二合扇さんさく

月弓之草ヲ貰ひ夫より庄屋長平方

立寄花社通り上舟木藤治郎方

二見舞止宿¹⁰。

往診の途中で「馳走」してもらった記述であるが、その箇所
の挿入紙が（図二）である¹¹。

このように、「年中書紳録」では、江戸時代後期以降、屋形家
が下毛郡を中心として地域に根差した活動を行っていたことを
知ることができる。

書名・年中書紳録

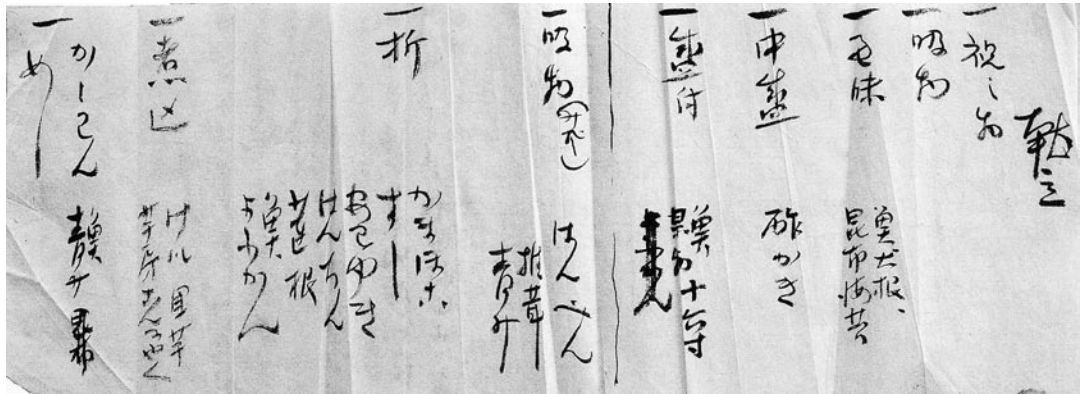
成立年・文久三（一八六三）年癸亥正月吉辰（元旦）十二月

廿八日）

作成者・臥雲堂

法量・一三・八糶×一九・〇糶、一〇四丁（墨付・一〇三丁）

備考・七五丁目・七六丁目挿入紙



図二 「献立」と記された挿入紙（中津市歴史民俗資料館蔵）。

- 1 史料群の呼称に関しては、富田修司「耶馬溪屋形家とその資料について」（『中津市歴史民俗資料館分館 医家史料館叢書VI 史料と人物I』、中津市教育委員会、中津、二〇〇八年、一頁）参照。
- 2 【史料】「一丁表」（一四頁）参照。
- 3 養民は長男であることは判明しているので（富田修司「耶馬溪屋形家とその資料について」（『中津市歴史民俗資料館分館 医家史料館叢書VI 史料と人物I』、中津市教育委員会、中津、二〇〇八年、一頁）参照。）他の二人は兄弟である可能性が高い。
- 4 当時の西屋形村の小字。
- 5 当時の東屋形村の小字。
- 6 拙稿「明治初期における耶馬溪地域の医療―屋形家史料「年中行事日記簿」を中心に―」（『中津市歴史民俗資料館分館 医家史料館叢書VI 史料と人物I』、中津市教育委員会、中津、二〇〇八年所収）参照。同三二頁。
- 7 【史料】「年中書紳録」参照。
- 8 前掲・富田氏論文、注7「開業届」参照。
- 9 【史料】「年中書紳録」七六丁表（五四頁）。
- 10 【史料】五四～五五頁参照。
- 11

【史料】 年中書紳録

〔表紙〕

文久三年 臥雲堂

年中書紳録

癸亥正月吉辰

〔二丁表〕

元旦

晴天 申朔日養民秀之丞新造

八社宮参詣 新造秀之丞谷ノ前

年始勤ル藤右衛門召連養民

直ニ上矢櫃喜八下矢櫃文蔵方ニ

見舞飯ル同月内年始廻リ

二日

晴天 昼内寺川内要吉方ニ見

舞一ノ瀬岡平前鶴年始勤ル

〔二丁裏〕

三日

晴天 昼後板木周平武八方ニ見舞

上矢櫃喜八下矢櫃文蔵方見舞

四日晴天 風吹昼後文平お知せ

飯ル板木傳蔵方見舞掛り一ツ

石原中迫板木年始勤メ喜八方

文蔵方見舞下矢櫃井良ノ迫岡

口ノ坪年始勤ル口ノ坪婦人共

此日御座参詣此朝親父半六

惣兵衛中津行

〔二丁表〕

五日晴天 朝雪少々降ル昼後

小畑長市見舞夫より小畑下川原

堤ヨリ奥の山峠越久右衛門岩瀨

幸平方ニ見舞針治致し

生木半平小児見而飯掛り

年始勤ル又上矢櫃喜八方

見舞上矢櫃古藪小竹

かわ内徳地床並年始勤

暮方飯ル前田植掛ケ致ス

親父半六惣兵衛夜入中津ヨリ

飯ル

〔二丁裏〕

六日晴天 田中威十郎多志田

順平昼後ニ来ル養民先ニ

石井年始勤メ尾林勇六方

見舞尾林年始小野伊三郎

方ニ見舞夫より原井田中氏ニ而

年始會中野氏ニ見舞暮而

飯ル此日宿元節ニ而文平

実蔵お米お千代お津多

お知せ惣兵衛来ル跡田伯母お幾

保め来ル此日下男植掛ケ

七日晴天 梅花一瓶生ル昼後

跡田伯母飯ルお幾保めお為

〔三丁目表〕

婦年内ヨリ病人介保ニ来昼此日一同ニ

飯ル札式十五匁遣又養民板木傳之

方ニ行掛り岡平ニ而落合重蔵内

小兒風邪之由ニ而見而武八方岡

平方傳蔵方ヨリ舟板平陰平

年始長助家見舞日平年始

用吉針致由平方ニ見舞小川内

峠ニ而勘助方木出しニ逢候

小川内年始喜八方見舞杉

野ヨリ谷前新助小兒足ニ腫

物出来九部千代助方見舞下

九部ヨリ川端落合年始蘭平

方ニ紙式束式帖代式拾式匁遣又

〔三丁目裏〕

元右衛門悴節平見舞健三

方立寄おむツ風邪見舞

関太郎一同年始ニ逢井手迫口之上矢櫃

喜八方ニ見舞夜入飯ル健蔵方ニ而

東谷ヨリ宗右衛門腫物出来ニ而下男

咄ニ来由聞夜入候故米吹行積り

□寺川内重平内喜八九部辰五郎

板木傳蔵母藥調合致居

八日晴天 未明東谷ニ行峠の下而

奥畑下男新兵衛咄ニ参□合直之

藥籠取遣又宗右衛門風毒也

昼後ニ飯ル九部千代助方上矢

〔四丁目表〕

櫃喜八方ニ見舞飯候而直ニ今行

〔挿入〕小畑長市母灸ニ而見舞ノ但刺後吸玉掛ル

五造ヲ見舞ニ行夜入飯ル

宿元藥師聞治八長八庄三

吉平出来ル寺川内芳平

藥取来ニ而持居家内三人分

調合致し遣ス

九日曇天 播磨屋ヨリ手代

参而拂致又昼後ヨリ雨

降出又親父春ニ初出會

播磨屋同道ニ而大峠越し致ス

此日養民頭痛終日不出夕方

板木傳蔵藥取ニ参ル

〔四丁目裏〕

十日晴雨 日和昨夜酔志

漏り無成り貝返し藤平悴

喉二針致ス昼後落合節平

方見掛ケ健蔵方見舞奥畑一件

咄致置入掛ケ奥畑下男新兵衛

跡田ヨリ飯掛り咄ニ来候間直二節

平方二見舞奥畑二同道ニ而行

横井堂の下飯り候ヲ見而此日

奥畑御書附披露ス東谷客人

多く来居ル飯掛り新助小供見舞

夜入飯ル此日宿元居形村親父

夕方青ヨリ飯ル入掛り堀田之下ヨリ

治郎右衛門同道ニ而談し致ス

〔五丁表〕

十一日晴天 朝菅野治郎右衛門参ル

千代助方ヨリ猪肉一斤貰ひ昼後

扮年始勤メ傳六老母治平

風邪見舞今行伸平方ヨリ上年

始勘兵衛岩助方見舞中野氏二

吸玉掛り馳走ニ相成り夜ニ入り

飯掛ケ下川原向ニ而扮こん助手の

痛ヲ見而飯ル前鶴ての娘心

下痛之煩薬取ニ来待居薬遣ス

此日ヨリ扮久平居士臺揃ニ来ル

十二日晴天 大江氏ニ猪肉式斤

遣ス久平傳六木挽来ル朝

治郎右衛門来ル於ツた此日飯ル

〔五丁裏〕

昼前伊東玄有年始ニ来ル札六匁

七分堂鼻酒代下於まちニ渡ス昼

後板木傳蔵方見掛り周平方見舞

勘六鹿追幾平鉄砲打候へ共

相果無而鳴不申由鹿又元所江

三疋飯居候由之咄し傳蔵方ヨリ

出掛り落合節心下痛之由順治

申来り日年越より小川内峠奥平原

之上ヨリ落合小左衛門方之上ニ越し

節平方周助方健蔵方ニ而千代助勝平悴見而

谷前新助上矢櫃喜八方ニ見舞

八幡宮前通り飯所菅野伊平小兒

追来ニ而見而暮方飯ル国崎屋ヨリ

金之助年賀社通り持出泊ル

〔六丁表〕

十三日晴天 此日店壁土落し

早昼後養民春二年始行掛ケ

跡田中平ニ而年始出し横井ニ立寄

春ニ行樋田玄有方立寄小野

伊三郎方尾林勇六方見舞元助

方江年始申直ニ販ル夜半過ヨリ
雨降ル久平傳六勤ル

十四日朝雨 降り四ツ時分天気成ル
生木惣助店屋根取実蔵来

昼後山口ヨリ仁左衛門喜八来ル養民

東谷ニ行暮方貝返しヨリ宇洞

九部年始勤メ落合健蔵方ニ

〔六丁裏〕

立寄節平方勝平方ニ見舞

店此日向ヲ替ル落合ヨリ夜ニ入

販ル久平傳六勤ル

十五日晴天 店土臺替大工治平健兵衛

万助喜平来ル実蔵加勢中野氏ヨリ

横井書状持參ル稲屋弥六年始ニ

来ル昼後上矢櫃豊助方喜八

谷ノ前新助悴見舞

十六日雨天 中津年始行之所

雨天故見合昼後中野氏ニ見舞

〔七丁表〕

横井江丸薬頼書状遣ス明

朝出津之積故跡田行次手ニ

中平ニなきの木晶貫ニ遣ス

十七日晴天 文平召連養民中津

年始小鶴屋ニ而昼致し手嶋大江

棟形久保田□平寫西氏三の

丸主税様江上り文平小鶴屋江

遣し養民大江ニ行泊ル

笠原貞昇同宿夜播磨屋

ヨリ便来り同道ニ而行直ニ販ル

〔七丁裏〕

安岡ニ鳥渡見舞貞昇

竹下ニ止宿

十八日雨天 三の丸ヨリ御便来ル

御訳り申上播磨屋庄兵衛来テ

御隠居一同ニ中武ニ行貞昇

養民大江御隠居片山氏庄兵衛

福市夕方大江ニ販り央稼

立寄大江暇乞致し国崎屋

長平方仕切致し小嶋屋ヨリ

松井廣瀬年始夜遅ス

〔八丁表〕

小嶋屋ニ販ル

十九日 早朝買物致し朝飯後

覚右衛門殿咄ニ来ル直ニ出立返手

熊ヨリ道悪敷ニ付田口行八屋

茶屋内方不快之由ニ付廿二三日

時分参筈仮定致し販ル暮方

販宿

廿日晴天 昼後文平飯ル養民

昼前中野氏横井立會之筈

二行横井留主二而直二飯ル尾林

勇六向岩瀨二而足之痛ヲ見而

〔八丁裏〕

昼飯後奥畑二行四ツ時分

飯ル此夜小畑長市死去

廿一日晴雨 風吹鼻治致し

夕方德地於中見舞飯ル八屋

茶屋於辰今朝死去之由

申来テ泊ル万助来ル播磨屋注文

善平二頼候

廿二日曇天 昼内店普請

見而桜峠ヨリ病用申来ル小鶴屋

林兵衛年始二来ル昼後養民

〔九丁表〕

中野氏二見舞直二飯り桜峠之

見舞飯掛り前鶴嘉助方見舞大工

健兵衛惣助来ル鹿肉一斤傳五郎

弥平ヨリ貴候

廿三日晴天 暖気昼後上矢櫃

浅右衛門方喜八方見舞九部辰五郎

落合周助悴節平方見舞飯り

蘭平方立寄紙拵ヲ見ス谷前忠右衛門方

妹脂病ヲ見源三郎方二見舞寿助内寿

太郎風邪見舞菅野通り徳

地藤左衛門母見舞飯ル惣助

多平健兵衛勤之店日差拵

〔九丁裏〕

廿四日晴天 暖気朝東谷ヨリ

三郎左衛門書状持来西玄麻立合

之筈之所終日相待候へ共不来夕方

飯ル尤着之砌秣徳左衛門鉄造

参合年始相伴致入徳左衛門

咄二而伊勢御文庫並大謝之

儀□ル外二色京大助江戸

咄致ス此日多平惣助健兵衛

勤ル跡田剛兵衛同廿二日死去二而今行

見届之由

廿五日晴天 温暖朝親父不快

徳地おツた申遣し来ル昼後中野

二見舞掛り生木半平小兒今行勘兵衛

〔一〇丁表〕

見舞中野二横井杵井来會酒出し

長々咄し致し田中氏二見舞飯ル

廿六日朝ヨリ雨天 朔日跡田伯父

おくふ西猛□下男来テ泊ル

養民不出

廿七日曇天昼後落合猛し

四日市行 養民不出

廿八日晴天 宿元兩村初寄致ス

昼後跡田伯父おくふ飯ルおいつ

同道ニ而行養民岡半六家内

〔一〇丁裏〕

見舞口坪おはて廿一日ヨリ来テ此日

飯ル因幡屋注文

廿九日晴天 昼後生木久平悴

六市嘉助悴千代吉半平小児

見而此日小竹おせき飯ル新造春二

年始ニ行桜峠政助方ニ見舞

寺川内多平方ニ立寄明日来呉候様

頼置飯掛ケ行司邊之者兩人

桜峠ヨリ同道ニ而店迄飯ル仁六勤ル

夕方常治郎おみち秀之丞江植痘

致ス

二月朔日晴天 昼後生木久平

方五郎見舞尤痘瘡横脇ニ付

嘉助方千代吉痘之由見舞半平

〔一一丁表〕

小児見ニ而飯ル玖珠塩屋一昨年

菓種料取ニ来ル一角十六匁式分

相求ル但百八拾壹匁也夫より

落合節平方ニ見舞奥畑ニ行

五両口式ツ佛檀料拾両勘定

昨年一昨年酒代等勘定相済

夜泊ル高田太夫来テ伊賀八

白木屋かたる

〔割書〕「此日秣ヨリおとく六十春ヨリ見祝／餅□り来ル」

夜忠来テ中国道中京都邊さわかしき由咄致

二日晴天 三方風吹寒し時々

雪降ル朝飯後奥畑ヨリ立

飯掛ケ落合健蔵麦中致居候所

江行重蔵方保め之事聞

〔一一丁裏〕

忠右衛門方ニ立寄寿助家内見テ

飯ル宿元暇取栄蔵藤右衛門

喜助仁六惣兵衛久治しおえき

おとえ平原喜助母来ル養民

昼後今行勘兵衛方中野氏

平右衛門方林平方見舞飯掛ケ

生木嘉助方久平方下川原類

蔵方多平痘瘡見而飯ル

親父寺川内勘助隠居家棟上

乍根行夜土佐井庄平来テ親父

江談合有之由ニテ泊ル

「一二丁裏」

三日晴天 朝内不氣分岡半六
来テ富式枚家内二十人組出来
但大猪我家ニ入来ル夢合五百四

十四番 高山の上ニ而春袋ヲ拾取たる

夢合二百九十六番也昼後養民

小川内芳太郎見舞奥畑借用

咄致ス飯掛ケ上矢櫃喜八浅右衛門方

立寄○飯ル南庄藏下女下男雇

○岡半六方ニ見舞飯ル

テ行賈テおとえ藤右衛門此日飯ルおツ

や此日ヨリ雇岡長治郎居ル今行五造

此日眼病ニ而中津出ル宿元母今朝

ヨリ風邪此日彼岸中日也

落合堂端江参詣人多し

「一二丁裏」

四日晴天 南庄藏徳地藤右衛門聞合

棕の木新助娘聞合岡長治郎聞合

頼置実木実藏江作藏九部又平

娘聞合頼置奥ニ書候て年皆子

店ニ移ル座拵候昼後養民

落合節平方見舞掛方下女下男

雇ニ行落合健藏方ニ而休息致し

此節平方に見舞おとえを雇ひ妹

相談致候所今朝山口江約束致候由

小右衛門ニ合蘭平不快之由ニ而見舞九部

又平娘雇候へ共今年差出不申由

貝返し桃太郎ニ逢茂市方兄弟

有之由ニ而貝返し市右衛門ニ立寄

「一三丁表」

倉藏留主也飯掛ケ兩人娘見而

宇洞おえひ方立寄作藏風邪ニ而

打臥居安太郎方下ニ而倉藏夫婦

□ヨリ飯ニ出合婦之方頼置千代助

内ニ堂之下ニ而おふん跡田遣し呉候様

頼置健藏方ニ行おふい東谷ヨリ

飯候由ニ而健藏江頼之聞合致ス

夕方生木久平方ニ見舞下川原多平

見舞飯ル夜ニ入

五日晴天 朝播磨屋注文庄藏棕の木ニ

急来居申遣し実藏奥ヨリ飯ル

倉藏方又平方子供差出不申由

昼後中迫久助方見舞行掛り

五反田おきえ前鶴参居岡平迄飯り

「一三丁裏」

談中近ニ見舞板木ニ□し周平娘

談シテ飯ル生木久平方見舞岩淵幸平

談シテ飯ル店ニ而秋造手傳致し二階

大引入ル生木ヨリ五市小便通し不申由
申来ル

六日曇天 朝飯後小坪幕□

迫二役人衆參候由九部光平方祝儀之

由二而武市相備二来ル椋の木新助

娘当年下女雇置候所破談ニ參ル作

蔵染水ニ相談致置候故先方ハ

破談申遣し呉候様頼来ル養民

此日薬袋拵春ヨリ源六下女下男

雇二来ル小石田幸八方櫛五十俵為

盜穿儀致候所一人鉄砲丁二而

「一四丁表」

笛ヲ突候由昼前二羅漢寺隱居

東二行掛ル合羽傘借り行

七日曇天 暖気心悪し雨風

強し日田手代之坊主来テ

酔中眼ニ而談し候前鶴勇平ニ

止宿夜遅ク平原重平中迫久八

玖珠ヨリ健平おいやヲ連来テ当方ニ

止宿ス

八日時雨 致ス朝東谷ヨリ茂八来ル

昼後養民奥ニ行玄琳但馬来

昼夕方皈ル貝返し両八方豊蔵
方利平方ニ立寄皈ル谷ノ前ヨリ夜二入

至而寒し夜藤右衛門庄蔵来テ

「一四丁裏」

十五日 父来ル約定致ス此日健平

扮二行

九日晴天 雷時雨致ス此日至而寒し

田口ヨリおなツ下女下男召連東谷二行

掛ケ立寄居ヘ万助健兵衛藤右衛門

勤ル夕方生木久平方下川原類蔵

挿入「店日雇拵」

方二見舞横田口下男東谷ヨリ

皈ル米来ル健平おいや逆ニ

来テ扮二行宇佐宮富昨日

仕舞畠乙者筑前半今出ル近邊

者一切も不出之由存し共しツク

引取従之竹治郎お道を東谷江

負行下女おきわ今日ヨリ来ル

「一五丁表」

十日晴天

昼後養民下屋形覺助見二行

田中老人傳六家内尾林勇六

見舞皈掛ケ今行氏ニ為招見舞

三河足痛也親父此日下屋形迄

吟味役来候由二而行平田庄之
来居ル下屋形今行見分宿元

泊ルおツる賄ニ来ルおツや此日皈ル

十一日晴天 暖氣昼後平田良兵衛

出来ル吟味役東西見分七ツ時分

下ル養民小竹周助方見舞

東谷江おみツ常治郎遣入南

およし中須仁右衛門召連行也

〔一五丁裏〕

今日小川内ヨリおゆく保ニ参候へ共芳

太郎九死一生之由ニ而一同ニ而常ヨリ

皈し置筈芳太郎死去ニ付

宇平札百目借ニ来ル店裏

もとし惣助与治右衛門夕平半右衛門

来ル伊六藤右衛門長治郎勤ル

札百目宇平ニ貸候内五十匁文養民出し候

十二日晴天 暖氣伊勢保雄来ル

小竹周助与右衛門豊助来ル与右衛門借用

一件之由小畑傳六證文書取来テ

煙草ヲ頼ミ切ル昼後養民下

屋形元助方田中氏小野幸市

伊三郎方ニ見舞生木久平

〔一六丁表〕

下川原類蔵方見舞皈ルおツた

来ル昼後ニ伊六藤右衛門長治郎勤ル

作蔵此日ヨリ来ル

夜雨風

十三日時雨 貝返しヨリ下女倉蔵女子

おふい下男桃次郎兩人倉蔵連

来ル朝半六来テ前鶴お 貫

呉候様秋造ニ頼置養民終日丸薬

拵生木実蔵咄ニ来ル此日博奕

一件ニ而床並伊平小竹ニ而穿儀之

由岡七治郎勤ル

〔一六丁裏〕

十四日晴天 えなふる朝親父三尾

母江御見分役人衆入込ニ付行「挿入」 「生」嘉助

来テ博奕一件村中評儀ニ成候由南

小市青ニ行東谷周平方ヨリ様子ニ而

葉取ニ来ル此日作蔵風邪ニ而伏ス

播磨屋注文椋の木久三郎ニ頼ス昼後

落合丈兵衛家内見舞ニ行掛ケ健蔵ニ而休ミ

丈兵衛方坪ニ而周助悴診而節平方蘭平

方ニ見舞皈ル小竹周助悴見舞岡

半六家内見舞口坪栄太郎方ニ見舞

皈ル此日山口ヨリ喜八来テ下麻生ニ而舟木□

宿麻生三蔵方酒造り首括り死去一件

咄し致ス

十五日晴天 桃太郎此日皈ル藤右衛門伊六

来ル朝飯後兩村五人組寄合

〔一七丁表〕

昼前上麻生林平来テ左平

不快之由ニ而東谷江行筈之所ニ

苦木越致し仙人江行圓ケ迫之

向之道ヲ登り貝塚越知世峠ニ下り

溯萩周平方ニ見舞奥畑ヨリ書状

来り手月ニ立寄奥畑ニ而夕飯仕舞

夜入り飯ル親父此日春ヨリ役人衆

御着之上引取朝岡七太郎東谷

おみつむかいニ遣スおみつ常治郎

お道飯ル小川内お幾此日来ル

此日久右衛門ニ秣勇平石井幾右衛門一件ニ来テ同居内供取合不

申

空敷引候由後世話致し遣候様咄ス

十六日晴天 明十七日見分役人衆宿

元御泊りニ付掃除旁在宿此日

〔一七丁裏〕

下屋形村御昼泊り新造昼後ニ

田中江出浮落合善兵衛不快之

由申来不得行半五郎役目掃除

堀迫仁市お順おまき同断生木おツも

夕方来ル役目也

十七日晴天 暖氣見分御役人富永氏

柳氏今野氏水嶋氏御役人上下七人

大役頭御出也昼ヨリ御泊り昼後休明日

ヨリ下屋形勇六方茂右衛門庄八小野小市

伊三郎田中傳六庄屋江見舞若林

庄八方生木久平治右衛門方ニ見舞夜入

飯ル三尾母氏少之先来テ泊ル役目

半五郎嘉助おツもおツた朝来ル

〔一八丁表〕

十八日晴天 深水条助土同役人御逆ニ

来ル役人衆朝飯後御立三尾母氏

中津江出ル大役頭四ツ時分御飯り

今行重右衛門出来ル同目附衆梅津

水嶋両氏御昼落合善兵衛谷前忠右衛門

見舞

十九日晴天 昨夜山口ヨリ呼ニ来ル留主ニ而此日

昼前ニ行直ニ飯り昼後下屋形田中氏

尾林勇六茂右衛門ヨリ小野伊三郎幸市之

見舞生木久平方なツむツ見候而飯ル

少々夜ニ入ルみち風邪ニ而熱手強

此日宇野惣助女子谷の前鉄平方嫁入上おと

え治八行秋造相伴ニ為招

〔一八丁裏〕

廿日雨天 糲種なし生木久平方ニ而新山

式斗式升要ル新山式斗式升荒木式斗式升

惣石□ス四斗式升焼米共餅八升江余門

壹斗 此日不出ス桃太郎藤右衛門勤ル

鳥越おたツおまつ連来テ目の治療頼む

夕方飯ル 岩瀨久右衛門来テ石井一件勇平来テ金壹両式歩二而

濟寄候由咄入至而田取易く相濟申候

廿一日晴天 暖氣昨夜ヨリおみつ

不快二而尾林勇六方今日不下由申遣ス

昼後御閑式本壹匁四分唐盾子壹本二而

買求ス尾林ヨリ痛強由申来行

竹五歩餘出ス田中氏ヨリ中野氏

勘兵衛弥助跡岩助方生木久平方

兩人見舞飯ル此夜おみつ痛く

徳地おツた呼二遣ス横井申遣斗り

〔一九丁表〕

二而見合伊六昼後來ル藤右衛門

桃太郎勤ル跡田江糲種かえ二遣ス

留主二而不分飯ル前ツる行九部武市江

札百目貸ス

廿二日曇天 跡田ヨリ糲種畔越壹斗

持来テかす上治八方おわえおまん

今野久助娘来テ昨夜ヨリ風邪二而頭痛

口瀉之由鳥越おまつ此日宿元来ル

おツた泊ル

廿三日曇天 昼後岩瀨久右衛門方

見舞掛ケ幸平見舞飯掛り五右衛門舌之

痛ヲ見而万助方立寄飯ル鳥越おたツ

〔一九丁裏〕

咄し二来居岡半六方見舞飯り二徳平

見舞おたツ夕方飯ルおまつおたツ明日

引取之程此夜信行寺ニ泊り二行親父

今朝ヨリ風邪昼ヨリ勤ル萬里の

伊八来ル栄四郎仙平證文書之所出来不申

廿四日晴天 朝霧深し国崎ヨリ注文原

買手二頼む落合庄兵衛奥山二而山鳥を

打候處横居ハ新市肱ニ当ルかすりきす

出来但五寸斗りくゝる下ヨリ上江玉上り

テ抜候故岩ニすり又足元ニ而すり上候

故と存申候夫より簡平方庄兵衛

小竹栄四郎方周助方江立寄飯ル頭

痛強く所々立寄候所二而休息致し飯

候所奥畑ヨリ病用申来居候へ共自分

〔二〇丁表〕

不快殊ニはえ風邪二而行不得八屋ヨリ

薬屋おたツ三十五日佛事使り来ル御許山ヨリ

佐吉節分御祈禱持来ル

廿五日晴天 養民はえ風邪昼前ヨリ

養民頭痛強く寒氣益終日

食事不進寺川内健兵衛来ル

廿六日晴天 此日養民はえ大分宜ク

今行江頼母子掛札為持南庄藏

遣又不快二而不出頼母子三步掛ケ

之所二座三尾母氏貰ひ二而下屋形二預

此方共取附二而六十八匁五分売貸三番

座今行三河貫樋田組下屋形ヨリ此方預

〔二〇丁裏〕

取附二成ル健兵衛東谷祖母死去之由

二而夕方販ル此日燕鳥之巢拵遣ス

廿七日晴天 新造おいつおまつ作造

おふい親父秀之丞風邪二而伏

伊退迫並左衛門二金五兩丈ケ渡ス小太田江幸八方

頼母子二風邪二行手無く春二掛札頼遣ス

九部新太郎江養民金四兩かす但武市二

渡ス證文預ル長崎森田屋唐物持来テ

札四拾六匁丈求ル当日宿元御講座前

之所元正寺留主二而明二延而谷の前

類平嫁治八方来りおとえ連来ル

養民頭痛二而不出

〔二一丁表〕

廿八日曇天羅漢寺ヨリ典座受戒會

便二来ル山口圓仲来ル雖立ルお杉江

古大裏一對遣ス此日生木実蔵方家

昇移ス順助屋敷也宿風引皆々

起ル昨夜前鶴与平下の道二而馬之尻

追失ひ南之畑二居候□四ツ過二新造

見附丈屋二入置候所幸六おきか類平

来テ連販ル養民此日頭痛二而不出

春ヨリ金子持来ル鬼面一ツ夕方販ル夜雨降ル

此夜御講元正寺来ル丈八半六斗り

廿九日雨天 樋迫栄四郎機の迫江

金子持行朝元正寺二月忌

頼ス昼後木栄丸拵夜迄仕舞

〔二一丁裏〕

藤右衛門販ル伊六来ル節平勤ル風邪二而

不出桶屋弥六夕方来ル

晦日晴天 晴落合庄兵衛元右衛門来ル前鶴

勇平来テ札五拾匁利分之内入ル参之

連圓拵鉢宝積寺来ル昨曲堤兼四郎

三月朔日曇天 昼前ヨリ雨降出ス

菊苗植替坪花畑風呂場前迄

土入替朝生木半平小児痘瘡二而

今朝ヨリ差重り実蔵呼ニ来テ行く

内攻之模様二而悪し四ツ時分久平

来テ只今相果候由はえおみツ

腹痛おまつ信行寺二行

〔二二丁表〕

豊助伊平和平生木松平江先年

米老俵貸不取由テ来ル桃太郎飯ル

伊六勤ルおみツ平肝流気飲はえ

浄気取播磨屋江注文幸蔵二頼又夜

不断雨降ルおみ夕方ヨリ大分軽ク夜半時

一度痛夜併傍九部武市風邪之

由二而光平頼来ル

二日雨天 朝寺川内健兵衛来ル田口ヨリ

成恒後徳内昨日九ツ時火急病二證二而

死去由申来ル皆々風邪不行

香奠斎米田口下男二頼むはえ

此日大分宜おいツ時々少々痛候共

大分宜おいツ昨夕飯前ヨリ頭痛寒氣

致し折伏伊六朝飯後ヨリ跡田ニ

〔二二丁裏〕

遣ス中須仁右衛門戸吉風邪之由申来ル

おまつ信行寺ヨリ飯ル昼後伊六又

東谷江行桶屋弥六飯ル直二来筈

二而道見置也札拾勾遣ス生木吉次郎

下濱治郎政市南庄治郎名改二来ル昼

前二中須戸吉見舞雨天殊風邪

不全快之故出不申南庄之藤右衛門

田地伐徳地江預ル利一割二而頼利分丈庄之

預り二相成候由

三日雨天 昼時分ヨリ晴天二相成信行寺江

諫山風来師来ル羅漢来詣人少し

谷ノ前鉄平夫婦上おとえおまん宇野江

行昼後落合庄兵衛方庄助跡上矢櫃

豊助方見舞健兵衛勤ル伊六夕方

飯ル藤右衛門勤ル親父信行寺ニ参ル

〔二三丁表〕

昼ヨリ夜迄遅ク飯ル新蔵前鶴与平方二

行縁段一件也

四日晴天 健兵衛勤ル中迫市右衛門来ル店ノ

下二而件の羽織一枚頂□い来ル藤右衛門勤ル筑前

四国岩尾四十八日日参此日仕舞少時談

致ス谷前邊東御坊大門木出し

尤樋田ヨリ諫山迄也おみツ此日胸痛二而

打伏柴胡□□鉄兵衛岩瀨二泊二行

五日時雨 朝雨降ル朝健兵衛寺川内

飯ル治八来ル鹿肉代五勾八分遣又昨日

中津御家中方八人青ニ御出二而鹿狩二綿丸山

治八走ニ行尤東谷江獵二来居遅ク

〔二三丁裏〕

相成外千代助安太郎儀平新太郎少々

遅ニ行鹿老勾取候而直ニ御引取

之由庭戸拵替羅漢参少し

昼後二通り候迎ニ落合おみか母来札百目

持飯ル但みか給銀也十勾札九枚五勾札老勾札

五枚也生木久平鉄輸入湯井原京平

行由小川内おツや□□ひ持来ル昼迄遊

昼後親父おまつ信行寺ニ參ルおみつ又

々胸痛夕方迄無休息おツたおうね

申遣又共風邪ニ而兩人共不来七ツ時

藤右衛門横井ニ遣又留主ニ而不来明朝来

呉候管伊六咄寄置尤おみつ腹痛強く

相成候へ共又々横井江申遣又手当也

秀之丞痘瘡之様ニ面江一ツ躰江

〔二四丁表〕

十斗も出来白熱ニもおまつ親父夕方

販ル夕飯過ヨリ少々おみつ休息夜半時分

又々少時疼養民小腹痛腰ニ掛ケ疼

おみつ此夜度々一角用也

六日晴天 朝羅漢寺ヨリ寄帳ニ久福寺

和尚来テ千年拙宅江羅漢參詣ヨリ葛

原華藏寺受戒會戒主和尚長府

活山寺石典和尚足痛ニ而止宿ニ

咄し致候所尚時此和尚者加州大聖寺

住寺之由尤大徳之由中国ニ而説法

之節和尚拙宅江泊し事咄し候由

〔二四丁裏〕

七日晴天 朝親父田中ヨリ成恒寺

七日目也佛事ニ行おみつ此日朝後ヨリ

何分快方無之七ツ時分ヨリ節平

横井ニ遣又おいつ受戒ニ入候故昼後

新造春ニ行掛ケ連行小□竹治郎

徳地おツた夕方来ル横井五ツ時

分ニ来ルおみつ先刻ヨリ大分宜

飴ヲ食候處腹鳴心下少し下り

候由夜半時分迄啖之致お

みツ夕方ヨリ湯寒少々宛兩度食

此夜不痛店戸棚持行

〔二五丁表〕

おみつ主柴承桂口

八日雨天 此日ヨリ羅漢寺受戒

始ル横井岩渕幸平久右衛門母

見舞呉候様頼久右衛門逆ニ来テ行

久右衛門書附持来ニテ薬遣又昼時

分ヨリ受戒行段々俵ヲ□而行者

多し此雛形附おみつ此日大分

宜方

九日時雨 今朝おみつ又々少々痛

山口太忠ヨリ度々申来テ昼後ニ行

此間おみつ宜敷是より少々

〔二五丁裏〕

宜方太忠脚ニ怪我行掛元正寺

小児ヲ見而行山口氏誰三郎お竹

風邪ニテ見而皈ル圓仲痛見而山口の子供相待居
夕方棄遣ス

十日曇天 おみツ不快ニ付不出

十一日晴天 同断

〔二六丁表〕

十二日晴天 親父青ニ行おみツ又々

胸痛ニ而横井ニ申遣又伊六行昼後

横井来而夕方親父皈ル横井夜ニ入皈ル

此日半時正気天行得用ス夜ニ入大分宜

徳地おツた申遣し来居候所腹痛ニ而

皈ル床並お米来ル藤平方おむツ

腹申来テ不泊ニ行

十三日晴天 早朝親父羅漢參詣

昼後母秀之丞おたえおみち常治郎

おみかおゆく作蔵伊六一同受戒ニ来ル

上畑花ヲ見而遅く皈ルおみツ此日昼

前ヨリ宜敷秀之丞昨蔵昨日ヨリ

〔二六丁裏〕

今日両度来ルお米夕方皈ル

おふい兄久太郎跡江聳入之由ニテ夕

方皈ル

十四日時雨 朝飯養民羅漢寺

石佛造立之逆流和尚佛事ニ付

為招行説法仕舞拜之時分行着玉洞

和尚昼飯後問答有り客殿より直ニ

皈ル行装見事成り齋ニ西玄琳平田

庄九郎高橋水主伊賀寺養事山移社人養

民外ニ山移老人齋仕舞直ニ皈ル

十五日晴天 朝岩淵幸平差重リ

申来ニテ行久右衛門方ニ母見舞餘

兩人共ニ悪し田中氏ヨリ病用

申来ル昼ニ行治八跡田幸助様

〔二七丁表〕

今日下屋形御昼宿元御泊り故案

十六日 晴天

内ニ行掛ケ堂々致ス田中氏老人見舞

尾林勇六茂右衛門方源市母小野

幸市姉伊三郎内女子見舞中野

氏ニ見舞眼ニ外料加へ皈り清水

之元ニ増田様来候ヲ鳥越之坂ヨリ見

ル直ニ御着之所御敷見分之上

御着也

〔二七丁裏〕

十六日晴天 増田氏朝飯後直ニ

御立山方者梅津吉右衛門殿

十七日曇天 昼後ニ落合健蔵方

庄助跡儀平跡利市見舞健蔵

方ニ而休息致庄兵衛新市一件

餘人飯料十日分米式斗代外二札三十

勾遣し多右衛門勝平要平中人二而

相濟し候様頼置候所昨濟寄二

相成候由夫より豊助家内見而

飯ル夜雨降り出ス床並藤平ヲ見舞

〔二八丁表〕

十八日晴天昼後下屋田中氏小野

幸市方二見舞田中二而長八悴疳

病診而幸市方伊三郎悴診而中野氏

二見舞眼外料致し勘兵衛方二立寄

生木実藏方棟上ケ見而飯ル宿元夕

飯仕舞居申候此日おまつ下屋形ニ墓

参り二行泊ル

十九日晴天 此日養風邪二而不出

昨夜中津儀土中の屋敷願込候由人数

十五人

〔二八丁裏〕

廿日晴天 昨日寫田足輕午神僅藏

年寄 平境論ヨリ申上り 平ヲ手

打ニ致候夕方方半六聞来候へ共家内江者

入立不申由昼後今行二見舞

廿一日晴天 昨日岡半六方祝儀也

新藏昼前ヨリ行

廿二日晴天朝落合健藏来ル

養薬図調向之墓之文字

〔二九丁表〕

見二行昼後今行氏見舞外料致ス

大貞二来居候豊後女大夫中野氏江

来居候

廿三日晴天 昼後女大夫夫婦今行

ヨリ書状持来ル中津ヨリ普請奉行金谷

新庄関兵衛殿弟松里龍太郎殿来ル

夜女大夫新かきねめ和田合戦語ル

夕方田口三津造東谷ヨリ飯掛ケ一寸立寄

夕方ヨリ雨天

廿四日晴天 昼後今行五造方二見舞

尾霜立寄三河方留主也田中二見舞

飯ル女大夫昼後山口二遣ス

〔二九丁裏〕

廿五日晴天 今行五造士朝飯後ヨリ

来ル眼外料致ス宿東谷ヨリ

玄琳此日来候間来呉候様申来候へ共

不行夜方下屋形出役談合ニ来ル

廿六日曇天 朝飯後東谷二行筑前

庄頭小栗判官謡之時分二行着西

玄琳此日参候筈ニ而相待夕方

従日田溯萩周平飯ル半兵衛

出来テ談し致ス昼暮打日田

〔三〇丁裏〕

表傳左衛門宇三郎善三郎武平

入牢被仰付今朝相手方五六十人

出牢御免二願罷出候趣此夜泊り

廿七日曇天 早朝落合江玄琳呼二

遣又昼前來り談合致ス宇都宮

縁段一件等之事也昼後販り

掛ヶ豊助方見舞前鶴勇六見舞

販ルお貞來二逆に馬遣ス

〔三〇丁裏〕

廿八日晴天 昼後今行五造方見舞

今行氏二藥凶見テ田中迄行筈

之所遅く相成直二販ル

廿九日晴天 札ノ辻德平母不快昨日

申來ヲ不行此日行崩の鼻岩助

見テ販ル夕方小倉ヨリ庄八新助

販ル談候昨廿五日異国船二艘

小倉表ニ來ル大里小倉之間原二

四十人程上陸野放立致居候午

〔三一丁表〕

一匹牽取候趣又一昨廿七日異船

一艘大橋之□向迄參り直二引販

又夜下之関二掛ヶ居候由尤日の丸

之印立居候由前二艘者大筒

二ツ発し候由右様子故小倉之

大混雜之由大橋之川尻二東者

町中西者武家出家等二而自分

手々二土石等持運ひ武家二者

御家老方も鎗等厚立置一刀

後腰二差込荷或昇等二致候由臺場築上候

池永席吉小原藤太郎來テ泊ル

此日中野氏中津出療治二行

〔三一丁裏〕

新助庄八小倉江又五郎聞合

也

晦日時雨 詣並講休也席吉

藤太郎泊ル養民不出碁打

色々談し致ス此日棟上ケニ而

夜半六嘉助來ル

〔三二丁表〕

四月朔日曇天 御普請仕舞昼後

德地直助方伊三郎見舞藤太郎

席吉東谷二行被~~半~~嘉助

來ル

二日雨天後晴ル 松里氏昼後

下屋形二行

〔三二丁裏〕

三日晴天 此日お町並右衛門□□

□中津重松江眼為見二遣又

四日鳥越ヨリ宇太郎来テ甚々迷惑

手仕方相分不申当方出来不申女一人

一疋連来ル

四日晴天 朝扮久右衛門女子痘瘡

殊外之要敷ニ而見舞飯掛ケ岩淵

幸平見舞飯り昼後二田中氏二

見舞色々之談致し夕方ニ

飯ルお町夕方飯ル金谷ヨリいかを

貰ふ

〔三三丁表〕

五日雨天 落合丈兵衛方おてん

従先日風邪之所日増差重候由

申来ル雨天故不行桶屋弥六

飯ル掛ケ立寄泊ル朝宇太郎飯ル

六日雨天 昼後落合丈兵衛方

健藏方谷前新助娘鉄平

家内見而飯ル床並藤平長久寺二

印形便ニ行桶屋弥六羅漢通り

飯ル

七日晴天 金谷伯母仙之助来ル

尤樋田江先日参り雨天ニ滞留此日

来ル義友一件咄遣也猶

平田此日宗市秋造親父共

〔三三丁裏〕

共ニ行新造夕方飯ル

八日晴天 昼後落合勝平方

周助方健藏谷ノ前新助娘并手迫

お幸谷ノ前ニ而見而鉄平方見舞夫より

上矢櫃豊助方見舞飯ル此日迄

徳四郎おとえおまんお杉八面山閑

帳へ参ル此日ヨリ千代助安太郎新太郎

土持二来ル七ツ時分萬里ヨリ病用

申来テ行老母手の骨折して

直ニ飯ル寺川内堂下ヨリ夜ニ入此日

薬種□丁伊助直ニ遣又親父

夕方飯ル此夜伊六おふい口論

〔三四丁表〕

九日晴天 朝下屋形長八方痛用

申来テ朝飯後二見舞田中老人

見舞飯り二餅貰飯ル昼後扮の

幸兵衛方小兒痘瘡見舞呉候様

申来テ行掛ケ新地ニ而角力見ニ而行

千代助新太郎半平九郎平伊六藤右衛門

作藏人徳地おツた木綿織二来ル

金谷伯母仙之助今朝飯ル夕方

夜下屋形ヨリ松里氏張練御用ニ付交代

参候引取候由ニテ正説聞書返し善

平来ル

十日晴天 千代助武市新太郎来ル親父
母おいツ上治八おりえおまん今
朝出立金輪ニ行鳥越お町

〔三四丁裏〕

阪ル小岩藤右衛門「行昼後竹の子
取ニ床並捨藏連八竹藪ニ行

此日普請加勢武市光平新太郎来ル

節平伊六勤ル要民谷前

鉄平内新助娘落合健藏内

丈兵衛灌太郎おてん勝平見舞

販りニ納言ニ而蟻之合戦ヲ見而

宇野久助此日販掛ケ立寄お

ツた止メル秀之丞月代荆

暮方下屋形林平来テ今行

伊平綿丸御役目場ニ而頭ヲ傷

人故来呉候様来テ行後頭ニ

式寸程打割

〔三五丁表〕

十一日晴天 新藏宗旨御用ニテ

中津ニ行溶花切等色々頼遣ヌ

頭痛ニ而終日不出下屋形長八方ヨリ

申来ル葉丈遣ヌ生木新地也

行夕方岡半六来小床並池土手

割目有候由ニ行見而下屋長八

娘様子申来テ不行順平朝ニ

見舞筈申遣ヌ新造此日不販

夜遅く小市販ル千代助新太郎

伊六貞平節作蔵新地也

十二日曇天 朝飯後下屋形長八

方田中氏今行伸平扮幸兵衛

〔三五丁裏〕

小児見而販ル昼後也小山田来ル

今月朔日ヨリ九日迄於宇佐宮ニ

異国降伏之勅書被下御殿江相納メ御祈禱

有之由尤右ニ付宮社江も

勅使御差向ニ相成候段申来ニ付

先月十六日直ニ大宮司上京也

京都ニ而も遠宿有之候所当時

大名衆御宿ニ而漸島丸殿長や

□申入滞留仕る加茂の

社ニ者異国打拂御評決之上

直ニ 当今様 將軍家

在京諸大名不残夜中ニ御社参

〔三六丁表〕

有之岩清水江者同様昼の

御幸也大神宮江者勅使兩

度御差向之由ニ而宇佐宮江勅旨御祈禱奉幣使

被仰付大宮司勅書持販ル

も来子年三月之由又小倉ヨリ

昨日被引取候由小倉家中之

五十以上者上毛郡江御移之由

町家者日々諸国暇方等下向

旁ニ而人夫ニ難渋仕候由尤一町何

人与申割付之所後家等者割蒙リ

難渋ニ而轉宅多く御座候由昨日

共も三方之先觸来居之談し

臺場出来上り之由新造夜入

中津ヨリ田口通り八面山門帳ニ参り販ル

〔三六丁裏〕

此日新地作蔵節平伊六□□

久治郎国崎屋注文同家ヨリ

鮮鯛壺尾貫申候おみか昼

前ニ販ル

十三日曇天 朝飯時はらはら降ル

上矢櫃文蔵内豆腐油上ケ持来

呉候九部安太郎眼痛ニ付見舞呉

候様申来ル竹田道具屋落合ヨリ

四日市通り掛ケ立寄昼後ニ九部

保太郎見舞落合健蔵内丈兵衛

娘新兵衛勝平谷ノ前鉄平内

内妹見而販ル此日畑成ニ久治郎

〔三七丁表〕

来ル奥ヨリ者不来夕方前田焼土致ス

下屋形ヨリ夫少く明日仕舞ニ相成方

残夫差候外壺人役ニ三匁五分ツ日雇

両様今日中申遣呉候様申来ル夕方

ヨリ曇ル夜五ツ時少々雨降ル

十四日曇天 塵沈位後晴ル

萬里伊八落合一件頼ニ来ル尤

否や之所急ニ取調頼置販ル

九部武市普請ニ来テ下男三人

下屋形役目ニ行候故販ル下女兩人

〔三七丁裏〕

新造召連生木麦小川ニ行お雪

洗濯ニ遣又岡新治郎方お伊勢察ニ

被招昼後ニ富永氏ヨリ書状持来

奥平幸衛殿中間桑ヲ採ニ来ル

当邊一切被採候跡ニ而無し山田

江行候由ニ而札七匁かし候由養民

下屋形長八見舞ニ行掛リ扮下ニ而長畑

久右衛門久蔵腹痛ニ付見舞呉候様頼夫より

□井ニ而中野おさわニ合豊後嫁

一件の談し成り両宮之下ニ而実平

面の腫物ニ針長八方見舞候所

中野ヨリ勘五郎来テ老人吐瀉

〔三八丁表〕

大造ニ而其情内申来テ直ニ行

新五母見而長畑久右衛門方ニ見舞

柳三郎子供痘瘡幸兵衛方

小兒死去送式之所ニ飯掛ル黄昏

ニ飯ル下男下屋形役目行作蔵

式人節平壹人六分伸平壹人七分

十五日雨天 節平飯奥畑ヨリ下男

来ル尤東谷牢入昨夜引取當時者

村預ケ掛ケ相成り村方取調ニ付元々様

今日御入込ニ相成候先觸昨夜半

〔三八丁裏〕

到来何立今明晩御止宿ニ相成

可申由刀掛り取ニ来ル昨日中津

奥平幸衛殿御中間之咄ニ中の屋敷

先日御上京ニ相成候由又水府之

侍分 人中侍 人出走致し

諸国江入込居候由上々方御咄しの

よし為何義共相分不申

西猛四日市ニ行掛ケ立寄昼致候行

桶屋弥六来テ落合ヨリ荷取飯ル養民

落合健蔵方ニ而孫市内同子供見而夫り

弥六立丈兵衛方ヨリ勝平九部保太郎谷前

鉄平内上矢櫃豊助内見舞飯ル此日下矢櫃

善平方深水江入縁ニ而嫁迎ニ来狐平

通候ヲ見而弥六同道ニ而飯ル作蔵伊六

新造下畑成ニ行谷ノ前百治郎方ヨリ小山田

〔三九丁表〕

手記持飯ル伊豫ヨリ夕方立寄

十六日晴天 岡七治郎雇麦衛女ヲ

色々雇候へ共雇出し不申長治郎居

播磨屋注文今行勘五郎塚原ニ行掛ケ

立寄落合丈兵衛方ヨリ茄子苗貰分□

昼後ニ中野氏見舞勘兵衛家内診而田中氏

見舞此日下屋形用水仕舞ニ而昼後出役衆

引之様子六郎腰痛診而長八方見舞飯掛ケ

生木下普請ヲ見而飯ル石井邊之人湯人飯り

宿元入湯人共今日出立日出通り飯り候由之

聞夕方茄子植貝返し房治郎腹痛ニ而来ル

光治郎春ニ遣又武市新太郎来ル

生木麦取込

十七日時雨 早朝一ツ石弥八来テ徳助昨夜ヨリ

〔三九丁裏〕

吐瀉強候由ニ呼ニ来テ直ニ行儀平内同

おたつ診而岡平政右衛門診而飯ル此日伸平

飯ル節平来ル長治郎今行氏刀取ニ遣又

昼後徳地圓平方伊勢察ニ行夕方

親父母おいつ藤右衛門治八おわえ

おまん入湯昨夜立石宿りニテ
宇佐江参り飯ル

十八日晴天 朝山口ヨリ病用申来ル
屋後一ツ石徳助方見舞山口雄三郎
疝気お竹診而太仲江立寄尤雄三郎
方少時談し致候所ニ深水新斎罷候而
又々談し致し先ニ飯ル疝気与癒ヲ

〔四〇丁表〕

兼居ニ付重方五積□加柴□竹□瀉
痢水銀刺談合致深水頼置落合

孫市小兒差重ニ付宇洞良平山口迄
逆ニ来テ萬里通り勝平方多右衛門
おてん新兵衛見而孫市ニ行発班症
難治申聞一角犀遣又健蔵方ニ

立寄宮ノ前ヨリ狸出候而谷ノ前向ニ而友市
打殺申候由鉄平家内同妹見而豊治郎
同道ニ而上矢櫃豊助内見而飯ル夜ニ入ル
十九日曇天 昼内雨掛ケ洗昼後ニ
跡田量蔵中取雇ニ来ル追雨降出又
下屋形長八見舞ニ行寛三郎小兒餌屋

〔四〇丁裏〕

元助見而飯ル此夜吟味役宿元泊り田邊
中尾役目調也畑道中小川畑成ニ武市
新太郎健六来ル長治郎松治郎居ル

今朝未明ニ新造作蔵入湯ニ行

廿日曇天 朝吟味役風邪之由ニ而小青竜
煎遣又量蔵屋後ニ飯ル椋の木新助娘
雇ひ約束ニ成ル中津柳忠左衛門ヨリ書状持参
近邊之中間来ル中の屋敷土手□□市左衛門様
御上京昨十七日御出立之由おつた入湯聞合ニ
来ル養民屋後ニ落合ニ上ル孫市小兒
健蔵内秋兵衛おてん勝平多右衛門

〔四一丁表〕

診而此日きくの長八方参候由ヲ上り口迄
出浮おたふ待足し居ル上矢櫃茂右衛門
内腫物ヲ見而豊助方立寄飯ル

廿一日晴天 昼後養民下屋形長八方見而飯
田中氏立寄餌屋元助見而飯ル但長八
何分相勝不申明朝横井可申遣由書状認置
養民夕方強く悪気致し夜ヨリ齒之此日江戸
金輪便り来色々咄し致ス
廿二日晴天朝谷ノ前鉄平内胸痛申来
直ニ不得行養民頭痛齒痛ニ薬丈
遣し置休息致し昼前ニ行尤烏賊

〔四一丁裏〕

飲申由ニ服之模様也此日千代助安太郎
新太郎来ル畑成上土□養民屋後

下屋形江横井来候由二而行柴付取相談し
相成飯掛ケ生木嘉助母老病之由二而見舞
今晚位之様子此夜矢張頭痛齒痛之
子供何も咳強し

廿三日晴天 昼後落合健蔵方新兵衛
おてん孫市内勝平多右衛門雄蔵

同妹見而□谷忠右衛門方鉄平内堂妹上矢櫃

茂右衛門内豊助内見舞飯ル嘉田添ケ鶴

一枚麦加り前田丈取込昨夜生木嘉助

母九十三才二而病疝無自然二死去夜

新造從鉄輪明日入取之書状

〔四二丁表〕

来候下屋形之者持飯ル夕方ヨリ曇ル

廿四日曇天 朝添ケ鶴上ノ町苺取込長八

伊六藤右衛門丁治郎多葉粉茄子苗植ル

此日道中春苺揚郷目付衆宿元昼養民

昼後扮傳六方見舞女子悴久平小兒弥吉

女子小兒診而治平方見舞今行嘉助娘診而

下屋形長八見舞元助診而飯ル少之雨

降ル暮方新造作蔵鉄輪ヨリヨリ飯ル

廿五日曇天 丁治郎伊六居節平来ル宮

ノ前畑ひえ作り養民不気分齒痛

終日不出調合所掃除致ス

〔四二丁裏〕

廿六日時雨 長治郎伊六藤右衛門節平
居ル前田畝切作造耕屋前今行

嘉助娘痘瘡悪敷申来テ昼飯仕舞

行下屋形与平方二而田中老人咄致し

長八見舞弥増相衰元助方立寄

嘉助方立寄扮弥吉治平久平傳六

方見舞飯ル此日播磨屋注文店二而

麦こき始ル鳥越ヨリお町来ル尤

並右衛門入湯飯り掛ケ同道也

廿七日晴天 朝飯後今行嘉助娘痘瘡

重く相成候由二而直二行嘉兵衛悴連来テ

見而扮弥吉久平次平方立寄飯ル昼後

〔四三丁表〕

谷前鉄平内同妹見舞おたい重く

相成落合健蔵内見而休息致し

新兵衛おてん勝平同悴雄蔵内姪

文右衛門倅孫市内見而李治郎一昨日

奥畑江蓑賣二行橋之下江賣奥畑テ酒

呑飯ヲ貫川端倒即死之由夫より

上矢櫃茂右衛門豊助小竹周助悴見而飯ル

夕方白□茂十郎来ル夜伊六下女与

口論後謙斎飯ル麦ヲ苺内吹流建ル

夜おいつ腹痛

廿八日晴天 朝馬伏飯後茂十郎飯ル

迫壯兵衛毛鎗料包遣又昼後扮久平

弥吉方病人見舞今行嘉助方見舞

掛り折戸ニ而元助娘連来診ス

〔四三丁裏〕

嘉助娘大分宜敷下屋形長八方

見舞一昨日ヨリ飯少々ツゝ納り之由也

今日者大分脇刀出来之方生木嘉助

方老母市ニ立寄半平実蔵屋敷跡

見而飯ル藤右衛門節平居ル

廿九日曇天 朝宇洞両平来ル母不快之

由申来昼後堀田の下ヨリ大根川嘉平

同道ニ而宇洞迄行良平方ニ而曾平

良平針治夫より落合勝平父子

雄平文右衛門忝おてん新兵衛源道

同女子孫市内健蔵内見而一寸休候

谷ノ前寿助娘差重り之由ニ而寿市尋

廻り候由ニ而行相果候段也直ニ飯ル宿元

〔四四丁表〕

四月振敷夜雨はら々々振ル

五月朔日時雨風吹 為右衛門飯ル節平

居ル長治郎来ル庭生垣摘掛ケ置

岩渕おつる麦こき加勢夕方飯ル岡平ヨリ

木仙初物貰

二日曇天 扮口ヨリ病用申来ル節平

飯ル丁治郎居昼後扮久平弥吉元助

小市柳三郎方見舞何も痘瘡久左衛門方ニ而

猫子ヲ見而扮口順平方妹山留利平

見舞中野氏中津ヨリ引取居候ニ付立寄

色々談共致し勘兵衛嘉助方ヲ見舞

利助方嫁見而下屋形長八方見舞候所

〔四四丁裏〕

高田□来居ニ而酒出し談し致候

者大分宜敷宮前田中老母口中痛候由ニ而

相待針致ス清水の下ニ而治八中津ヨリ飯し連

同道致ス扮ヨリ先ニ飯ル貝返し吉平嫁

腹痛ニ付節相待居候所々十三人文薬調

遣候

三日曇天 畑小麦茹昼後ニ貝返し

市右衛門方見舞飯りニ孫右衛門見而良平母出

浮見遣又落合勝平父子見而雄蔵方

源市方ニ文右衛門忝尋候所留主新兵衛お

てん源造父子孫市内見而健蔵ニ而休

息谷ノ前鉄平内見舞飯ル飯時分之

今行利平差重り申来候へ共薬斗遣ス

〔四五丁表〕

早朝行箬ニ申置

四日曇天 四ツ時分ヨリ雨降ル飯後ニ山百

行掛ヶ岩測通り扮口順平妹見而山留二行

利平昨夜ヨリ者大分宜敷折三郎方小市方

元助方弥吉方久平方ニ尋候所遊二行由

傳六方ニ而猫子見而販ル豊田梅田両氏

宿元御居昨日ヨリおいつ腹痛水和取

遣ス昼後齒痛氣分悪敷終日不出

雨降ル此日昼後伊六来テ下女と口論

一件咄ス

五日晴雨 昼後ニ扮弥吉方柳三郎方小市方

元助折戸清助方萬治見而今行

〔四五丁裏〕

勘兵衛嘉助利助方ニ見舞下屋形長八

見舞田中氏立寄販ル夜半ヨリおみつ

腹痛一度吐し大□□□一貼用一角

相用少々痛□ニ付小兒共ニ伏候

此日朝飯後藤右衛門販ル昼後ニ伸助来ル

六日曇天 此日山田田植昼後ニ落合

玄造娘見舞宇洞良平母孫右衛門ヲ見而

見返し市左衛門悴腫物針勝平治八

灌太郎妹見而孫市内見而健蔵内見而

酒ヲ出し谷ノ前鉄平方打伏落合

林平頭テ疵出来テ□葉遣ス

〔四六丁表〕

七日時雨長八方田植不出粉葉

拵

八日曇天 長八方田植おふいおとえ

遣ス不出粉葉拵

〔四六丁裏〕

九日時雨後晴ル 治八方田植おみかおとえ

作蔵馬八昼ニ遣ス昼後下邊ニ致筈之所

出掛ヶ小川内宇平来テ豊之急病之由ニテ行

霍乱之模様之所様子至テ悪敷診察之所

脈等診テ逆冷煩悶包ニ而色々施治之所終

不治火急之事共也併病人ニ承り候へ共下血多く

由崩漏ニ而相果候也夫より寿助方健蔵方玄造

方見舞販ル

十日雨天 庄之蔵田植昼内おとえ昼後

おみか昼ヨリ遣ス昼後ニ今行嘉助方

扮小市柳三郎傳六方見舞下屋形者

見舞田中氏立寄販ル

十一日晴天 朝ヨリ夕立雨昨夜ヨリ雷鳴ル

〔四七丁表〕

此日宿元田植加勢人三拾五人添ヶ鶴ヨリ

前田迄植ル

十二日晴天 此日氣分悪敷終不出

十三日晴天南おはき此夜々重く相成り

昼後ニ上矢櫃豊助方谷前寿助方落合

健蔵孫市玄造用助多右衛門治八方ニ

〔四七丁裏〕

見舞九部光平母中氣之由ニテ先ニ此用江
見舞飯り落合通り夕方小畑平八
母肩前骨折り見舞

十四日晴天 節平飯ル昼後今行嘉助

方ヨリ勘兵衛子供見而勘兵衛方ニ見舞掛り

清八方小市柳三郎方傳六方ニ見舞飯ル

夜谷の前ヨリ寿助内差重り申来候へ共

腹痛旁ニ而不行藥丸葉等遣し置

十五日晴天 新造腹痛親父寺川内

勘助源助湯組中与不居合ニ付立入ニ行

夕方飯ル宿元生木畑成田植下助中鋤致置

所干□上一枚こそ水有り而大差支加勢人

植おとえおりえ長八おさわ南小市正次郎

小畑おつるお順雇ひ丁治郎下男伊六藤右衛門

作蔵此日植仕舞ニ成ル夕方小畑平八

〔四八丁表〕

母池の下邊ヨリ落候趣申来テ行方前骨
折りし大痛故佐知逆戻り来候由

十六日晴天 朝今行嘉助忪不快申来テ

行字平方折戸清八山下小市方病人

柳三郎女史傳六忪見舞猫兒貫飯ル

昼後二谷前ヨリ寺川内□積り之所前田ニテ

奥畑ヨリお貞不快申来寿助方ニ見舞東谷ニ趣

候夕飯仕舞落合孫市内見而健蔵

ニ而休息夜半ニ飯ル此日徳地ヨリ此邊近休ミ

十七日晴天 昼内足旁昼後寺川内

堂ニテ休息桜峠跡助忪見舞山通り

桐の木ニ倉蔵見舞飯掛り堂の下ニ而弥

三助眼病ヲ見而飯ル夜下屋形長八

大便不通難渋之段申来ル風強し

昨日ヨリ川水無数与相成畑ヨリ田共皆干田ニテ

廻り水ニ成ル

〔四八丁裏〕

十八日晴天 昼内五黒葉拵三里ニ而火

生木半平梅持来ル昼後ニ扮傳六方

見舞伊助忪眉尻疔磨ニ針ニ而柳三郎

小市折戸清八見而下屋形長八方ニ見舞

灌腸田中氏立寄元助ニ針腰ニ□迄

今行林平宇平嘉助方見舞小兒至而重し

勘兵衛方ニ立寄山留ニ登り子供ヲ見而

利平扮の口不参候と聞違イ不見ニ扮

口重平見舞岩渕通り飯ル今行

通り之時分雨はら々降ル此日今行

下屋形休也

十九日晴天 昼後小畑平八母見而具返し

節平見而落合多右衛門おてん玄造

〔四九丁表〕

女子見舞堂下二而孫市首製骨健蔵

外孫市内見而寿助方家内不残打伏

上屋櫃豊助内見舞飯ル此日鳥越ヨリ

儀平来ル廣津伊平竹御用ニ来

テ泊ル葦莊衛門夕方少々曇り出ル風強シ

国崎屋注文九部儀平ニ頼ス

廿日晴天風強シ お町儀平中

津江出ル中屋伊助麻生ニ超ス

昼後ヨリ大雨ニ而川水大分増但一時

雨ツゝ時々降ル粉傳六方伊助悴

柳三郎小市清八今行嘉助悴

利助宇平方ニ見舞岩渕万助

悴足之腫物針並右衛門生木迄来テ

〔四九丁裏〕

遅ク成飯ル今行嘉助悴此日夜明方

相果候由夜雨降ル

廿一日晴天 朝寺川内健兵衛内妊娠

之所腹痛小産氣遣く由申来行

桜峠跡助悴見而飯ル昼後今行宇平

小兒痘瘡變症之由申来テ直ニ行林平

方小兒見舞石井久助悴痘瘡ニも可相出

申来テ行掛り田中老人ニ廣瀬ニ而逢石井ヨリ

直ニ折戸清八方若林庄八方見舞飯ル

此日生木嘉助方畑成植仕舞夫より谷前

寿助方見舞飯ル調合掃除致ス

此朝伊六飯ル藤右衛門来ル

廿二日晴天 朝下屋櫃おかつ来テ上矢櫃

豊助組合不和合之談し致ス節平

〔五〇丁表〕

此日来ル昼後今行鑄掛ケ子供痘瘡

差重り申来ニ而行蛔虫ニ而腹痛穀虫下

相用灌腸致積りニ而大こイハ取飯又聞々

下屋形長八林平方ニ見舞灌腸致置

中野氏ヨリ山留扮口重平柳三郎

小市傳六方ニ見舞伊助悴面疔

張替致し飯ル宇平方女子虫

式十斗り夕方下り氣分立直り之由ニ而

飯少し相用候由此日跡田ヨリ木綿

生木弥平ヨリかます三尾貫ふ節平

来ル

廿三日 朝飯後ヨリ雨降ル今行

鑄掛ケ宇平娘昨夜半ヨリ又々重く

相成候由申来行中野氏見舞昨日

〔五〇丁裏〕

約定致置金式両貸ス夫より

勘兵衛方見舞折戸清八若林

庄八見而飯ル此日九部おとえ飯ル

昼後谷前寿助方見舞同庄八方

落合健藏方二而孫市内見而おてん

玄造娘見而圓平悴二腫物針古屋敷

吉兵衛小兒頭の腫物針舁ル此日昼後二

晴ル

廿四日晴天藤右衛門舁ル昼内薬袋

拵昼前下屋形善六急病申来テ昼

飯仕舞直二行挿入便又右衛門同道也武八

母皆腫物針又右衛門腹痛二付粉薬遣

長八方見舞今行林平玄平方二

〔五一丁表〕

見舞女子痘瘡差重り私出ル折戸

清八方傳六悴伊助悴幸兵衛女子

小市妹柳三郎女史見而扮口重平

見舞順平同道二而舁ル生木下二而

嘉助腫物ヲ見而此日半平嘉助畑成

仕舞之由平八方ヨリ舁掛ケ角平

足之疔ニ針此日板木江行箬之所

遅ク成不行播磨屋注文小畑来

頼ス

廿五日時雨 早朝椋の木久三郎悴

腹痛申来テ不行薬一貼遣ス今行

鑄掛ケ小兒今朝大分相直り候由申来

灌腸蜜等遣ス寺川内健六急病

〔五一丁裏〕

申来行箬之所奥畑ヨリ宗右衛門

来り尤跡田一件昼頼母子当座

切相譲り此日座役二而新造行今行

五造土東邊二行掛ケ立寄小兒不快

見舞呉候様頼行昼後奥畑□

舁ル秀之丞同道二而行養民直二

今行五造土娘喜市方二而嘉助娘

喜市妹宇平方二而林平娘見而舁ル

薬調合致置板木周平方寺川内

健兵衛方二見舞健兵衛方二立寄舁ル

寺川内明松ヲ貰ひ舁ル谷前二行

箬之所行不出夕方扮口重平因果

之由

〔五二丁表〕

廿六日朝雨降後晴ル田草取加勢人

岩渕久右衛門作平文平吉右衛門傳三郎保平

一ツ石弥八儀平徳地おつた木綿織二

来ル昼後谷前寿助方庄八方友市

今朝半夏持来呉二付立寄代式十三匂五分

遣し置忠右衛門家内見舞舁り直二下屋形

田中氏立寄尾林武八見舞かしや善六

召連長八方見舞今行喜市宇平

中野氏二立寄新□造昨日跡二行昨夜ヨリ

水当り之由二而下利致候様二聞勘兵衛方

折戸清八山下小市柳三郎傳六方

見舞飯ル国崎屋注文南庄之頼候

鶏三羽上治八方遣ス

廿七日晴天少し曇ル 節平飯ル伊六

藤右衛門来候昨夜ヨリ親父少々暑当り

〔五二丁裏〕

早朝藤右衛門跡田江新造便聞ニ遣ス

大分宜敷昨日青迄来り今朝飯筈之所

夕方ニ飯し候由申飯ル暮後其夜立立「訂正」 「養民暑当不来テ不

出」致ス菘井葦八右見舞令術嘉助女其葦平

廿八日晴天 女其葦後小川内喜八内谷前寿助

方迄見舞飯り掛ケ石場伊助家内江介

保能只様申置飯ル此日宮木出し

廿九日晴天 昼後石井幸八方今行

嘉助女子宇平女子中野氏勘兵衛

方見舞中野二而やせ馬栄垣ニ出ス折戸

山下小市妹柳三郎女子傳六悴

見而飯ル遅ク成ル此日昼後大夕立雨

見合出ル

廿晦日(ママ)晴天 早朝親父春ニ行昼後

〔五三丁表〕

青ヨリ小兒不快申来テ行至□□□□也

御幡伊東屋飯時ニ行着漸々重ク

相成り伊東直ニ飯り御幡七ツ時分飯ル

夜四ツ時分伊東江薬籠持參ニ而来様申遣ス

直ニ飯ル畜弱出候ニ付薬調合致ス此日

相替不申様民玄有止宿

六月朔日晴天 青小兒依然尤今朝者

漸々相衰方玄有同滞留昼後死去

致し同道ニ而樋田通り伊東ニ而休息

雨降り出ス田中氏ニ立寄石井幸八見

舞扮傳六方見舞飯ル石井ニ而相尋候所

宇平小兒昨夕方死去今朝早く連飯り

候由ニ而今行江不来直ニ飯ル宿元者

田草取徳地源平おとねおとえ圓平

上矢櫃豊助紋平喜八和平 加勢

〔五三丁裏〕

二日晴天 昼内不来分夕方宇洞

良平母見舞貝返し房治郎方ニ見舞

豊治郎利平女史見而利平田草取

候所迄行東谷日田行之様子相尋九部

光平母見而落合健方ニ而庄兵衛父子

見而新助方ニ見舞家内五人病氣

忠右衛門父子来テ見テ遣ス源三郎見而

寿助方見舞治郎右衛門方ニ圓正寺伴増

見而喜八参居家内も咄丈ケハ治り候由

明松ヲ燃し飯ル

三日晴天 諸病除龜頭今朝仕舞
東谷江秀之丞衣物節平飯二頼之
遣又藤右衛門来ル昼後雨降出ス
半夏杓斗杓合五メ從不出

〔五四丁表〕

夕飯仕舞居參青ヨリ大内室
店二而火急ニ病氣差起り候由
申来テ直ニ行藤右衛門連行店ニ而
川邊客人与ニ階ニ而談候内氣分
悪敷色々入葉等相用内御幡氏
横井伊東江申遣し參居中津江者
謙齋留主なら者大江隠居之差圖ニ任
可申便遣し秣東谷江申遣し
夜半ニ三郎右衛門お貞来ル鷄鳴過ニ秣
謙齋野地ヨリ同道ニ而来ル續命取
投劑

四日晴天 昼後ニ横井御幡飯ル謙齋
咄又当月昨日下関ニ而萩若大寺船ニ而
見分之所異船杓艘入来志方ヨリ相囲

〔五四丁裏〕

之所間ヲ逃去ニ而大筒ヲ打掛ケ候所萩船
一艘之ともを打崩し外ニ艘も没し
候由兩人異船江□附杓人者海ニ没し
杓人上江登り込候由又先日笠松ニ而

旅僧兩掛為持參り代八郎方ニ而座敷ニ
上り借金利合米相借所聞下の関悪者
目赤し打殺し高札建置候者自分之由
又外ニ七人程生置而者萬民困窮
之者有追々打殺可申由右播磨屋

高利を取候故役人共ニ不逃様ニ致置様
申附置候間此度同州延岡迄參り販り
立寄との咄ニ夫より庭ヲ下り石を抱床の
前ヨリ下り向前ニ置手ニ而ニツニ打割為見之由
直なら者式十表持為見候由申候由直ニ立出
其後立石ニ而御菩提所の鐘ヲかし呉候様
申自分下風之庭門テ龍頭ヲ持提廻り
〔五五丁表〕

門外ニ持行すへ置直立去候由又下ノ関之
義士三百人參り内三人頭取杓人者
尾道物外和尚杓人者毛利杓岐杓人
謙齋名面失念之由以前之笠松江
參候僧も立石江參居候浪人見知居
是者物外之落し胤之由浪人笠松
庄屋江參り談し候由

夕方伊東飯度ニ付養止宿伊東も
夜四ツ時分飯ル未明ニ東谷三郎右衛門
同道ニ而跡田ニ分立飯ル終曲
五日晴天 終日眠氣□旁氣分

漸夕方成今行弥市方宇平方

嘉兵衛勘兵衛方庄屋二見舞勘兵衛

方二而焼酒吞こつを繪テ食飯ル

打談かり飯ル

〔五五丁裏〕

六日晴天 昼後時雨宇洞良平

九部光平母落合二行掛り寿平

悴見而庄兵衛悴おむつ眼を見

忠右衛門新助方見舞候所おみつおたえ

常治郎保め作蔵東谷二行丁度

雨降出入夫より現三郎寿助方

治郎右衛門伊平方二見舞飯ル

七日時雨 昼後寺川内与平家内

見舞重平内頭瘡之由二而立寄ル

夕平小兒胎毒健兵衛方二聞致し

飯ル親父春二見舞夕方飯ル

〔五六丁表〕

八日晴天 夕立模様昼後青二見舞

掛り横井二立寄春の店二而七従一貼お貞

とのへ五積散二貼伊東参居治市郎

君文遣又君碁打御幡文貞参居

夕方迄休ミ樋田通徳間甲斐方二

立寄小野幸市伊三郎家内長八方

石井幸八方見舞灯燈かり飯ル

九日晴天 昼内今行嘉助喜市

宇兵衛源七嘉兵衛作平中野氏

扮龍三郎方見舞小畑平八方見舞

飯ル昼後宇洞良平九部光平

〔五六丁裏〕

谷前忠右衛門新助源三郎寿助

菅野治郎右衛門伊平方見舞小竹栄四郎

方前鶴夕平方二而寺川内善六便毒

針飯ル此日中津ヨリ来廿八日迄之内上之

様御殿向御普請二付領中大工共不残

御呼出し之廻文来ル新造昼前二

田口祇園二行

十日晴天 昼後扮柳三郎方今行通

勘兵衛孫嘉兵衛悴腕の腫物見源七

母見而石井幸八見舞下屋形長八

同人悴見舞原井通り小野幸市

膝二針療し伊東氏原井江参り飯り

掛ケ伊三郎方立寄居二付不寄直二同道

樋田宮之邊二参候所青ヨリ又々御内

室心下差込可申急便参り養民

〔五七丁表〕

先二急キ行伊東葉籠持後ヨリ来ル

追々横井御幡来ル柴亮秋相談二成ル

夜分二相成り少々泊り候へ共金苗

役診中津御滞留二付双方共逆二遣ス
何も止宿御幡横井昼後二皈ル尤も
役頭朝御皈り金苗昼前二来ル養民
玄有止宿夕立致ス大砲響聞

申候

十一日晴天 夕立時二致ス平田酒屋

良兵衛仕昼後謙齋参り候上者將

義困碁等始ル昼後二御幡皈ル

横井夕方皈ル

〔五七丁裏〕

十二日晴天炎近来至強し夕方二

謙齋引取候由二而相待候所大夕立二而

養民七ツ過時分皈り小野伊三郎内

幸市長八方与平子供石井幸八

方行源七方母見舞夜二相成り嘉兵衛

倅針致し勘兵衛内孫連来二見而

夫に柳尾通り皈ル遅く相成ル秀之丞

常治郎おみつ昨夕夜入皈り候由

十三日晴天夕雨致ス 山口ヨリお竹病氣

申来テ庄市薬先二持行昼時ヨリ

行桜峠二而休息致し而行此日直二

飯笹之所何分病症悪敷止宿

〔五八丁表〕

此日山口村此夜察候雄三郎実家兄

至而大病二而昨日来候由留主也

十四日晴天 早朝引取候所萬里保兵衛

方ヨリ病用申来朝飯後出立二而萬里

通り皈ル岡半六萬里尻二而郡治郎

初入連行皈り逢保兵衛見舞落合

雄藏方姪健藏娘谷前忠右衛門方

新助方源三郎見舞中樋長平内

鉄平寿助菅野伊平治郎右衛門

見而皈ル池永善藏藤太郎来居

昼後堤清吉林平女子今行勘兵衛方

嘉兵衛倅源七母石井幸八惣八

小兒下屋形長八与平方立寄皈ル

尤昼後月代致し候故皈り遅し

〔五八丁裏〕

柳尾ヨリ夜二入ル昼後夕立致し夜吉

藏大助□五段目かゝる昼後伊六皈ル

十五日晴天 早朝親父青二行吉藏藤

太郎皈ル田口ヨリ皈掛り東谷惣三郎池永

藤太郎立寄小鉄砲打藤右衛門節平

来ル不氣分二付不出半夏衝拵

十六日晴天 夕立致早朝扮柳三郎

女子差重申来テ調合差支二付昼前二

行直二皈ル此日不氣分二而不出

〔五九丁表〕

十七日晴天今行源七母差重り申来テ
昼内二行石井甚右衛門針致扮柳三郎
女子咳芽等止候へ共無情永言葉取急
連飯遣ス昼後山口氏二見舞萬里

保兵衛方見舞落合林平九部光平

方二而婦ミ見而遣し此分夜二入宇洞良平方二而

兩平母子三人お石母子見而九部保太郎

千代助脂物ヲ見落合健藏娘ヲ診谷前

忠右衛門方皆々從灯燈ヲ借新助方新助

武藏庄八友市連來請診玄三郎

寿助漁平診而中樋長平内ハ女子

石場伊助悴菅野治郎右衛門見舞伊平

三人共打臥何も重し四ツ過二

狹狩貫遣筈

飯宿此日宿元御手当寄合

〔五九丁裏〕

十八日晴天山口ヨリ病用申来テ行

尤此日調合遅く相成七ツ前二行

黄昏二飯ル此日又々発熱故渡邊深水

之内相居候様申置母青二病氣見舞二

行おいつ腹痛おつた夕方来ルおいつ

夜二入休息ニ成ル曲曲

十九日晴天 昼前今行下屋形二見

舞候積り二而扮柳三郎娘今行源七

母診まい行候所中野氏出産之由ニテ
少々不氣分之由二行失血多く

眩運ニ相成可申ニ付藥籠取ニ遣し

昼度々石井幸八下屋形長八

〔六〇丁表〕

見舞又源七母中野江立寄

飯ル昼後二石場伊助悴差重り

申来二而行中樋長平方忠右衛門新

助庄八寿助治郎右衛門伊平方二

見舞飯ル尤宇洞迄行積り之所

伊助方悴火急ニ付谷ノ前下り二而

飯ル

廿日晴天 昼後出掛ニ今行源七母

差重り申来テ行尤脱症ニ相成不治ニ成ル

相果候夫より飯り候所山口ヨリ便り来居

藥籠為持先ニ飯し石場伊助悴

見舞灌腸小川内峠より桜峠ヲ通り

〔六〇丁裏〕

山口江昼夜鏡二行着小川内峠草

茂り衣物湿候甚難渋山口氏江

止宿夜大風雨尤石場より雨降り

出ス

廿一日代風雨昼前ニ深水真齋

来ル昼後一同ニ出立尤石場より与治右衛門

逆ニ来リ深水者上麻生江病用ニ付萬
里尻ニ而別途石場伊助方ニ而足中テ
貫ヒ谷前源三郎寿助菅野治郎右衛門
伊平方見舞飯ル暮ニ飯ル大水ニ成ル
廿二日晴天

〔六一丁裏〕

廿三日晴天 早朝東谷江お栄逆ニ藤右衛門
遣スおきそ同道ニ而飯ル昼後石場伊助
与治右衛門中樋長平宇洞良平松治郎
九部安太郎谷前忠右衛門善郎新助源三郎
寿助菅野治郎右衛門伊平方病人共
見而八社宮ニ參詣致し飯ル尤
草野ヨリ暮ニ及東谷ヨリ三郎右衛門東濱
茂十郎来ル尤東屋形初兵衛昼ニ而
死去夜ニ相成堀下ニ而甲斐なく一兩人
□に逢前鶴ニ而天の川之面添テ

〔六一丁裏〕

白氣出候見飯節時分余程薄く
相成り

廿四日晴天昼内於八社宮兩村共
社人中滞留ニ而諸病除ケ祈祷三郎右衛門
茂十郎碁打山口ヨリ病用申来ニテ
今行喜市方ヨリ糶兼テ不行夕方
山口ニ越ス掛ケ一ノ瀬傳三郎母見而暮

二山口行着直ニ火ヲ借り飯ル朝
前鶴勇平方ニ南毛村謙造と申
馬口方参り中暑ニ而申来見舞遣ス
夕方三郎右衛門茂十郎飯ル秀之丞東谷江
三郎右衛門同道ニ而行社人共祈祷

〔六二丁表〕

仕舞扮宅ニ而昼致ス
廿五日晴天 早用迫お市産氣
付ニ付調合仕舞見舞石場伊助
与治右衛門中樋長平井手迫源太郎
谷忠右衛門庄八新助源三郎方ニ半
吾夫婦祭ニ参り嫁不快ニ付見舞
寿助方菅野治郎右衛門方伊平ヲ見舞
飯ル夫ヨリ中迫市右衛門悴見舞暮ニ成り
酒湯とル馳走ニ相成り板木勘六見而一瀬
傳三郎母見而五反田連平家内足の痛
見而飯ル

廿六日晴天昼後石場伊助中樋
長平井手迫お市今朝出産

〔六二丁裏〕

男子出生ノ由ニ而石場与治右衛門家内
未満月ニ者相成不申候へ共轉候而腹痛
甚敷由ニ而見舞谷ノ前新助方
源三郎方見舞飯り此日青行

祭礼之便りニ付七ツ時分ヨリ行

伊東者先参居暮ハ横井御幡氏

父子来テ酒後碁打横井御

幡□宅ニ販ル養民玄有□

廿七日晴天 夕方迄青ニ而碁打

小野伊三郎見舞販ル殿様今日義

御着之様子石井惣平ヨリ中津販り聞

〔六三丁表〕

廿八日晴天 昼後今行中野氏

林平庄六方ニ見舞中野氏ニ而

大殿様御着ニ可相成候廻文見候而直ニ

急キ仕舞夫より中迫ニ見舞夜月代

致し出津之仕度致

廿九日晴天 夜立ニ而親父養民中

津ニ出ル夫松治郎作蔵宇佐参詣

中川原迄火燃し行□手熊又助

店ニ而水仙三ツ茄子五十かい置

〔六三丁裏〕

小嶋屋着候へ共辛嶋お度□不幸

昨朝之由大江ニ行御舟之様子一向

相分不申昼後白帆多相見ニ付三百間

迄参候て上り舟斗りまきり居へ御

臺場見物致し販夜小嶋屋

販り大法寺送式ニ参り夫より大江

行謙斎芳作 同道ニテ竜王ニ

□ニ行小嶋屋遅ク販ル

七月朔日 早朝柳氏ニ行色

々咄致し伯母小兒不快伯母ニ

筑後小兒□正附方夫より

大江ニ行大江小女不快錢十匁

〔六四丁表〕

附方棟形氏重不快芳菜見舞

六ヶ敷く由ニ付跡ヨリ養民見舞大分

悪敷相成居候ニ付附方七ツ時分

出立治八同道ニ而販ル親父

此日大庄屋中一同ニ御城奥

見ニ行中河原ヨリ夜ニ入雨降

出し石井ニ而火ヲ借り販り清水

下ニ而火ヲ消し甚々難渋ニ而

販り扮ニ而火ヲ付ル

二日雨天 足痛不氣分ニ而不出

風強し屋根吹さらし長久寺

ヨリ大圓盆供養ニ参り販ル

三日雨天 同断ニ而不出

風強し東谷ヨリをとり参候由

〔六四丁裏〕

申来テおみつおみち常治郎おりく行

四日晴天 昼後宇洞孫右衛門良平

落合勝平谷前忠右衛門新助寿助

治八伊平長平方石場与治右衛門

方見舞飯ル夕方田口三津造士

来テ泊リ碁打

五日晴天 三津造士滯留昼後二

伊六向二遣スおりく今朝飯り小女

不快之由ニ而夕方引取之由申飯ル

昼後養生生木作藏見舞久平

家内針夫より山口氏ニ見舞峠ヨリ

夜ニ入勘助用吉同道ニ而下ル

〔六五丁表〕

三津造士夕方東谷ヲ越夜ニ入おみ

つ秀之丞おみち常治郎飯ル

六日晴天 昼後下屋形田中氏ニ立寄

傳六方家内子供見而勇六内見而

小野伊三郎診而尾林茂右衛門忤古

園長八武七今行庄八弟弥市

家内診而火ヲ借り飯ル三津造今

夕方東谷ヨリ引取候由「挿入」「北草」伊三郎市治郎

泊ル 七日晴天 昼後中迫久助市右衛門

原類助方ニ而庄八家内灸点致し

〔六五丁裏〕

菅野伊平小川内久市治郎右衛門

寿助新助内忠右衛門夫婦落合健藏

女子口中針勝平忤針用平内

耳の中ニ針宇洞良平家内子供

鉄平家内寿市瀬平忤

松治郎忤診而火ヲ借り貝返し

豊藏内乳の腫物ヲ診而孫右衛門

妹ヲ診而飯り掛ケ中樋長平忤

同姉診而飯ル此日

殿様御飯城ニ相成り親父此夕

飯ル作藏今朝飯り節平伊六

今朝迄居宇佐江參ル岡長治郎

節平替りニ參ル

〔六六丁表〕

八日晴天 昼前山口氏ヨリ便来テ

昼仕舞行夕方一ツ石□夜ニ入飯ル

節平朝宇佐ヨリ飯り居ル

九日晴天 作藏中津ニ行昼後宇洞

孫右衛門方良平鉄平寿市瀬平忤

松治郎忤豊藏内見而橘代助

源平内御霍乱診落合勝平忤健藏

娘芽根ヲ切谷前忠右衛門夫婦新助内寿助

治郎右衛門女子伊平診而中樋長平忤女子
診而飯ル

十日晴天 昼後山口氏見舞跡助

方二而休息診而遣ス夕方皈ル今朝ヨリ

作藏中暑昨日

殿様御社参今日御佛参之由

〔六六丁裏〕

夜観音様江若者共をと□

十一日晴天 朝岩渕五右衛門家内吐瀉

申来テ行昼後中樋長平宇洞良平

孫右衛門方寿市瀬平松治郎落合勝平

倅用平内勝平方二耳の痔療治致

健藏方忠右衛門新助内寿助〔挿入〕〔菅〕治郎右衛門

伊平診而皈ル

十二日晴天 朝扮臺武平小兒

不快申来テ行此夜調合多く

遅ク成ル生木実方二而地熊の尻

委二候見而扮二見舞皈ル此日終日

不氣分二而昼後不出作藏治八

〔六七丁表〕

□周平方二割木持行昼時分作藏

皈ル伊六藤右衛門来テひえかり

十三日晴天 朝飯後時雨致ス此日ヨリ

養民氣分悪敷はえ今朝

伊六東谷逆二遣し皈ル

十四日雨天 終日降水大分増

養民氣分悪敷昼後前鶴

夕平内腹痛之由小市申来テ

行飯掛ケ小竹周助内おせき

吐瀉強いたし候由申来テ直二行

〔六七丁裏〕

十五日雨天 朝上の午房畑二而

狸ヲ下男共打殺不氣分二而

谷前忠右衛門女子腹痛之由申来

不行新造此日青二初盆二行

十六日晴天 昼前西川内筋江見而

石場之前二而奥畑ヨリお貞暑瀉之

様子申来テ薬箱取二遣候養民

中樋長平方忠右衛門方落合丈兵衛方

勝平用平宇洞良平方お石

寿市幸平松治郎方見舞二而

〔六八丁表〕

松治郎方二而酒ヲ出候寺川内嘉平内

参居牛之病氣咄致ス夫より

草履ヲ貫ひ奥畑下男二峠ヲ

下二而追附奥畑二而お貞大分

熱氣強しおえき小兒咳茂八

倅借寒治兼テ見而止宿此日提

仁惣治彦ヨリ半兵衛友右衛門おつる参合

三郎右衛門暮而皈ル宗右衛門寺来ニテ

七ツ時分飯ル落合ヨリ雨降出ス

十七日晴天 浅ヨリ子供不快之由申来テ行

咳ニ而子供三人臥飯後晴天おふい

同道ニ而宇洞迄越ス喜平頭痛

診而立花源平悱武市

〔六八丁裏〕

夫婦光平母おふみ谷前

源三郎寿助菅野治郎右衛門内

伊平夫婦見而飯ル上麻生ヨリ

今朝見舞呉候様申来相待居

薬遣候明日行筈申遣又夫より

調夕方仕舞

十八日晴天 昼後山口氏見舞夫より

上麻生臺良吉兵衛方見舞雨降

出し休息致し飯り掛ケ峠ニ而

藤右衛門松原江おとえ連行飯ニ同道致ス

此日山口ニ而金治郎江半夏代

〔六九丁表〕

一口式十匆渡又寺川内健兵衛五反

田運平内見而飯ル黄昏ニ飯着

十九日晴天 昼内生木久平方下川原

類蔵方小畑平八方見舞飯ル

昼後ニ下屋形傳六方清蔵方
尾林茂右衛門父子小野伊三郎見舞

田中戸口迄立寄今行氏ニ見舞

足ニ腫物也嘉助方勘兵衛見

舞中野氏おさわ母子来テ中野ニ

鳥渡立寄女子見而夫より扮□

〔六九丁裏〕

用平見舞所宮江参り留主也

夜入飯ル□吉座頭宿八人聖ヲ

致ス□掛ケ石井徳平悱眉間ニ

刺穿ツ見而□遣し置此日ヨリ

おきわ不快

廿日晴天 早昼ニ而東谷江行積りニテ

支度致居候所扮勝平方ヨリ来大分

腹痛申来テ行夫より中樋長平

九部おふみ九部武市夫婦見而

東谷ニ行お貞此日快気ニ而寺詣

支度致居申候此日奥畑銭他国

〔七〇丁表〕

江賣出候事御差留之請書印

取□鉄蔵一昨日日出江

出療治江行宇図宮兼斎

方江参候由飯りニ宇洞松治郎

悱瀬平悱寿市良平悱喜平

お石同女子診而落合勝平悱用平
内診而火を借り丈兵衛女子家内

診而谷前忠右衛門方ニ立寄寿市

新之助母菅野治郎右衛門内伊平

夫婦診而飯りニ親父寺詣小竹

惣右衛門方下□逢

廿一日雨天 新造治八中津御飯

城御祝儀出ル雨天故不出

〔七〇丁裏〕

播磨屋注文製菓道具磨く

伊六青二行

廿二日晴天 山口氏政助見舞

廿三日雨天 昼前中野勘五郎急病

由ニ而おはつ来テ直ニ行水大分出テ

おはつ連同道致行所□□ニ而手拭ヲ

落し取飯ル

廿四日雨天 不出

〔七一丁表〕

廿五日晴天 宇洞伴吉内腹痛申来テ朝飯後

晝後九部武市方宇洞

お石母子寿市瀬平悱松治郎悱

貝返し豊蔵悱宇利平悱宇洞迄出診而

落合用平内丈兵衛女子菅野伊平治郎右衛門方立寄

飯ル平原文助同方ニ而利平小兒見而

廿六日 昼後山口氏ヨリ上麻生吉兵衛方
見舞飯りニ桜峠寺川内弥三郎娘

足之痛薬調合致置

廿七日曇天 中津江行□分五本

唐瓜式ツ伊平ニ頼ミ飯又大江二行

止宿夕方ヨリ雨降出ス

〔七一丁裏〕

夜三井氏永井氏一同ニ酒吞ニ預ル

廿八日雨天 昼前ヨリ中津出立藤木

伊蔵同道ニ而三口ノ関ヲ渡り尾原

通り飯ル此日原井江源之助座寺江

舞掛ケ有之雨止次第興行之由

青江酒家ヨリ鮎為頼央棟ヨリモ

書状御頼ニ付立寄丁度人形座

参合止宿見物致ス大功記也

此日三口関先之方水深し

廿九日 未明ニ飯ル晴天小峠迄堤

栄四郎迎ニ来居吟平家内診産

伊東参合立合ニ付申来居

直ニ行薬籠取ニ飯ル追刻□

〔七二丁表〕

回生術行東谷三郎右衛門土来ル

夕方飯ル時雨致ス三郎右衛門同道ニ而

宇洞伴吉瀬平松治郎九部又平見舞

落合堂ニ而立座人形一段見而菅野伊平

治郎右衛門方見舞飯ル

晦日雨天 昼後役頭治市郎着

東谷二昨日參候由二而三人之内參吳候由申来

新造行昼後原栄四郎不快見舞

同所二而右人形式段見而常治連飯ル

八月朔日 晴天昼後東谷二見舞

奥二立寄役頭時候障り腹合悪

敷下迫おしめ見而止宿之積り

夕飯後栄四郎孫右衛門吟平家内衝心

之由二而兩人迎二来テ直二飯り堤迫

見舞少々差押候由二而飯ル

〔七二丁裏〕

此夜飯道ヨリ悪寒致衣物着二而

行候へ共先方二而何分寒氣治り

不申

二日晴天 悪寒頭痛二而不出

三日晴天 寒頭痛不出

四日晴天 同断不快不出

〔七三丁表〕

五日曇天 同断

六日晴天

七日晴天 信行寺愚教来テ

碁打

八日 大分快方二而吟平方類藏方弥平ヲ見舞

〔七三丁裏〕

九日晴天 頭痛二而不出

十日晴天 昼後谷前庄八九部又平

女子宇洞瀬平女子松治郎内おしけ

新助内新之助母見而菅野伊平

見舞飯ル夜二入ル此日始メ月代致ス

十一日晴天 此日庄屋中出會養民

一役頭快氣振舞ニ為招昼後おいつ

〔七四丁表〕

同道二而中手二行夕方青二行

皆々止宿謙斎不參候所何り

善四郎不參伊東御幡養民庄屋

中

十二日晴天 夕方樋田通り田中氏石井

惣八方見舞飯ル

十三日 昼後山口氏見舞夕方飯り

桜峠政助診而漸利平小兒頭

針致し飯ル

〔七四丁裏〕

十四日 昼前宇洞伴吉内瀬平子供

松治郎内おしけ九部又平谷前

新助内新之助母菅野伊平

小竹半兵衛悴伊蘭ノ迫並右衛門診而販ル
宿元山目付衆御居昼後大雨降

舟木ヨリ薬取来テ三の上笠かり販ル

十五日曇天 親父秣田口ニ行掛ケ大貞ニ参ル

朝飯後半六養民思立大貞参ル

□□山ヨリ雨降出ス池永芝居人当ル

狂言無し愚教正輿坊一同也

諫山ヨリ夜入販ル野路ニ而□ヲ休し致候

〔七五丁表〕

庄次郎藤右衛門戸吉同道也

十六日晴天 小畑平八方家内見舞

夫より奥の山吟平方見舞

十七日 昼後

〔七五丁裏〕

十八日

十九日雨天 二而不出

廿日晴 朝飯後秋之治八半六養民

千代助猪狩ニ行樋田組ニ猪一疋

〔七六丁表〕

取ヨシ組合由ニ而二引ツ、割合貫う

此日母おたえ秀之丞お道ときの□

八面山神事ニ参ル跡田伯母おいつおのふ

夕咄テ来テ販ル養民販りツ、み吟平

見舞販ル

廿一日 早朝仕立桜峠跡見而山口氏ニ

立寄上麻生吉兵衛方見舞夫より六地ヨリ

雨ニ合床並越し致し井河織の近ニ

立寄馳走ニ合高並峠越し忠右衛門伯父

之宅ニ寄夫より城之助方立寄落合西氏

老母参居同所ニ而大キニ馳走ニ合扇さんさく

月弓之草ヲ貰ひ夫より庄屋長平方

立寄花社通り上舟木藤治郎方

ニ見舞止宿

〔挿入文書〕

献立

一 祝之物

一 吸物

一 差味

一 中盛 昆布、海苔

一 盛付 酢かき

一 果物 魚 十六寸

一 吸い物(みそ) 味噌

一 椎茸 はんべん

一 青サ

一 折 かまほこ

一 すし

あわゆき

はんちん

蓮根

魚

よふかん

一 煮込

芋房こんにやく

けい 里芋

かしわん

魚

一 めし

青サ毳布

〔七六丁裏〕

廿二日晴天 朝飯後上舟木ヨリ灘新六

岳の首 床並銀兵衛方立寄山口氏

立寄飯ル掛ケ寺川内倉助方立寄健平

家内手腫ヲ見遣ス此日月弓孫聞

合也

廿三日晴天 昼後田中氏石井圓助

家内臄腫物針今行勘兵衛方

見舞飯ル此日伊東無□樋田又右衛門

方ニ而親父跡田ヨリ青ニ行頼母子

□□田中ニ而出合此日筑前甘木賣人式人

宿ル

廿四日晴天 昼前二九部又平字洞おしけ

席右衛門ヨリ半六家内猶右衛門方見而松治郎

内瀬平子供見而上矢櫃紋平方

〔七七丁表〕

見舞小竹半兵衛子供耳出来物之

針飯ル跡田ヨリ布袋屋来候由テおみち

おいつ常治郎秋造養民おとえおまんお雪

連行夕方雨降出ス

廿五日晴天 昨夜操土佐井ヨリ参筈之所少々

間違ニ而今日昼後始メ由テ滞留隆平碁打ニ

来ル昼後東山兜軍記入事夜忠信蔵

八陣□□入事未明ニ飯付新造嫁

咄しニ而跡田ニ止宿ス

廿六日晴天 昼後上深水相右衛門方行

桜峠政診而寺川内□助口坪甚蔵

見舞飯ル

廿七日晴天 昼後新造小原市治郎

跡田ヨリ同道ニ而飯ル此日豊助引相撲ニ而

上竹周助田地ニ而興行乙女高家ヨリ

〔七七丁裏〕

式十人斗来面白キ相撲ニ成ル桶屋弥六

来ル止宿

廿八日晴天 早朝すもう稽古見物ニ行

昼後九部又平松治郎瀬平おしけ猶右衛門

方見舞上矢櫃紋平見舞小竹の下ニ而子供

相撲ヲ見物之所生木惣助大怪我之由

吉治郎申来直二飯馳付候へ共最早死

去二而但前鶴岩右衛門落後頭打突

岩久右衛門小竹栄四郎下ノ道ヨリ聲聞付見付出ス□

廿九日晴天 昨夜入口坪おとわ急病

見舞今朝見舞所何分快方無之

時々吐気出旨薬汁も下兼候昼

後石井圓助内田中氏見舞之積り

石井迄来居候所栄太郎参りおとわ

昼後差重り申来テ直二飯ル尤塞

候様子跡田横井申遣し候へ共

〔七八丁表〕

留主二而不来夕方又々悪敷跡田

横井□井之内申遣ス横井飯居明

朝参候由ニテ傳藏飯ル

晦日晴天 朝丈八方見舞昼前

親父深水岡躍見物二行此日おとわ

□氣出洪天□投ス横井昼後二来テ

直二飯り難飯り方江行養民中迫

市右衛門女子幾平久助栄四郎内

見舞夕方おとわ見而飯ル夜者

大分宜敷方

九月朔日晴天朝口ノ坪行跡田江

薬取遣ス南おたま深水ヨリ田口

伯父大病之由聞飯ル大雨来テ

〔七八丁裏〕

□重く被申二付養民調合仕

舞徳地真助見舞直二節平

連行昼前相成候間昼飯喰行

病人者長久寺二而加間二耽ヲ打

筋之痛ニテ一切動候事相成不申

氣分所相替義無安心ニ而夕方方お道を

連飯掛ケ田中老人見舞飯ル親父

昼後深水ヨリ飯藤右衛門来ル

二日曇天 朝口坪丈八方見舞

昼後扮用平今行秋五郎母同勘兵衛

方見舞中野氏小兒連来テ診而夫より

むたニ登り松茸六本取夕方飯ル此日

大分川橋掛ケ向岩瀬道土持出し

宿元穂掛ケ藤右衛門来ル

〔七九丁表〕

三日晴天 風吹寒し萬助来テ

風呂場□拵草賣来ル節平来飯

養民頭痛終日不出昼後打伏

四日晴天 千代助惣平土蔵屋根替

萬助鋤拵昼後頭痛致候へ共
不伏位吟味役唐草又兵衛丈作吉右衛門

泊りおちよ賄ニ来ル長治郎昼岩お

つる来テ黍こなし明日ヨリ野方

当方始メ之處明日ヨリ三尾母始ニ成ル

廻文来ル

五日晴天 藤右衛門販り節平来ル親父

三尾母ニ行朝飯後口坪ニ見舞

前鶴勇平来テ相撲一件咄致ス

〔七九丁裏〕

昼後山手氏海津吉右衛門殿五反田ヨリ来昼致ス

小竹社木代渡して岩渕おけい来テ

色々咄致ス養民原栄四郎内

中迫休助舟板平倉見舞作蔵

増候田鋤

六日曇天 作蔵中津ニ行朝岡半六

来テ行用ニ而浪人三人飴屋江金子無心

申掛ケ候所下宿江遣し置小倉江傳信致

打取候様□□村中寄合二人打取一人

召捕候様咄致ス尤昨日海津氏も

右咄御座候白萬菊鉢植ニ致ス

尾林彦右衛門来昨夜田中傳六方盜賊入

候由播磨屋注文昼後宇洞瀬平

松治郎方見掛ケ惣平小兒診候九部

〔八〇丁表〕

又平娘落合孫市谷前新之助

母忠右衛門女子〔挿入〕「平原武助母」見舞販ル夜半□

咄ニ来ル

七日晴天 添ケ鶴畔越候稲苅り

昼後用民落合庄助耳の下之

腫物見ニ行此日東西屋形共ニ二度目

下見致ス節平販り藤右衛門来ルおミク

此日洗濯ヨリ販ル朝落合雄平萩彦駄

持来ル昼後調合所掃除母信行寺

参詣

八日晴天 一ツ石儀平不快申来テ昼後ニ

行此朝親父下屋形ヨリ販ル宿元下見庄や

衆濟作蔵足疗療痛販ルお糸

お八重惣兵衛長治郎藤右衛門二稲ヲ為借

〔八〇丁裏〕

役頭樋田三尾母岩屋下屋形今行

メ六人□栄四郎□嘉助語ル

九日晴天 朝宇洞松治郎胸痛申来テ

飯後ニ行九歩又平女子落合孫市内健蔵

家内ニ灸点差永助方立寄候へ共留主谷前

新助内妙光病氣見舞呉候様為申見而

新之助母診而寿助方□致し小川内

おきく辰平小兒善治郎診而販ル吟味役

大根ツ和井田昼役頭九部迄登り販り

昼後遅く販ニ成り用民中迫休助一ツ石

儀平方見舞お糸お八重販ル節平来ル

藤右衛門雇ひ此日岡久太郎山口ニ而竹ニテ足ニ怪我候

喜八高□斧切ル

十日晴天 昨夜明ニはら致し候由作臈

此日来ル昼後新造青ニ行養民昼後

宇洞松治郎下血之由申来テ行

〔八一丁表〕

今朝落合丈兵衛家内相果候由節平

勤ル藤右衛門販ル半六中津ヨリ販ル今日中津

江筑州御家老御出之様子

十一日晴天 昼前下屋形宇兵衛方三男急

病申来テ行疝氣胸痛ニ而至而強ク

診而治施候所久右衛門快ク伊東是

迄持来ニ付昼後申遣し来ル何

分痛氣全愈不致候夜泊ル

十二日晴天 早朝下屋形宇兵衛方ヨリ販

掛ケ田中老人同清藏家内石井圓助

家内今行勘兵衛方見舞販ル

深水相右衛門来相待居昨夜青ニ而中津

平田義仙悴姉母三人大坂ヨリ青江親佛事

□□二販居候ヲ中津御人数参り召捕候由是者大助

□□二而大分かたり等致し候趣

〔八一丁裏〕

十三日曇天 親父中津行五ツ時分ヨリ

雨降出ス前田大町たいこきニ致し居

六ヶ敷相成候間詰掛り候所三ヶ耆程

持販ル夕方迄降ル跡田ヨリ高並一件

催促ニ来ル夜天氣ニ相成り今行

良八来テ河豚ニツ大二供ニ□□へ

萬助来テ裏落路柱替致ス

□今行氏伊豫守安藝寺佛事

二付毛氈借り来ル良八持販ル

十四日雨天 昼後跡田嫁一件二付

落合西氏行輿金地通り伊賀守様

痘瘡ニ而お濃い立合之由ニテ玄琳夕方

〔八二丁表〕

泊り夫より輿畑ニ登り泊ル青原

浪人召取之咄し有之明日東谷村

内見分ニ而日田ヨリ庄屋兩人参止宿之由

村方者帳面拵ニ而至多忙之模様也

藤右衛門勤ル椋の木新助娘此日迄加勢

十五日曇天 朝飯後宇洞松治郎

方瀬平方俊平方惣平方九部

又平方川端俊助見而販ル昼後

寺川内倉助伊助方見舞夫より

健兵衛方ニ行二三日輿畑江参呉

候様頼置五反田信平内足ニ針

口ノ坪丈八娘栄太郎悴見而販ル

大町たいこぎ節平来ル岩渕おつる

〔八二丁裏〕

加勢

十六日曇天 下屋形宇平礼ニ来ル新造

今行氏頼母子ニ行五造土迄札五十疋

頼遣又節平白舁ニ秣ニ遣し行掛ケ

田口ニ寄ル暮方節平池部ヨリ飯ル外

人数者荒間ニ而買節平不逢ニ而飯ル

昼後雨降出入養民昼後岩渕方

助見舞夫より今行山口茸狩ニ行積り

之所雨降出し岩渕山ヨリ宮方江下り

桃ノ木ヨリ山ニ而診而幸平方ヨリ傘借飯居候所

扮伊助方ヨリ咄ニ来テ行

十七日曇天 養民膝頭痛ニ而終日不出新造

今行止ル茸取ニ行

〔八三丁表〕

十八日曇天 養民膝痛ニ而不出

十九日曇天 昼後小川内善治郎おきく

見舞天氣悪敷成り直ニ飯ル藤右衛門

夜飯ル

廿日 昼後扮伊助方今行勘兵衛内

石井圓助方下屋形清藏方見舞田中氏立寄

飯ル此日板木伊八方頼母子新造行

〔八三丁裏〕

廿一日曇天 早朝新造宇佐参り

之積り所雨降出し遅く参ル

上矢櫃お高加勢此日娘前田之午房

畑小麦作り昼後養民宇洞松治郎

惣平小兒見舞飯ル添ケ鶴たいごぎ

節平来ル新造夜遅く飯ル

廿二日曇天 見舞堤迫清吉来吟平

急腹痛之由ニ而直ニ行雨降出し

下駄借飯ルお高飯後ニ飯ル頭痛

ニ而不出口ノ坪迄見舞

〔八四丁表〕

廿三日時雨 此日青ニ而庄合出會ニ而

親父青ニ行生木実藏方馬病氣

夕方落候由結馬也昼前見行

藤右衛門勤ル藤右衛門来ル此日石火矢之音

致ス小倉邊之由

廿四日晴天 風吹寒し昼後今行

嘉兵衛方中野氏勘兵衛方扮伊助方

見舞昼過ニ飯ル昼後不出袋拵

節平飯ル

廿五日晴天 昼後山口氏ニ見舞上深水

相右衛門方ヨリ桜峠通り寺川堂之下ニ而

弥之助妻子診而倉助方ヨリ口ノ坪丈八

女子見舞飯ル夕方白糸茂十郎来ル

母おいつ秀之丞おたえ茸取二行

〔八四丁裏〕

廿六日 朝時雨馬伏今朝東西共ニ御免

合寄上ヨリ御酒被下少々宛貰ふ昼後

小竹惣右衛門悴宇洞松治郎瀬平娘

落合礼助見舞宿元稲苑物

昨日迄今日八畝町餅稲たいこき

至而寒し

廿七日晴天 寒しお八重風邪ニ而

伏おゆき起ル昼後おふい初田稲出

行与治右衛門方藤右衛門販り同之所雇ふ

廿八日曇天 時雨稲詰仕舞昼前

降出相ニ有之岡長治郎雇

〔八五丁表〕

廿九日晴天 節平此日来ル小川内おゆ

き母江札式十匁取替遣ス尤ゆき

衣物受通し候代料也昼後今行

勘兵衛方中野氏見舞お八重お延□

岡半六中津行間野山奉行ニ成候祝儀

十月朔日晴天 後曇昼時分雹

降り寒し今行庄六内儀

不快申来テ行勘兵衛方見舞販ル

おミツ不快東濱佐太郎来テ張練

咄致し豊後目華□士大勢京

守護二行掛ケ民家ヲ焼夜道ヲ行候咄

致ス此日在中大庄屋自社若殿様

〔八五丁裏〕

御目見有之由

二日晴天 昼後宇洞松治郎方ニ

見舞瀬平娘来而診而惣平方

立寄九部光平弟川端寿平俊助

小川内善治郎口坪おとわ見舞販ル

此日おとわ又々差起り留主中申来候由

三日晴天 昼後今行庄六内見舞

嘉兵衛方勘兵衛方中野氏見舞販掛ケ

鳥越前之坂迄戸吉おとわ病氣

差起り之由ニ而迎ニ来居同道ニ而

直ニ行勘蔵横井呼ニ遣又黄昏

来ル同道ニ而口ノ坪ニ行遅く販ル

横井当方ニ止宿

〔八六丁表〕

四日晴天 曇ル横井同道ニ而

口ノ坪ニ行横井引取同道ニ而生木

久平方堤林平見舞販ル土居の

お今母子中津江販掛り生木分しニ而

重兵衛咄致ス昨夜岡幸六夫婦

等引取候由尤おきの者今朝荷物

等之取替候由宿元生木田麦作り

落合用平方ヨリ蠟壺斤蜜三斤

持来テ金壺歩遣し置昼後

生木村地麦作ニ行口ノ坪丈八女子又々

差起り候由勘藏申来テ行此日生木

田三枚共仕舞肥後一八来テ夕方同道

生木迄行麦作り見ニ行

〔八六丁裏〕

五日曇 藤右衛門飯ル節平頭痛ニ而

飯ル唐芋起し山田氏上田氏御昼

養民たえ秀之丞ミち髪結昨夜

今行新五郎夜叩持来テ泊ル追々

御猪狩ニ付御留山ニ相成候由昼後

口ノ坪ニ見舞雨降出ス

六日曇天 昼後五造士来ル口ノ坪

見舞中野氏同道ニ而□行

勘兵衛見舞中野氏内室来而

診候

七日時雨 昼内馬道具下繪書

昼後東谷周平方行召暮ヨリ

〔八七丁表〕

落合紋平悴原口江来居候子供ト

同道ニ而周平方迄行屋鋪半七

診而川井手原寿市母宇洞松治郎

見舞良平方ヨリ笠つゝら貫飯ル

田口下男東谷ヨリ暮方来テ留主

東谷刀掛ケ持来ル藤右衛門来ル

八日晴天 新造早朝中津ニ行

小竹彦二郎夫ニ行昼後口ノ坪

見舞今行勘兵衛方横井申遣ス昼

後参候由来テ行中野氏ニ見舞

待合候へ共不来嘉兵衛方立寄飯ル

鳥越ヨリ便来テ泊ル今朝節平

来ル

〔八七丁裏〕

九日晴天 桶屋幾平来ル始ニ而

東屋形御年貢納猫五右衛門方也

返し久右衛門方ニ貫ニ遣スおゆき

子供三人行小川内ゆき母土産

ニ而ゆき兩三日返し呉候様申来ル

十日晴天

十一日曇天

〔八八丁表〕

十二日

十三日晴天 臺口町麦作り

十四日晴天 常治郎不快大町麦作り

鉄治郎藤右衛門

〔八八丁裏〕

十五日晴天 昼内宇洞文右衛門方新市方

見舞昼後添ケ鶴麦作り行明日御内向

旁深水御猪狩ニ付治八千代助安太郎

新太郎儀平夕方ヨリ行節平来ル

藤右衛門皈ル

十六日時雨 昼後晴天

十七日晴天 養民昼後今行勘兵衛方

中野氏ニ見舞

十八日晴天 親父鳥越ニ行

〔八九丁表〕

作藏畑源平方杉皮取ニ行

常治不快ニ而不出

十九日晴天 夕方ヨリ時雨早朝中津江

行下川原向ヨリ寺川内夕平同道返手熊

実藏方ニ而休息行掛ケ金谷ニ立寄

和泉屋ヨリ大江行破まん中貰ひ鍋久

高見屋和泉ニ行□嶋屋迄皈り作藏同道

山萬小野屋中平□藏店等ニ而

貰物調生木嘉助同道ニ而皈ル此日羅

漢寺方丈伊藤田見僧ニ行佛殿

先ニ行

廿日晴天 此日足痛ニ而不出

〔八九丁裏〕

廿一日晴天 昼宇洞文右衛門内新市

井手迫幸藏内信行寺おしめ

診而愚教と夕方迄談し皈ル菅野

伊平初座おゆき察ニ遣ス

廿二日晴天 朝曇天昼後井手迫幸

藏内貝返し藤平悴不快申来ル

廿三日晴天 昼後貝返し藤平悴

宇洞文右衛門内井手迫幸藏内見而皈ル

いかけ宇兵衛鍋持来ル成恒俊徳

深水ヨリ越し来ル昼後皈ル

〔九〇丁表〕

廿四日晴天 昼後今行新五郎母甚兵衛内

家内診而皈掛ケ扮ニ而生木忠藏御狩

ニ付中津江行掛ケニ逢此日親父青ニ行

秣ヨリ泊り来ル松治郎状文持衣物

青迄遣し候へ共御猪狩ニ付親父

皈ル作藏徳地健六方御年貢出し

節平庄屋方白摺夕方慎右衛門殿

来ル夜遅く口ノ坪おとわ見ニ行

難治ニ相成此夜果ル飯田幸右衛門殿

鶏鳴時分来ル見舞ニ皆御出也

御内向衆十式人御庭中間二人

×十五人おいつおちよ跡田ニ行

直向ニ遣し皈ル猫小字代ヨリ此日連皈ル

〔九〇丁裏〕

廿五日晴天 足嶽狩小猪壹疋取

昼後むた御狩也五取両宮迄

握召芋等持行獵師式十四人

犬四疋也優雅トあおとわ見立ニ行

昼後おいつおちよ跡田ニ行親父

新造栄四郎利平長治郎両宮行

貞平辰蔵中津迄猪昇行千代助

中津江行之由おつた斗り泊ル

外人夫販ル

〔九一丁表〕

廿六日晴天 昼前おつた販ル

昼後田中傳六内庄屋老人

今行新五郎母勘兵衛方ニ聞

致し販ル

新造青ニ行

廿七日晴天 昼内口ノ坪ニ見舞

傳蔵足ニ掖□候由之所今朝引取

候由昼後上邊江出浮積之所

雨降出し不出早朝親父

四日市ヨリ秣田村長久寺ニ回積り

ニ而行作蔵節平方年貢

行此日平原お八重販ル

〔九一丁裏〕

新造猪狩ニ行中山ヨリ山口迄行候由

廿八日雨天 昼

後宇洞文右衛門内

貝返し藤平倅九部又平娘

光平母井手迫幸蔵内内□□

平原庄平内見舞候所腫物清之助

健平内診行当おしめ左京伊

良迫儀八内見舞販ル此日節平

来ル藤右衛門販ル

廿九日雨天 作造半六方年貢出

しニ行候所天氣悪敷見合

新造青障子張替ニ行

〔九二丁表〕

外ニ中間老人販り当方江泊ル

晦日晴天 作蔵半六方御年貢ニ行

親父此日四日市ヨリ久長寺田口之方ニ行

昼後引取養民昼後今行新五郎母

中野氏勘兵衛方ニ見舞

此夜半中津ヨリ急御用状到来明

御早昼立ニ而御人数五十人程御入込ニ相成由

尤も御代官郷目附衆追々御入込之由

夫より土居内年寄中呼寄掃除

中郷目附衆筑摩氏山田氏御入込ニ而

御代官者明早朝之由新造此夜

跡田祭礼ニ付青ヨリ彼方ニ参り伏居

候所青ヨリ右之由申来候由ニ而半夜過ニ

〔九二丁裏〕

飯ル鶏鳴時分郷方山田兵衛殿

江口良助殿御入込ニ相成隠居ニ限り

落合健藏中津ニ行買物夫清吉

濱治郎行皆々股引掛ケ掃除致ス

十一月朔日晴天 早朝曾木慎右衛門殿

御入込ニ相成り御下宿割治八長八庄蔵

店口ノ坪半七徳平丈八方手当致

早朝郷目附衆御見分ニ相成ル昼前ニ

上庄村吟味役庄野孫右衛門中津ヨリ来ル

御代官児嶋倍助様上下四ツ時分御入込

御宿拵皆々致置御手水場等拵候迄

御入込之御人数相待候へ共夕方迄

御着無之七ツ時分御代官者治八方

〔九三丁表〕

郷目附衆者昼前ニ階奥の間同次之間

御物頭

一 山崎郡右衛門様

本宅

御組十六人 鉄砲

中間式人

長持 式棹駄荷式駄半

玉箱式荷

御目附様

一 次部弥左衛門様

調合所

御仮蕃

一 奥平孫治郎様

同宿

御陸目附

一 高橋武右衛門様

同三疊

六七人者

一 豊田潤右衛門様

三宅・右衛門様

同行

〔九三丁裏〕

四人

調合所

御手合用人分

一 御足輕兩人

庄蔵方

一 大庄屋曾木氏

吟味役庄野氏

土蔵二階

一 御代官御従目附 三日ニ庄蔵方

御移り足杖兩人調合所爐端ニ移り

中間三人庄蔵方ニ移ル

右御人数者下屋形打庄屋ニ而御休之

扮久平方下ニ而火ヲ灯し御入込ニ相成

御着之節御物頭調合所御目附方

本宅ニ御入ニ相成り夫より御入替ニ相成り

〔九四丁表〕

二日雪時々降ル 皆々御見出被下□

仮御番場前鶴勇平方相極ル御紋附

御幕目附衆与御番所ニ張御物頭者自分

幕張胴赤灯燈□口梅の木当ニ立御番所

一張御組子八人ツ、昼夜交代ニ相詰

三日雪時雨風強し 調合道具

店ニ移ス榮治郎販ル

四日晴天寒し 此日貝返し藤平宇洞

文右衛門内平原健平内見舞伊良迫儀八

内見舞此夜御番所ヨリ御注進來テ大騒キ

〔九四丁裏〕

尤御目附衆御試之由此曾木氏平田ニ行

七ツ時分販ル

五日晴天寒し雪少、降ル 今行新五郎

母見舞中野氏立寄勘兵衛見舞喜市

妹見而販ル

六日雪少々降寒し 子供三人

奥畑江遣又節平行

七日晴天寒し 庄野氏引取候

曾木氏早朝来ル中山ニ猪狩養民

昼後貝返藤平方宇洞文右衛門方

九部又平方ニ見舞平原健平方ニ見舞

〔九五丁表〕

販ル昼後深水条助お役見舞ニ来ル

田口三津造順司東谷江行掛ケ来テ

立寄三津造士夕方東谷ニ越東谷ヨリ三郎右衛門

来掛ケ出合為ニ来ル夜遅ク販ル此日

大猪出テ御組衆追行勝平落床ニ

むけ行候へ共間ニ合不申猪者生木下ヲ

渡之由

八日晴天 此日昼後熊のかつら猪狩

養民扮治平娘急病申来行販掛ケ

御組金□竹之助生木下ヨリ同道ニ而販ル

□目草向ニ而堤峠□ニ而鉄砲鳴り□販にて

販附候時分又々鳴ル六十余之猪取よし

皆々解候を御見物ニ相成ル下屋形威十郎来ル

九日晴天 早朝御家老生田四郎兵衛様

大目附菅沼新五兵衛様御見廻り御出ニ相成り

此元ニ而御朝御□差上平田江御廻り相成ル

御同勢八人也御馬二疋

〔九五丁裏〕

此日庄野氏販ル口ノ坪榮太郎疋ニ針

十日晴天 此日曾木氏明日御内向衆中

御猪狩之由ニ而昼後御引取ニ相成ル此日

又々猪壹疋取獵師間違ニ而御咄り有り

夜養民治八方行

十一日晴天 此日御内向衆樋田江御猪狩

大猪壹疋鹿壹疋取候由慎左衛門殿

夕方来ル

十二日晴天 昼後今行勘兵衛方新五郎母

林平小兒見舞下屋形平七母腫物二針

伸助悴新六見而飯り尤新六者□□□

〔九六丁表〕

十三日晴天 中津之繪圖組子衆江

屋敷名面附頼置昼後原栄四郎口ノ坪

源六方子供見舞庄野氏平田二行

七ツ時分飯ル作蔵宇洞松治郎年貢

出し二行

十四日晴天 朝飯後小竹文平小川内

おつや徳地おつた来而小川内お市飯ル

十五日朝晴天後雪時化 御早昼二而

御人数御出立平田村手合一同二掃坂村江

御引移郷目附衆庄野泊ル曾木氏

平田迄見送り夜二入作蔵荷物送り

〔九六丁裏〕

一同二飯ル雪降り二相成ル甚蔵九平

鉄治郎御中間替二行夜中間長兵衛

佐山嘉右衛門外二中間壺人夜遅く

当方江向來ル止宿此日早朝子供東谷

逆二遣候飯り候へ共間二合不申

十六日晴天雪六寸程積 郷目衆

庄野此日中津通引取曾木氏

止宿此夜今行新五郎御用状途中二而

落し候由平右衛門泣來ル中野氏

直二雪中二飯

十七日 曾木氏御引取至寒し

昨日ヨリ諸道具片附至而忙し

〔九七丁表〕

十八日雪降り寒し 平八方二行

久立寺ヨリ薪貫ニ來ル口ノ坪ニ遣ス

十九日 早朝親父青二行此日曇天

新造苗初座二行堀迫豊助方

織拵前鶴お八重徳地おつた來ル

廿日雪降り 親父不飯ニ付藤右衛門

逆二遣ス此日織拵おつた此日染兵衛

下矢櫃善平頼候處不飯此日青の酒樽

〔九七丁裏〕

藤右衛門為持飯ス田口ヨリ便來テ返事

遣候時分親父飯ル□□り江世話之字

張附ル

廿一日曇天 曇天朝□□り建ル

廿二日雪降り寒し 長八方お

杉火急之症二而相果ル

廿三日晴天 此大神座石場与治右衛門

勤ル此日夜谷ノ前宮ニ參ル和平

文蔵甚蔵客人外二なし

朝合行重右衛門大急病申來テ行

〔九八丁裏〕

甚兵衛方新五郎方見舞飯ル夫より

昼後上矢櫃浅右衛門内見舞

廿四日晴天 谷ノ前宮ニ而寄進神楽勤ル

子供親父参詣此朝長八方

佛事二行今行ヨリ又々申来テ行

此日中野白摺也小畑平八傳六悴見而

飯ル

廿五日晴天寒し 夕方寺川内半

兵衛急病申来テ引尤齒胴痛

外薬不通甚々難症跡田江も申遣ス

止宿ス此日新造掃坂二行鉄平迎行

廿六日朝雪大分降り積ル 見舞御幡

元貞来ル七ツ時分一同ニ而飯り前鶴ニ而別

飯ル

〔九八丁裏〕

中津武家屋敷附持飯ル

廿七日雪降り 早朝親父中津二行

寒し養民不出

廿八日晴天 昼後宇洞文右衛門ニ見舞九部

又平娘久右衛門内上矢櫃浅右衛門内寺川内

半兵衛見舞健兵衛方ニ立寄岡平

政右衛門膝通ヲ見而飯ル此夜御講元正

寺来ル寺川内元助元正寺寄帳ニ来ル

廿九日晴天 昼後今行中野氏老人

生木弥平母小畑平八見舞

〔九九丁表〕

十二月朔日晴天 朝飯後ヨリ秀之丞

頭痛ニ而終不食屏蘇判拵ル

不出

二日晴天 片付掃除致し不出

三日晴天 新蔵おいつ跡田ヨリ相談

有之由ニテ行昼内母床並怨平

方嫁入祝儀二行昼後ニ飯ル

養今行中野氏生木弥平

〔九九丁裏〕

老母見舞飯ル

四日晴天 前鶴新六東谷江子供逆ニ遣ス

松平夜貞不快之由申来テ行子供

滞留新六連飯掛ケ宇洞文右衛門方

見舞飯ル節平飯り日之所雇勤ル

藤右衛門来ル

五日晴天 早朝藤右衛門跡田江遣し

おいつ昼前ニ飯ル朝養民小畑平八

方行袋拵昼後おいつおたえ

常治郎東谷ヨリ飯ル親父田口ヨリ飯ル

生木嘉右衛門札五十八匁八分持来ル

六日曇天 早昼ニ而奥畑二行お貞

大分宜敷夕方ヨリ飯り宇洞文右衛門方ニ

〔一〇〇丁表〕

立寄九部ヨリ夜ニ入飯ル親父田口ヨリ飯ル

七日時化雪至而寒し 白摺養民

忠藏小市長治郎上ヨリ類平おつえ長八

おさわおたま岡お京来ル式拾三俵出来ル

下屋形園吾来ル昼後一ノ瀬利平

内足痛見二行

八日晴天寒し 新造中津行尤

跡田嫁一件跡田二行・蔵土同道

之積り昼後今行中野氏ヨリ下屋形玄助

内仲助娘寛三郎小竹尾林源市

母見舞田中清藏家内脂之痛見而

田口氏立寄夫より扮ヨリ夜ニ入小畑平八

見舞飯ル

〔一〇〇丁裏〕

九日晴天 病氣養民不気分ニ而不出

掃除致又母おたえ秀之丞およし

跡田二行宿元土立丸葉拵此夜治八安太郎

辰右衛門黒井猪一件ニ来ル

十日晴天 昼後落合用平方桑鶴六右衛門

方江おせき見舞宇洞文右衛門方ニ見舞

飯ル夕方母おたえ秀之丞およし

飯ル生木下江こえたし節平居ル

此日おみつ給銀五十匁節平ニ渡す下屋形

傳六方頼母子南庄蔵行

十一日曇天 前鶴勇平方見舞

〔二〇一丁表〕

十二日晴天 両村大豆量り終日不出

十三日晴天 昼後東谷ニ見舞跡田借用金

出致し奥畑ヨリ夜ニ入宇洞文右衛門方へ

立寄飯ル

十四日曇天 朝飯後田口ヨリ唐造也

腫物埒明不申由ニ而下男来テ早昼

ニ而行金色ヨリ夜ニ入丈の墓通り飯ル

井上越ヨリ火消え善六方ニ而火ヲ借り

今行中野氏ニ立寄飯ル田口ヨリ雨降

出し候此日おみち奥畑二行

十五日曇天昼後晴ル 朝之内岩瀬万助

〔二〇一丁裏〕

小畑平八見舞昼後原栄四郎堂鼻

お仲見舞飯ル

十六日晴天 早昼ニ而奥畑二行夕方ヨリ宇洞

文右衛門方九部久右衛門客見舞飯ル明日

十七日中津歳暮ニ行積りニ而藤右衛門呼寄

居候所夜半過而雨降り出し止ル

夕方寺川内健兵衛来テ武左衛門内

生産之模様申来テ行かじや之

所迄行生産之由ニ而皈ル一ノ瀬の

利平娘見而皈ル

十七日雨天 少々風邪ニ而不出おいつ

新造此日ヨリ跡田祝儀ニ付行

〔一〇二丁表〕

十八日雨天 同断風邪頭痛強く

不出朝雪少々積ル夕方作蔵人

馬加勢ニ行

十九日雨天 此日跡田祝儀小原の

市次郎跡田ヨリ用事ニ付来ル信行寺

愚教来テ碁打

廿日時化 養民風邪久右衛門宜敷

昼時分作蔵跡田ヨリ皈ル嫁樋田ヨリ

夜ニ入来り候由尤飯寫悟助娘也

藤右衛門引取節平来ル長久寺ヨリ

知眼御取越ニテ此日引取

〔一〇二丁裏〕

廿一日雪時化 此日大庄屋許出割

新造跡ニ止宿之所掃伯右衛門も御用之

儀申来而跡田通り親父青ニ行

新造夕方皈ル節平此日迎ニ跡ニ遣ス

廿二日雪時化後晴ル 親父青ニ皈ル新造も
此日おいつ同道ニ而皈ル明日ヨリ親父平田

行之由ニ而中津行思立候此日すゝ

取致ス

廿三日晴天 早朝出立節平連未明

田口通り尤三津造胸腫物針致候

得共何分快無之由ニ而見舞成恒

佐々木ニ立寄東通り大江ニ行夫より

昼飯後買物致し廣瀬ニ立寄

〔一〇三丁表〕

野路ヨリ夜ニ入尤宮永ヨリ至□□□致し

候故一杯酒ヲ吞候所圓成僧ニ出合

馳走ニ相成り皈ル昼後親父平田江

御出張明廿四日御入替御人数御止宿ニ付行

廿四日晴天 足痛ニ而終不出朝飯後

新造樋田ヨリ御案内致し平田ニ行

此日御引取之御人数青ニ而御昼ニ相成

夕方親父新造御庭仕舞皈ル明日ヨリ

北原幸吉健三郎兩人参り止宿
此朝餅春

廿五日晴天 朝飯後宇洞文右衛門方

娘見舞皈ニ九部久右衛門方小竹惣右衛門

見舞皈ル宇洞ヨリ足痛漸々引取

昼後山口江参筈之所不仕合ニ而

不行

〔一〇三丁裏〕

此夜宇洞文右衛門娘相果ル

廿六日晴天 昼後大分足痛宜敷

山口佐右衛門方二行桜峠ヨリ足痛起ル飯り二

伊助娘見而飯ル行掛り幸吉健三郎

一ノ瀬迄同道致ス朝東谷ヨリ病用

申来り候得共山口行故二不

廿七日晴天 朝飯後ヨリ奥畑二行暮

方二飯り横井参り人数投刺頼昨夜青ヨリ

飛脚到来御出張夜出出精二付御書附

出ル今朝新造掃坂江御受二行青ヨリ夜二

入飯ル

廿八日晴天

【参考文献及び史料】

▲海原亮『近世医療の社会史』、吉川弘文館、東京、二〇〇七年。

▲大分県総務部総務課編『大分県史』近世篇二、大分、一九八五年。

▲角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典 大分県』角川書店、東京、一九八〇年。

▲新村拓編『日本医療史』吉川弘文館、東京、二〇〇六年初版。

▲富田修司「耶馬溪屋形家とその資料について」(ミヒェル・

ヴォルフガング編『中津市歴史民俗資料館分館 医家史料館 叢書VI 史料と人物I』、中津市教育委員会、中津、二〇〇八年。

▲中津市史刊行会編『中津市史』、中津市史刊行会、一九六五年。

▲難波恒雄『和漢薬百科図鑑I・II』(株)保育社、大阪、一九九三年改訂版。

▲半田隆夫校訂・解説『中津藩 歴史と風土』第一〜十八輯(中津藩史料叢書)、中津市立小幡記念図書館、一九八一〜一九九八年。

▲本耶馬溪町史刊行会編『本耶馬溪町史』、本耶馬溪町、一九八七年。

史料

▲「年中書紳録」自筆本、一〇四丁、中津市、歴史民俗資料館蔵。

村上玄水著「天地分體論」とその背景

大島明秀

はじめに

これまで中津藩の学者村上玄水¹（一七八一～一八四三）の天地・世界観を探るために、「佛國曆象編」²、「老野子」³、「六祖玄水屈伸録」⁴といった一連の天文学関連写本を追究してきた。しかしながら、ここに挙げた著作は主に、いわゆる「梵曆運動」の開祖釋圓通（一七五四～一八三四）を批判したものであって、玄水自身の天地・世界観を表明し、まとめあげた著作ではなかった。

ところで、玄水は同時代に「蘭学」の泰斗としてその名声を響かせていた宇田川榛齋（玄真）（一七六九～一八三四）に、「呈宇田川榛齋先生書」⁵と題した小文を呈上しようとしていた。その中で玄水は、文政二（一八一九）年三月に腑分けを行い、それを「道原」⁶および「天地分體論」⁷に記したので、ぜひ一読を請いたいとする旨を記している。ここから「道原」、「天地分體論」の両著は、村上玄水の「蘭学者」としての自信作であったことを窺わせる。「道原」は腑分けについての記録がその主な内容となっているが、もう一方の「天地分體論」は、そ

の表題が示す通り天地・世界の構造原理について記されたもので、玄水が拠って立つ基本的な考えがまとめられた著作と見られる。

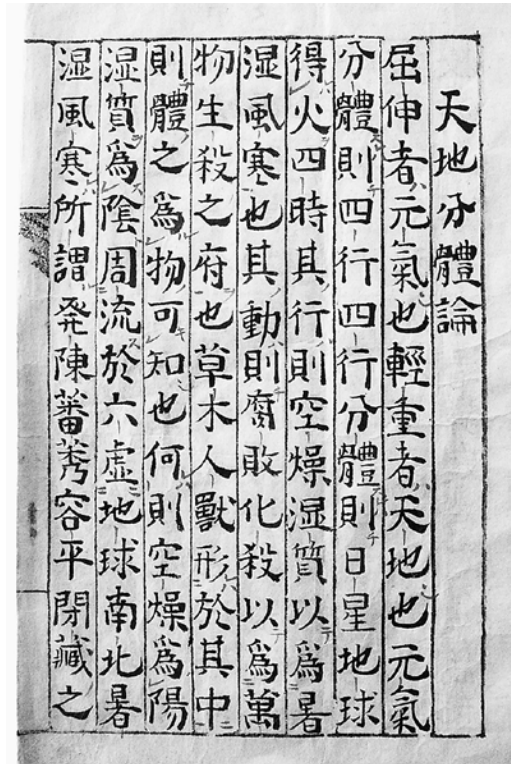
以上を踏まえた上で、本稿の課題は、まず、これまで論究されてこなかった「天地分體論」の原文および書誌を提供すること、次に、その内容ならびに背景を分析すること、それから、本著作がどのような知識の下に作成されたのかを究明することである⁸。この追究は、村上玄水の天地・世界観の解明のみならず、ひいては一連の仏教天文学批判が、どのような発想に基づいて行われたのかを明らかにする仕事にも繋がるであろう。

一、「天地分體論」の書誌情報

「天地分體論」は、半葉九行の罫枠を刷った楮紙一二枚を袋状にし、紙平紐によつて四つ目綴じにした写本である（図一）。最初の二丁は表紙として、最後の二丁は裏表紙として使用されている。表紙には表題「天地分體論」が墨書で打付けられている。縦二七・〇糎×横一七・一糎、「大本」に相当する大きさ

である。表記は清書された漢文で、一行に揃って一四字記され、訓点か朱で付されている。字の高さや大きさなどを揃えるために使用した下敷用紙が、袋綴の中に納められている。

図一 「天地分體論」の内題（中津市村上医家史料館蔵）。



写記の「村上善地堂玄水識。」を俟つまでもなく、全体を通して「有」字の下部の「月」が全て「日」と記されていたり、字が平たく右払いや右はねに非常に力が込められた独特の筆跡から、間違いないく玄水自筆写本と断定できる。また、草稿の訂正はほぼ正確に反映されているようである。

「天地分體論」の成立期については特に示されていないが、先

に述べたように、玄水は文政一三（一八三〇）年十月二八日に作成した「呈宇田川榛齋先生書」で本写本に言及していることから¹⁰、少なくともそれ以前に著されたことが確定できる。また、腑分けが行われたのは文政二（一八一九）年三月八日である。これらを総合すると、「天地分體論」が著されたのは、その間の一八二〇年代ではないかと考える。

二、漢籍からの引用

同時代のその他の学者と同様に、後世「蘭学者」と呼ばれる村上玄水の学問が、漢学を基盤としていることは論を俟たない。玄水が道教に親しんでいたことは写本「老野子」の解説などにより既に示されているが、その号も『莊子』外篇の最終篇にあたる「知北遊篇題二十二」の「知北遊玄水之上¹¹」から採ったものと考えられる。その他、玄水が様々な漢籍を典拠としながら著作を成したことは年々明らかになってきた。

本稿の主題材である「天地分體論」においても多くの漢籍からの引用が認められる。春夏秋冬（發陳・蕃莠・容平・閉藏）の説明¹²は、『黄帝内経素問』「四氣調神大論篇 第二」に拠っている。また、文中の表現の端々にも中国古典からの引用が認められる。例えば、天地の構造と人体の構造を結びつける件では、「三三腔¹³」、「腠理¹⁴」、「靈液¹⁵」、「心包¹⁶」といった人体に関する用語や、「痼冷¹⁷」などの病名は中国医学の語彙を用いて説明している。さらに天地の恵を意味する「覆載¹⁸」之

徳¹⁸」もまた漢籍に由来する言い回しであり、煖寒と体の関係
 を述べた件で挿入された「精¹⁹神内²⁰守²¹然²²則病安²³」レ從²⁴」ヨリカ來
也¹⁹』という一文は、『黄帝内經素問』「上古天真論篇 第一」か
 ら引いたものである。全体の締め括りで唱えられている「贊²⁵
 天²⁶地²⁷之化²⁸育²⁹」ヲは『中庸』第二章の引用である。

図一 「四元行火吸之圖」(中津市村上医家史料館蔵)。



このように、「天地分體論」における季節、人体、病気などの
 概念や、いくつかの文章表現は中国古典に基づいて成立してい

ることが分かる。しかしながら、本著作の基軸となる天地・世
 界観に、中国古典の五行(木火土金水)ではなく、四行(氣火
 水土)が据えられていることに留意せねばならない。「天地分體
 論」が中国古典の知識と西洋の自然科学とによって構成されて
 いることを示しているからである²¹(図二)。

三、西洋天文学との折衷

玄水は、『黄帝内經素問』に基づいた春夏秋冬(發陳・蕃秀・
 容平・閉藏)の説明の中で「地²²有²³五²⁴帶²⁵」一煖²⁶二²⁷正²⁸三²⁹寒³⁰是
也²²』という一文を添えている。つまり、地は一つの煖帯、二
 つの正帯(温帯に相当)、ならびに二つの寒帯という五つの帯に
 分けられるというのである。玄水は五帯についてこれ以上の詳
 しい説明を付していないが、この知識は中国古典ではなく、西
 洋天文・地理学に基づくものである。玄水が志筑忠雄
 (一七六〇～一八〇六)訳「曆象新書」²³(一八〇二完成)に親
 しんでいたことを勘案すると²⁴、典拠は志筑忠雄訳「鎖国論」
 (一八〇二成)の冒頭部分ではないかと推察される²⁵。

ところで、「天地分體論」の冒頭が「屈²⁶伸²⁷者元²⁸氣²⁹也³⁰」
 という一節から始まっていることや、「六祖玄水屈伸録」という
 写本の存在から分かるように、玄水は「屈伸」を重要な要素と
 して見ていた。「屈伸」とは、「屈静」(とどまり動かないこと)
 と「伸動」(広がり動いていくこと)のことを意味するが、玄水
 が「屈伸」を重視したのは、志筑忠雄訳「曆象新書」に影響を

受け、その中編卷之上（二八〇〇成）における冒頭の節「元氣屈伸」に拠ったものと考えられる。この節では、氣と虚実（陽陰）が左記のように説かれている。

「宇宙の間は一元の氣なり、又虚實の二者なり、是れ一にして二なり、二にして一なり、若一なりとせば、屈伸の別あるべからず、天は伸輕なり、地は屈重なり、屈伸あるにあらずや、若二なりとせば、天地の氣相通ずること能はじ、日星の光氣互に映照し、天際に往來して、間隙なく升降して萬變す、一氣に非ずと云ことなし²⁷」

天地・世界の構造を氣一元論かつ虚実（陽陰）二元論で捉える立場であるが、玄水もまた「天地分體論」で氣を重視しながらも、「陽^ハ虚^也陰^也實^也氣^也」²⁸といったように虚実（陽陰）二元論の立場を執っている。また、物体に働く力を「引力」概念と「重力」概念で二元的に理解しているのもまた、「引力と重力は二様なれども、其實は一根なり²⁹」とする「曆象新書」の立場に拠ったものと考えられる。

その他、玄水は「天地分體論」の至る箇所ので、「引力」、「動力」、「弾力」、「遠心力」、「求心力」、「加鞭」といった「曆象新書」の成立によって生み出された力学関連の訳語を駆使しているが、特に注目すべきは、玄水が人体の血液の運行の説明に「弾力」、「遠心力」および「求心力」といった概念を応用し、「其^レ在^ル人^ニ心發^シ彈^力ヲ動^ル血^脈爲^ニ遠^心力^ト靜^血脈

爲^ニ求^心力^ト³⁰」（人間の心臓が弾力を発し、動血脈は遠心力を生じさせ、静血脈は求心力を生じさせる）とする独特の考えを示している点である。

まず、玄水は血液の循環を円状の形態で捉えた上で、血流の起点である心臓から血液を押し出す力を、「弾力」概念で表現する。「弾力」は「曆象新書」において「物に抗りて弾き戻る力³¹」と説明されている。次に、動血脈の血流によって「遠心力」が発生するものとの理解を示す。「遠心力」は「曆象新書」において「圓心を遠ざからんとす³²」る「轉行の力³³」である。続いて玄水は、再び元の位置に戻ってくる静血脈の血流によって、物を「心の方に引³⁴」く「求心力」が生じていると捉えている。この理解は、「曆象新書」が説くところの「求心遠心兩力常に同等³⁵」を前提に組み立てられたものである。

このような力学概念の理解や血液運行の説明への応用は、（大）宇宙の原理を、それと共鳴する小宇宙としての人体への説明に應用した営為であるが、「曆象新書」において説かれたところではなく、玄水による新たな「知」への取り組みであった。東洋の身体理解を機軸としながら、そこに西洋の身体理解を取り入れ独自の説明を創出した村上玄水の姿には、「知」への熱意と、一方ならぬ応用力と獨創性を見取ることができる。

おわりに

日本で初めてニュートン物理学を導入したとされる志筑忠雄

訳「曆象新書」は、同時代にはあまりにも難解で、写本が普及しながらも、その理論が近世後期日本の自然科学に大きな影響を与えたとは言い難い³⁶。その例に漏れず、村上玄水著「天地分體論」においても「曆象新書」の力学概念は十分に理解されたようではなかった。しかしながら、ここで重要なのは、「曆象新書」の正確かつ十全な理解ではなく、むしろ「曆象新書」を読み解き、その西洋力学概念と中国古典の自然科学観とを結び付けながら、四季や血液の運行の説明を試みるなど、玄水独自の天地・世界観を構築した点にあると言えよう。これはつまり、古い「知」と最新の「知」、東の「知」と西の「知」を折衷・融合させながら、新しい「知」を産出しようと試みた玄水による学問的営為なのである。

今後は「天地分體論」成稿と草稿の関係を明らかにした上で、それらと「老野子」および「六祖玄水屈伸録」の記述がどのような位置づけにあるのかを究明しながら、写本「四元行火吸之論」（一八一四成）を追究することで、村上玄水の天地・世界観のより総合的な解明を目指す。

1 村上玄水については、今永正樹『医亦従自然也 村上医家事歴志』、一〇一〜一〇二頁、一八九〜一三二頁。川島真人『蘭学の泉中津に湧く』、一六四〜一六九頁。ミヒエル・ヴォルフガング『村上玄水の略歴』参照。

2 「村上医家史料館史料目録」二部三八。拙稿「佛國曆象編」（『村上医家

史料館資料叢書』I所収）参照。

3 「村上医家史料館史料目録」二部四五。拙稿「村上医家史料館所蔵写本『老野子』における「有外子」・「老野子」とその背景」参照。

4 「村上医家史料館史料目録」二部四六。拙稿「村上玄水写「六祖玄水屈伸録」とその背景―写本「老野子」との関連性を中心に」参照。

5 「六祖玄水屈伸録」、一丁裏〜二丁裏。拙稿「村上玄水写「六祖玄水屈伸録」とその背景―写本「老野子」との関連性を中心に」、三〜四頁参照。

6 「村上医家史料館史料目録」一部八〇。吉田洋一「解臟記并道原」参照。

7 「村上医家史料館史料目録」二部四七。今回は草稿（二部四八）ではなく、清書を用いた。

8 これまで「天地分體論」については、今永正樹『医亦従自然也』（三三〜五二頁）による史料の写真版掲載を除いて特に先行研究はない。

9 「天地分體論」、一〇丁表。
「六祖玄水屈伸録」、二丁裏。拙稿「村上玄水写「六祖玄水屈伸録」とその背景―写本「老野子」との関連性を中心に」、二頁。

10 金谷治訳注『莊子』第三冊、一三九頁。

11 「天地分體論」、一丁表〜二丁表。
「天地分體論」、七丁表。

12 「天地分體論」、七丁表。
「天地分體論」、八丁表。

13 「天地分體論」、八丁表。
「天地分體論」、八丁裏。

14 「天地分體論」、六丁裏。
「天地分體論」、五丁裏。

15 「天地分體論」、五丁裏。
「天地分體論」、四丁表。

16 「天地分體論」、四丁表。
「天地分體論」、九丁裏。

17 この村上玄水が考える天地・世界の構造と四行（氣火水土）の関係は、「四元行火吸之圖」として、「天地分體論」より先に成立したと推測される写本「四元行火吸之論」（『村上医家史料館史料目録』八部九、一八一四成）に記載されている。

18 「天地分體論」、一丁裏。
原典はオックスフォード大学教授キールの『自然学および天文学入門』

(John Keill: *Introductio ad veram phisicam et veram Astronomium*, Oxford, 1718) であるが、そのライデン大学教授ルロフスによるオランダ語版 (Johan Lulofs: *Inleidinge tot de waare Natuur- en Sterrekunde*, Leiden, 1741) を底本として、志筑忠雄はその第六章を抄訳した。古賀十二郎著、長崎学会編『長崎洋学史』上巻、三三五～三三八頁。

24 「天地分體論」と「曆象新書」の関係については後述。ただし、村上医家史料館に収蔵されている「曆象新書」と題された写本（村上医家史料館史料目録「二部三七」）は、様々な記事の寄せ書きであり、純粹な志筑訳の写しではない。

25 「鎖国論」の凡例に相当する「鎖國論訳例」において、「五帯八天の赤道の下を地の赤道とし、天の南北極の下を地の南北極とし、赤道より二極に至りて各々九十度として、赤道を距ること南北各二十三度半の間を何れも寒帯といひ、寒帯の中間を南北何れも正帯といふ、一暖二寒二正共に五帯なり」との記述がある。引用に際して読点を付した。また、引用の底本には、志筑忠雄訳「鎖国論」（岡本経邦旧蔵、京都大学附属図書館所蔵写本）、卷之壹、三丁裏～四丁表を用いた。記述の補訂には、『少年必読日本文庫』五編、一八九一年所収、三五五頁をもつてしたが、漢字表記と仮名表記の違いを除いて異同は無かった。底本にこの二写本を用いた理由については、拙著『鎖国』という言説―ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容史―、第二章註釈七二（四〇五頁）および補論（二二二～三六八頁）参照。

26 「天地分體論」、二丁表。
志筑忠雄訳「曆象新書」（『文明源流叢書』第二）、一四八頁。なお、「曆象新書」写本は全国各地に存在するが、校訂本、或いは善本などはまだ確定されていないので、本稿では便宜上『文明源流叢書』で翻刻されたものを底本に用いた。

28 「天地分體論」、二丁表。
志筑忠雄訳「曆象新書」（『文明源流叢書』第二）、一五二頁。
30 「天地分體論」、四丁表。
31 志筑忠雄訳「曆象新書」（『文明源流叢書』第二）、一五三頁。

32 志筑忠雄訳「曆象新書」（『文明源流叢書』第二）、一五四頁。
33 志筑忠雄訳「曆象新書」（『文明源流叢書』第二）、一五四頁。
34 志筑忠雄訳「曆象新書」（『文明源流叢書』第二）、一九〇頁。
35 志筑忠雄訳「曆象新書」（『文明源流叢書』第二）、一九〇頁。
36 むしろ明治以降の理科教科書の中で「曆象新書」における力学用語が用いられるなど、近代以降の影響が大きい。岩田広己「志筑忠雄の力学概念の理解と明治初頭理科教科書への影響―「慣性」、「質量」を中心として―」。拙著『鎖国』という言説―ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容史―、二一九～二二〇頁。

【史料】「天地分體論」

【原文】

〔表紙〕

天地分體論

〔見返し〕

〔一丁表〕

天地分體論

屈伸者元氣也輕重者天地也元氣

分體スレハ則チ四行四分體スレハ則チ日星地球

得レハ火ヲ四時其行則空燥濕質以爲暑

濕風寒也其動則腐敗化殺以爲萬

物生殺之府也草木人獸形於其中

則體ノ之爲物可知也何レハ則空燥爲陽

濕質爲陰周流於六虛地球南北暑

濕風寒所謂發陳蕃莠容平閉藏之

〔一丁裏〕

事ト成也空燥濕質爲四行一ト氣水火土

也陳莠平藏爲四時一ト春夏秋冬也故

地有ニ五帶一ト煖二ト正三ト寒是也人ニ有

五宣一ト温涼平二ト和大熱寒是也地帶近

大陽一ト則萬物動搖山澤鬱蒸混濁腐

敗ノ之氣並一ラヒ起ル所謂發陳ノ之時也動搖

鬱蒸益盛レハ則積陽腐敗之氣益一ク起ル所

謂蕃莠之時也地帶遠レハ大陽一ト則萬物

收斂山澤濕冷清靜寒冷ノ之氣並一ヒ起ル

〔一丁裏頭欄〕

宜作宜通

上下亘布之

義

蒸

〔一丁表〕

所謂容平ノ之時也收斂濕冷益一盛レハ則

積陰寒冷ノ之氣益一不起所謂閉藏ノ之時也

也和レルニ之以シ風氣一鼓レルニ之以シ雷雨一ヲ而シテ能生一ス也

曲直屈伸大一小輕長ノ之物一也陽虛氣也

也陰實氣也腐敗化物ノ之方也引一力ハ

凝形ノ之物也形レルニ之以シ諸引一力一ヲ化レルニ之以シ

風一化一ヲ合聚離散ノ之道成ル也壯火ハ乾一枯シ

少火ハ腐敗ス故物ノ得レハ水濕フ加レニ之以レハ壯火一ヲ

沸熱爲一乾一枯一ヲ加レルニ之以レハ少火一ヲ鬱蒸爲一腐一

〔一丁裏〕

敗一ヲ燥火ノ之成ニ濕一風一ヲ猶一海一水ノ之有ニ風波一

于レ煖爲一温一于レ寒爲一凍火一濕相一ヒ得レハ則チ生一シ

風一火一濕相一反レハ則チ不レ生一セ風一夏一冬少一風一春一

秋多一シ風一是以一夏一曰無一シテ雲風一ヲ爲一常一風一ト晝一ハ

自^リ海起^リ夜^ハ自^リ山起^ル山^ト河兩^ノ岸^ノ之間^ト

七^ハ八^ハ里致^セ常^ハ風相^ハ反^ル舟^ト舶^ト不^レ能^ハ揚^シ帆^シテ

而^シ行^ク故^ニ雲^ト出^レ颼^ト乎^ハ爲^レ風^ヲ片^ト散^レ颼^ト乎^ハ爲^ス

颼^ヲ有^リ東^ト西^ト者^ノ有^リ南^ト北^ト者^ノ有^リ東^ト北^ト者^ノ有^リ

西^ト南^ト者^ノ有^リ東^ト西南^ト北^ト者^ノ故^ニ上^ト行^ス者^ヲ曰^フ

〔三丁表〕

上^ト風^ト下^ト行^ス者^ノ曰^フ下^ト風^ト具^ス四^ノ方^ノ之^ノ風^ヲ者^ヲ

曰^フ颼^ハ風^ト所^ト謂^ル八^ノ風^ト東^ト北^ト爲^レ焱^ト東^ト爲^レ滔

東^ト南^ト爲^レ薰^ト南^ト爲^レ巨^ト西^ト南^ト爲^レ涼^ト西^ト爲^レ颼

西^ト北^ト爲^レ厲^ト北^ト爲^レ寒^ト天^ト地^ト得^レ之^ヲ以^テ作^ス萬

物^ヲ草^ト木^ト得^レ之^ヲ以^テ散^シ鬱^シ氣^ヲ人^ト獸^ト得^レ之^ヲ以^テ

鮮^シ百^ノ體^ト魚^ト鼈^ト得^レ之^ヲ以^テ遊^ブ水^ト波^ト其^レ風^ト化^{ナル}

者^モ亦^タ天^ト地^ト之^ノ大^ト用^也也^モ腐^敗變^也也^モ風^ト亦

變^也也^モ爲^ス諸^ノ氣^ヲ又^ニ成^ス諸^ノ差^ヲ諸^ノ差^ヲ成^ス異^ト

體^ヲ諸^ノ氣^ト生^ス諸^ノ味^ヲ風^ノ之^ノ變^ハ不^レ可^ラ勝^テ見^ル其

〔三丁裏〕

漙 漙

可^レ見^ル者^ノハ則^チ空^ト淡^辛質^塩酸^渋油^粘苦

甘^也也^モ蓋^シ引^キ力^合之^レ則^チ成^ル體^有體^者ハ有^リ

重^力一^キ重^キ者^ノ得^レ天^ト火^ト能^ク動^ク天^ト氣^下爲^レ雲^ト

地^ノ氣^上爲^レ雨^ト雨^ハ出^ニ地^ノ氣^ニ雲^ハ出^ツ天^ト氣^ニ是^ヲ

以^テ天^ト火^ト爲^シ動^ク地^ノ氣^ハ薪^ヲ大^ト陽^在上^ニ諸^ノ星

在^レ下^ニ大^ト陽^ノ之^ノ動^ク力^動諸^ノ星^ト諸^ノ星^ノ之^ノ重^ト

力^モ爲^ス厚^ト土^ト所^ト引^テ萬^ノ物^生大^ト小^異而^輕

重^分故^ニ象^ハ氣^能速^カ形^ハ氣^能遲^シ速^レハ則^チ發^ス

彈^力一^ヲ遲^レハ則^チ發^ス遠^ト心^力之^ノ能^ト作^ス也^モ血^液

〔三丁裏頭欄〕

爲^ス

〔四丁表〕

之^ノ運^行蓋^シ以^レ是^ヲ也^モ其^ノ在^ル人^ニ心^發彈^力一^ヲ

動^ハ血^脈爲^シ遠^ト心^力一^ヲ靜^ハ血^脈爲^ス求^キ心^力一^ヲ

手^ト足^ト爲^レ動^ク有^レ體^ノ之^ノ重^力一^キ也^モ體^ノ之^ノ爲^レ動^ク

有^レ足^ト之^ノ重^力一^キ也^モ發^ス以^テ彈^力及^ヒ遠^ト心^力一^ヲ

反^レ之^ヲ以^テ求^キ心^力一^ヲ其^ノ行^也體^嚮ハ前^ニ爲^シ速^ト

力^ヲ益^ク疾^レハ爲^ス加^ハ鞭^力一^ヲ進^テ而^シ退^キ退^テ而^シ進^ム有^ニ

走^速者^ノ有^リ走^遅者^ノ元^ノ氣^有差^故也^モ有^ニ

體^煖者^ノ有^ニ體^寒者^ノ元^ノ氣^有差^故也^モ由^レ

是^レ觀^レ之^ヲ其^ノ所^ト以^テ爲^ス五^ノ體^一爲^ス異^ト形^ト皆^ナ有^中

〔四丁裏〕

遲^速行^上蓋^ハ亦^以是^也煖^ハ寒^相合^ス者^ヲ爲^レ

平^ト平^ト體^ハ者^精神^内守^ル然^ル則^チ病^安從^{ヨリ}來^也

煖^ハ體^煖勝^チ也^モ寒^ハ體^寒勝^チ也^モ損^シ勝^益一^ヲ敗^ス

減^シテ加^シ使^レ平^ナ是^レ以^テ平^ニ體^之有^ニ減^ト加^ト煖^ト體

從^ニ其^ノ煖^ニ寒^ハ體^ハ從^ニ其^ノ寒^ニ藥^ノ之^ノ所^ト以^テ奏^レ功

而^治療^之法^所以^也有^ニ四^ノ時^ノ之^ノ別^ト也^モ有^ニ

火^ノ凝^ス者^ノ火^ト引^也也^モ有^ニ寒^ト凝^者一^ヲ寒^ト引^也也^モ腐^ト

化^ノ之^ノ爲^ス諸^ノ質^一又^有鎌^ト波^ト力^ト草^ト木^ト人^ト獸^ト

者^火一^ヲ引^也也^モ雨^ト霜^ト冰^ト雪^ト者^寒一^ヲ引^也也^モ地^ト球

〔五丁表〕

砂石金玉者鎌洪也。有火引而シテ長スル者ノ有寒引鎌洪シテ不長者ノ火力腐化ノ之所成者ハ諸味ノ之氣也。寒力凝固ノ之所成ス者ハ糞土也。養以シ糞土ヲ長スルニ因ル火力者ハ草木也。聚ルニ以シ合氣ヲ養以スル合味者ハ獸也。也濕氣水液ノ之凝ル者ハ雨霜冰雪也。腐液ノ之凝ル者ハ地球砂石金玉之類也。空氣得レハ火ヲ入レリ水ニ濕質得レハ火出ツ天ニ空火ハ無レ。象チ因テ物ニ爲レハ象濕質有レリ形得テ空火ヲ爲レス用ヲ

註云

火○乾燥無空氣

能
不○為用水土亦然

滋潤骨立豈有

為用之處乎

故空氣得火入水

〔五丁裏〕

此ヲ爲ニ合氣ト所謂游氣也。也是以四氣ハ者透通散大其ノ氣無レ所不レ至ラ物皆無レシ不有ニ其ノ氣也。故ニ有レ氣則引レ力合レス之合レハ質氣ヲ則爲ニ細土ヲ合レハ濕氣則爲ニ水液ヲ大引ハ爲レシ大小引ハ爲レス小輕重上下皆ナ以テ是分ル

空氣通レシ之ヲ火氣蒸シテ之ヲ而覆載ノ之徳成ル

矣。虚中ニ有二人獸具諸味ヲ土上ニ有草木一具ニ諸味ヲ有下具ニ其ノ二三味者ノ具ニ其ノ衆味者ノ其ノ差者上草木花形ノ之所三以シテ異ニスル主治ヲ

〔五丁裏頭欄〕

潔實得火出天也

〔六丁表〕

而人獸之所三以也異ニ寒煖賢愚一ヲ也其ノ具ニ人一身ニ者ハ曰ク清淡辛素鹹酸澆油粘苦甘也。故ニ動血脉含ニ其ノ氣ヲ血以テ活シ也。諸部腺分ニ離シテ諸味ヲ體用健也。清淡辛素者ハ精粹ノ之氣也。鹹酸澆油粘苦甘ハ者腐敗ノ之氣也。精敗相合和スル者爲ニ合氣ト。合氣遍滿萬物以テ生シ人獸以テ養フ何レハ則網魚養ニ於小器中ニ勞且死ス合氣速ニ濁スル故也。養ニ之ヲ清水レハ歴レ久不レ死合氣不レ濁セ

〔六丁裏〕

故也。穿レテ地ヲ爲レ池ト魚自カヲ生ス其ノ有ニ可レ生ノ之理ニ而生シ其ノ有不レ可レ生ス之途ニ而シテ止ム是以テ地ノ之○物其ノ數可レ知ル山海ノ之魚獸其ノ數可レ知ル也。氣老濁而シテ爲レ病ヲ以レ不堪其ノ用ニ也。氣差失而シテ爲レ病ヲ以レ不レ得ニ其ノ和也。故ニ空燥多ケレハ則爲レシ早質濕多ケレハ則爲レス腐ヲ腐

毒ハ多ク腫瘡一早毒ハ多シ慄悍一疫一癘濕一瘍以レ
是生ス鹹一酸瀆一油粘一苦一甘不レレハ調セ患ニ熱一及ヒ
閉一塞溜一飲癩一冷等一ヲ是以テ人一獸不レ免二疾一

〔七丁表〕

病一也虚一中有レリ有有中ニ有レリ虚凝テ而シテ爲ニス一
腔百一體流一動一ヲ故ニ有レハ有レ則チ有レ辛有レハ虚則
有レ氣辛ノ之化スル者爲レ素ト氣ノ之化スル者爲レ淡ト

四一氣ノ之化^考爲ニ鹹一酸瀆一油粘一苦一甘一是以

虚中ノ之有入レテ肺ニ鮮ニ活シ靜一血脈一ヲ有一中ノ之

虚出ニ^テ膝一理一ヲ導ニ引動一血脈一其ノ氣ハ者則チ清

其ノ質ハ氣也其ノ淡ハ者則滋潤其ノ質ハ水也

其ノ辛ハ者則乾燥其ノ質ハ火也其ノ素ハ者則

骨一立其ノ質ハ土也其ノ鹹一酸瀆一油粘一苦一甘ハ

〔七丁裏〕

者四一行積一^ニ年腐一化ノ之氣也皆ナ相一ヒ俱ニ入レ

人一身一故ニ其ノ氣亦通徹塩ハ刺也酸ハ敗也

瀆ハ閉也油ハ圓也粘鎌也苦寒也甘和也

也故ニ食レハ塩ヲ爲ス熱ヲ治ニ敗液一ヲ止ム腐ヲ食レ酸爲レ

痛ヲ治ニ敗肉一ヲ爲ニ收一斂一ヲ食レ瀆爲レ縛ヲ閉ニ諸六一ヲ

止レム利一食一油止レ痛止ニ刺一整一ヲ痊一瘡ヲ食レ粘爲レ

着治ニ鎌一諸一毒一爲レ痰一食一苦鎮レ腐治ニ冷シテ悍一

熱ヲ硝レス火食レ甘止レ痛治ニ酸一液一平レ毒四味

爲ニセハ之カ元一ヲ七味爲ニス之カ養一ヲ故ニ清潤燥一立所ニ

〔八丁表〕

以也爲レス體ラ也鹹一酸瀆一油粘一苦一甘ハ所ニ以也爲レ
養ラ也而シテ其ノ味皆ナ昇降ス人一身諸部其ノ液
各々異也也淚一液ト與ニ汗一液一其ノ腺異レハ則其ノ液モ

亦異也故ニ有下宜ニ于養ニ某シノ液一ヲ者ノ不レ宜レ養ニ

某ノ液一ヲ者ノ不レ可レ不レ察セ也清一淡辛一素鹹一酸

瀆一油粘一苦一甘ノ之諸一液盈ニ滿ス諸一部ニ腺能ク

泌一別シテ之ヲ以供ニス體一用ニ其ノ液一則靈一液鼻一液

淚一〇一耳一液肺一液肺一空一液肺一管一液心一包一液

血一液球一液脈一管一液乳一液汗一液唾一液胃一管

〔八丁裏〕

液胃一液膽一液肝一液脾一液脛一液小一腸一液

大腸一液虫一様一液腸一網一液門一液小一腎一

液腎一液輸一尿一液膀一胱一液尿一道一液尿一液

睪一丸一液輸一精一液精一囊一液精一液陰一莖一液

子一宮一液子一宮一腔一液韌一帶一液軟一骨一液骨一

液爪一液齒一液毛一液巢一白一液諸一膜一液水一

脈一液也而シテ火爲レル之主宰ト或ハ引レ動以テ

爲ニ萬一機一鳴一呼一火ハ者百體ノ之主帥也天一

地ノ之綱一紀也也有下三氣ト與ニ空一濁ト合スル以テ爲ニ

〔九丁表〕

三一腔一諸一器一中有レリ空一虚故ニ爲ニ流動一ニ是以
有ノ之爲レスハ用在ニリ氣ノ之空間ニ也血一液靈一液

ノ之爲^レスハ用^ラ在^ニ水ノ之滋^潤ニ也乾^燥ハ爲^レ動^ヲ骨^一
立^ハ爲^レス形^ヲ乾^燥ノ之能^ク動^ハ由^ル也^一有^ニ骨^一立^ノ之爲^レス^{スコト}
形^ヲ也獨^ハ陽^ハ不^レ化^セ獨^ハ陰^ハ不^レ動^カ陰^含陽^陽
含^レ陰^萬物^以生^ス運^化釜^中ノ之熱^湯也^一
意^識釜^下ノ之薪^火也^一能^ク熱^ス者^ノ在^ニ天^火
能^ク久^キ者^ノ在^ニ熱^湯屈^伸動^相生^テ以^テ爲^レシ
行^ヲ靜^受動^應萬^變以^テ爲^レス機^ヲ屈^靜爲^レセ^ハ本^ヲ

〔九丁裏〕

伸^一動^爲シ化^ヲ靜^カ質^レハ之^ヲ爲^レシ形^動力^觸レ^レハ之^ヲ爲^レス
聲^ヲ分^一體^千變^以知^リ萬^物ノ之有^ルコト理^也風^一
化^萬變^以知^ル後^一世^之生^スルコト異^一物^一也^一是^一以^一
有^レハ物^有レ^リ則^リ有^レハ形^有レ^リ動^陰陽^之合^スル其^レ有^ル
故^哉正^中之存^スル其^レ有^ル故^哉意^識ノ之有^ル
機^其有^ル因^哉萬^物ノ之有^ル法^其有^ル因^哉
因^レ故^ニ以^テ安^ニ百^體隨^テ以^テ處^ニ萬^事故^ニ萬^應
應^シ萬^性百^應而^一性^ニ無^ク有^ルコト強^弱寒^煖可^ク
以^テ贊^ニ天^地ノ之化^育可^ク以^テ定^ニ鬼^神ノ之不^一
〔一〇丁表〕
正^一鳴^呼分^一體^有則^ノ之理^豈大^{ナル}乎^カ

村上善地堂玄水識

一千三 十二 言

〔一〇丁裏〕

〔裏表紙見返し〕

〔裏表紙〕

【補訂】

〔二丁表〕

○訓点は朱。写本全体にわたって同。

〔二丁裏五行目〕

○表記「蒸」に修正跡あり。修正前は「蒸」。

〔二丁裏八行目〕

○表記「時」に修正跡あり。修正前は左側のへんが「目」。

〔二丁裏頭欄〕

○表記「蒸」に修正を試みた痕跡あり。

〔三丁裏一行目〕

○表記「空」に圈点あり。「空」を「青」へ訂正を試みた跡とその消し跡あり。

○表記「質」に訂正を試みた跡とその消し跡あり。

○表記「塩」に訂正を試みた跡とその消し跡あり。

○表記「洪」に圈点あり。「洪」を「濤」へ訂正を試みた跡とその消し跡あり。

〔四丁表四行目〕

○表記「力」と「及」の間に、朱で訓点を付した痕跡あり。

〔五丁裏二行目〕

○表記「不」に修正跡あり。修正前は「至」。

〔六丁表九行目〕

○表記「歴」に修正跡あり。修正前は不明。

〔七丁表七行目〕

○表記「者」に修正跡あり。修正前は「則」。

〔八丁裏五行目〕

○表記「宮」に修正跡あり。修正前は「室」を見せケチにして

「宮」の字を記している。

○表記「臆」に修正跡あり。修正前も同字。

〔八丁裏六行目〕

○表記「萬」に修正跡あり。修正前は「其」を見せケチにして

「萬」の字を記している。

〔七行目〕

○表記「百」に修正跡あり。修正前も同字。

【注釈】

〔一丁表〕

○屈伸者元氣也：「元氣」は万物の根本となる氣。これは、享

和二（一八〇二）年に成された志筑忠雄識「曆象新書」

（二八〇二完成）中編卷之上における冒頭の節「元氣屈伸」に

基づいていると考えられる。『文明源流叢書』第二、一四八

一四九頁参照。なお、「屈伸」とは玄水が天地の「行」と考え

る「屈静」（とどまり動かないこと）と「伸動」（広がり動いていくこと）のことを指す。

○輕重者天地也：「輕重」とは重さのことであるが、前掲志筑忠雄識「曆象新書」の節「元氣屈伸」に「天は伸輕なり、地は屈重なり」とあることから、ここでは天は輕く、地は重いということの意味するのであろう。『文明源流叢書』第二、一四八頁。

○四行：玄水は中国における天地觀の基盤である五行（木・火・土・金・水）ではなく、「曆象新書」でも重視された西洋天地觀の基盤である四行（氣・水・火・土）を重視している。拙稿「村上医家史料館所蔵写本『老野子』における「有外子」・「老野子」とその背景」参照。

○地球：玄水は地を球体と捉えており、これが須弥山説を強く押し出した釋圓通『佛國曆象編』に対する一連の批判に繋がっている。拙稿「佛國曆象編」および「村上医家史料館所蔵写本『老野子』における「有外子」・「老野子」とその背景」参照。

○四時：春夏秋冬。

○質：「質」と「氣」の関係について、「天地分體論」の重要な構成要素となっている志筑忠雄識「曆象新書」において「質の分子は聚て質をなせる者を云へり、氣は又質を積て生るが故に、氣の分子は質なり」との割注がある。『文明源流叢書』第二、一五二頁。

○周流：めぐり流れること。

○六虚…上下四方。宇宙。

○發陳蕃莠容平閉藏…「發陳」は春、「蕃莠」は夏、「容平」は秋、「閉藏」は冬のこと。これらの概念は、中国の古典医籍

『黄帝内经素問』の「四気調神大論篇 第二」に説かれている。南京中医学院編、石田秀実監訳『現代語訳 黄帝内经素問』上巻、四五～五一頁参照。

〔二丁裏〕

○正…正帯のこと。温帯に相当。

○鬱蒸…蒸し暑いこと。

〔二丁裏〕

○颺…風が起こるさま。

○颺…風が起こるさま。

○颺…つむじ風。はやて。

〔三丁表〕

○颺風…大きなつむじ風。はやて。

○八風…八方向の風。

○焱…炎に同じ。

○滔…みなぎり、さかんなさま。

○厲…激しくて疾いさま。

○颺…疾風。

○鬱氣…こもりふさがる氣。

○百體…身体の全ての部分。

○魚鼈…魚や亀(すっぽん)。

〔三丁裏〕

○洪油…この部分を除いて、写本を通してここでは見せケチと

なっている「瀋」の字が「洪」の代わりに用いられている。

瀋油は、とどこおること、潤活なことの意。

○引力…志筑忠雄「曆象新書」で作られた訳語と指摘されている。その他、「動力」、「遠心力」も同。学士院編『明治前日本天文学史』、一九四頁。

○彈力…これも「曆象新書」中編卷之上の一節「重力」に見られる訳語である。この語もまた「曆象新書」が初出である可能性がある。『文明源流叢書』第二、一五一頁など。

〔四丁表〕

○求心力…「曆象新書」で作られた訳語と指摘されている。学士院編『明治前日本天文学史』、一九六〇年、一九四頁。

○加鞭力…加鞭力の誤りか。「曆象新書」中編卷之上の一節「加力変速」において、速度がより増すさまの表現として「加鞭」が使用されている。『文明源流叢書』第二、一五七頁。

○精神内守然則病安從來…『黄帝内经素問』の「上古天真論篇 第一」が典拠。南京中医学院編、石田秀実監訳『現代語訳 黄帝内经素問』上巻、三一～三三頁参照。

〔四丁裏〕

○鎌…「鎌」のことか。写本全体に渡ってこの字を用いているが、「鎌」では意を成さない。

〔五丁裏〕

○游氣…空中にたなびく靄。浮動する大気。

○四氣…ここではあらゆる氣という意か。

○覆載之徳…天地の温徳。めぐみ。

○虚中…空中のこと。

○主治…薬の主な効き目のこと。

〔六丁表〕

○精粹…混じりけのないこと。

〔六丁裏〕

○質湿…湿質のことであろう。

○慄悍…荒々しく勢いがあることを意味するが、ここでは文脈に合わない。字の誤りか。

○疫癘…悪性の流行病。

○閉塞…閉じ塞がること。ここでは内臓閉塞のことか。

○溜飲…飲食物が胃に溜まってすっぱい液が出る症状。

○痼冷…寒氣が長い間、身体の或る一つの経絡、臓腑に潜伏し、局所的な寒症を形成して、長期にわたり治癒しないことを指す。『中国漢方医語辞典』、九五頁。

〔七丁表〕

○三腔…写本「老野子」においては、三腔とは上腔、中腔、下腔の三つであり、頭が上腔、胸が中腔、腹が下腔とされている。また、上腔の臓は脳髓、中腔の臓は心臓と肺、下腔の臓は胆嚢、肝臓、脾臓、脾臓、胃、腎臓、膀胱等と考えられている。「村上医家史料館所蔵写本『老野子』」における「有外子」・「老野子」とその背景」、三四、四三、四七頁。

○腠理…皮膚、筋肉、臓腑の細かいあや。或いは、皮膚と筋肉の交わる場所。『中国漢方医語辞典』、一三五頁。

○骨立…骨ばかりであること。痩せ衰えること。

〔七丁裏〕

○利…痢のことか。

○硝…消のこと。

〔八丁表〕

○靈液…人間の舌の下にある腎氣に通ずる穴から出る液。

○心包…心臓の外膜で、氣血通行の道である脈絡が付属している。『中国漢方医語辞典』、一五頁。

〔八丁裏〕

○虫様…虫垂のこと。

○巢臼…不明。巢はわだかまる、漏らすなどの意を含む。臼は受け皿、或いはくぼみの形状をなしているということか。

〔九丁表〕

○萬機…熟語として多くの重要な事柄という意もあるが、ここでは熟語ではなく、物事のあらゆる働きのことを指すのであろう。

○三氣…天、地、人の氣。

〔九丁裏〕

○正中…真ん中。また、太陽が南の真ん中に来ること。

○異物…ここでは死んだ者のことか。

○贊天地之化育…天地が万物を生じ育てる営為に助力するといふこと。『中庸』第二章がその出典。宇野哲人全訳注『中庸』、一九九四年第一八刷、一四四～一四六頁参照。

○鬼神…死者の靈魂のこと。鬼は陰の神、神は陽の神を指す。

「鬼神論」は近世の学者にとって大きな問題であつた。子安宣邦『鬼神論 儒家知識人のディスクール』参照。

【読み下し】

天地分體論

屈伸するものは元氣也。輕重は天地也。元氣は體を分かつてば則ち四行なり。四行は體を分かつてば則ち日・星・地球なり。火を得れば四時其の行は則ち空燥湿質にして以て暑湿風寒を爲す也。其の動は則ち腐敗化殺にして以て萬物生殺の府たる也。草木人獸は其中に形れば、則ち體の物の爲するを知る可き也。何となれば空燥は陽を爲し、湿質は陰を爲す。六虚に周流す。

地球南北の暑湿風寒は所謂發陳・蕃秀・容平・閉藏の事と成る也。空燥湿質を四行と爲す。氣・水・火・土也。陳秀平藏を四時と爲す。春夏秋冬也。故に地に五帶有り。一煖・二正・二寒是也。人に五宣有り。温・涼・平和・大熱寒是也。地帶太陽に近からば則ち萬物は動揺し、山澤は鬱蒸し、混濁腐敗の氣が並び起る。所謂發陳の時也。動揺・鬱蒸益す盛んなれば則ち積陽腐敗の氣、益す起する。所謂蕃秀の時也。地帶太陽に遠からば則ち萬物は收斂し、山澤は湿冷し、清靜寒冷の氣が並び起る。所謂容平の時也。收斂・湿冷益す盛んなれば則ち積陰寒冷の氣、益す起する。所謂閉藏の時也。之を和するに風氣を以てし、之を鼓するに雷雨を以てし、而して能く曲直・屈伸・大小・輕長の物を生ずる也。

陽は虚氣也。陰は實氣也。腐敗化物の方也。引力は凝形の物也。之を形づくるに諸引力を以てし、之を化するに風化を以てし、合聚離散の道は成る也。壯火は乾枯し、少火は腐敗す。故

に物は水を得て湿し、之に加うるに壯火を以てすれば沸熱し、乾枯を爲す。之に加うるに少火を以てすれば鬱蒸し、腐敗を爲す。燥火の湿風を成すは、猶海水の風波有るがごとし。煖に于けるは温を爲し、寒に于けるは凍を爲す。火湿相得れば則ち風を生じ、火湿相反すれば則ち風を生ぜず。夏冬は風少く、春秋は風多し。是を以て夏日の雲無くして風くを常風と爲す。晝は海より起り、夜は山より起る。山河兩岸の間十七八里、常風が相反致せば、舟船の揚帆して行く能わず。故に雲出れば颺として風を爲し、片散すれば颺として颺を爲す。

東西する者の有りて、南北する者の有りて、東北する者の有りて、西南する者の有りて、東西南北する者の有り。故に上行する者は上風と曰う。下行する者は下風と曰う。四方の風を具する者は颺風と曰う。所謂八風。東北は焱たり。東は滔たり。東南は薰たり。南は巨たり。西南は涼たり。西は颺たり。西北は厲たり。北は寒たり。天地之を得て以て萬物を作す。草木之を得て以て鬱氣を散ず。人獸之を得て以て百體を鮮す。魚鼈之を得て以て水波に遊ぶ。其れ風化なる者も亦天地の大用也。腐敗は變也。風も亦變也。變は諸氣を爲し、又諸差を成す。諸差は異體を成す。諸氣は諸味を生ず。風の變は勝げて見るべからず。其れ見るべき者は則ち空淡・辛質・塩酸・渋油 粘苦甘也。蓋し引力之を合すれば則ち體を成す。體有る者は重力有り。重き者天火を得れば能く動ず。

天氣は下りて雲を爲し、地氣は上りて雨を爲す。雨は地氣より出で、雲は天氣より出づ。是を以て天火は動を爲し、地氣は

薪を爲す。太陽は上に在りて、諸星は下に在る。太陽の動力は諸星を動じ、諸星の重力は厚土を爲す。萬物を所引して、大小の異而して輕重分るるを生ず。故に象氣は能く速かに、形氣は能く遲し。速なれば則ち弾力を發す。遲なれば則ち遠心力の能作を發する也。血液の運行は蓋し是を以てす也。其の人に在る心は彈力發し、動血脉は遠心力を爲し、靜血脉は求心力を爲す。手足の動を爲すは體の重力有れば也。體の動を爲すは足の重力有れば也。發するに彈力及び遠心力を以てし、之を反すに求心力を以てす。其れ行也。

體は前に嚮えば速力を爲し、益す疾ければ加鞭力を爲す。進みて退き、退て進む。走速なる者有り。走遲なる者有り。元氣に差の有る故也。體煖なる者有り。體寒なる者有り。元氣に差の有る故也。是に由りて之を觀れば、其の五體を爲し、異形を爲し、皆遲速の行の有る所以も蓋し亦是を以てす也。

煖寒の相合する者は平と爲す。平體は精神内に守る。然れば則ち病安んぞ従い來らんや。煖體は煖勝也。寒體は寒勝也。勝ちて損じ、敗けて益し、加えて減じて、平ならしむ。是を以て體之を平とす。減加有りて煖體は其の煖に従い、寒體は其の寒に従う。藥の奏功する所以なりて治療の法、四時の別有る所以也。火凝する者有りては火引也。寒凝する者有りては寒引也。腐化之諸質を爲す。又鎌洪力有り。草木・人獸は火引也。雨霜・冰雪は寒引也。地球・砂石・金玉は鎌洪也。

火引して而して長ずるもの有り。寒引鎌洪して而して長ぜざるもの有り。火力・腐化の成す所のものは諸味の氣也。寒力・

凝固の成す所のものは糞土也。養うに糞土を以てし、長ずるに火力に因るものは草木也。聚むるに合氣を以てし、養うに合味を以てするものは人獸也。濕氣・水液の凝る者は雨霜・氷雪也。腐液の凝る者は地球・砂石・金玉の類也。

空氣火を得れば水に入る。濕質火を得れば天より出づ。空火は無象にして物に因りて象を爲す。濕質は有形にして空火を得て用を爲す。此を合氣と爲す。所謂游氣也。是を以て四氣は透過散大にして、其れ氣は至らざる所無く、物皆其の氣有らざる無き也。故に氣有れば則ち引力之を合す。質氣を合すれば則ち細土を爲す。濕氣を合すれば則ち水液を爲す。大引は大を爲す。小引は小を爲す。輕重・上下は皆是を以て分る。空氣之を通し、火氣之を蒸す。而して覆載の徳成る。虚中に人獸有りて諸味を具え、土上に草木有りて諸味を具う。其の二・三味を具するものと、其の衆味を具するものとの其の差は、草木花形の主治を異にする所以にして、人獸の寒煖・賢愚を異にする所以也。

其れ人身に具わる者は清淡・辛素・鹹酸・澆油・粘苦甘と曰う也。故に動血脉は其の氣を含みて血は以て活する也。諸部腺は諸味を分離して體用は健やか也。清淡・辛素は精粹の氣也。鹹酸・澆油・粘苦甘は腐敗の氣也。精敗の相合和するものは合氣たり。合氣は萬物に遍滿し、以て人獸を生し以て養う。何となれば網魚は小器中にて養えば、勞し且つ死す。合氣速やかに濁する故也。之を養うに清水なれば久を歷すも死せず。合氣濁せざる故也。地を穿ちて池を爲せば魚は自生す。其の生かすべくの理有りて而して生す。其の生かすべからざるの途に有りて

而して止む。是を以て地球の人物、其の數知るべく、山海の魚獸、其の數を知るべき也。

氣は老濁して病を爲す、其の用に堪えざるを以てす也。氣は差失して病を爲す。其の和を得ざるを以てす也。故に空燥多ければ則ち旱を爲し、質濕多ければ則ち腐を爲す。腐毒は腫瘡多く、早毒は慄悍多し。疫癘・濕瘍は是を以て生ず。鹹酸・澆油・粘苦甘は調せざれば、熱及び閉塞・溜飲・痼冷等を患うなり。是を以て人獸は疾病を免れざる也。

虚中に有有り、有中に虚有り、凝して三腔、百體流動を爲す。故に有有あれば則ち辛有り。虚有れば則ち氣有り。辛の化するものは素たり。氣の化するものは淡たり。四氣の化するものは鹹酸、澆油、粘苦甘たり。是を以て虚中の有は肺に入り、静血脉を鮮活す。有中の虚は腠理を出で、動血脉を導引す。其れ氣は則ち清。其の質は氣也。其れ淡は則ち滋潤。其の質は水也。其れ辛は則ち乾燥。其の質は火也。其れ素は則ち骨立。其の質は土也。其れ鹹酸・澆油・粘苦甘は四行積年腐化の氣也。皆相俱に人身に入る。故に其の氣も亦通徹なり。塩は刺也。酸は敗也。澆は閉也。油は圓也。粘は鎌也。苦は寒也。甘は和也。故に塩を食わば熱を爲す。敗液を治して腐を止む。酸を食わば痛を爲す。敗肉を治して收斂を爲す。澆を食わば縛を爲す。諸穴を閉じて利を止む。油を食わば痛を止む。刺螫を止みて瘡を痊す。粘を食わば着を爲す。諸毒を治鎌して痰を爲す。苦を食わば腐を鎮める。悍熱を治冷して火を硝す。甘を食わば痛を止む。酸液を治して毒を平にす。四味之が元を爲せば、七

味之が養を爲す。故に清潤・燥立、體を爲す所以也。鹹酸・瀉油・粘苦甘の養を爲す所以也。而して其の味は皆人身の諸部を昇降す。

其の液は各々異也。涙液と汗液とは其の腺が異なれば則ち其の液も亦異也。故に某の液を養うに宜なるは、某の液を養うに宜しからざるもの有り。其れ察せざるべからざる也。清淡・辛素・鹹酸・瀉油・粘苦甘の諸液は諸部に盈滿す。腺は能く之を泌別し、以て體用に供す。其の液は則ち靈液・鼻液・涙液・耳液・肺液・肺空液・肺管液・心包液・血球液・尿管液・乳液・汗液・唾液・胃管液・胃液・膽液・肝液・脾液・睪液・小腸液・大腸液・虫様液・腸網液・門脉液・小腎液・腎液・輸尿管液・膀胱液・尿道液・尿液・辜丸液・輸精液・精囊液・精液・陰莖液・子宮液・子宮腔液・靱帶液・軟骨液・骨液・爪液・齒液・毛液・巢臼液・諸膜液・水脉液也。

而して火は之が主宰たり。或は引き、或は動じ、以て萬機を爲す。嗚呼、火は百體の主帥也。天地の綱紀也。三氣と空濁と合する有るを以て三腔を爲す。諸器の中は空虚有り。故に流動を爲す。是を以て有の用を爲すは氣の空間に在る也。血液・靈液の用を爲すは水の滋潤に在る也。乾燥は動を爲し、骨立は形を爲す。乾燥の能く動ずるは、骨立の形を爲す有るに由れば也。獨り陽のみならば化さず。獨り陰のみならば動かす。陽は陰を含み、陽は陰を含みて萬物以て生ず。

運化は釜中の熱湯也。意識は釜下の薪火也。能く熱するものは天火に在り。能く久しきものは熱湯に在り。屈靜・伸動相生

じて以て行を爲す。靜受・動應・萬變以て機を爲す。屈靜本を爲せば、伸動化を爲す。靜力之を質せば形を爲す。動力之に觸れば聲を爲す。分體千變、以て萬物の理有るを知る也。風化萬變、以て後世の異物を生ずるを知る也。是を以て物有れば則有り。形有れば動有り。

陰陽の合する其れ故有らんや。正中の存する其れ故有らんや。意識の機有る其れ因有らんや。萬物の法有る其れ因有らんや。故に因りて以て百體を安んじ、因に隨いて萬事に處す。故に萬性に萬應し、百性に百應す。強弱・寒煖有ること無し。以て天地の化育を贊くべし。以て鬼神の不正を定むべし。嗚呼、分體有則の理は豈大ならんや。

村上善地堂玄水識す。

二千三十三言。

【現代語訳】

天地分体論

屈伸（とどまり動かないことと、広がり動いていくこと）するものは万物の根本となる氣である。軽きは天、重きは地である。万物の根本となる氣の体様（もの、ものの形）を分ければ四行である。四行の体様を分ければ日、星、地球である。火と組み合わせれば四時その行は空燥湿質で、暑湿風寒を作る。その働きは腐敗化殺であり、万物の生殺を司るものである。草木、人間、動物というものはその中に位置づけられるもので

あつて、だから体が物を形成しているということを知るべきなのである。何となれば空燥は陽を、湿質は陰を形成する。そして上下四方をめぐり流れている。

地球南北の暑湿風寒は、いわゆる発陳、蕃莠、容平、閉蔵となる。空燥湿質とは四行で、すなわち氣、水、火、土である。陳、莠、平、蔵（発陳、蕃莠、容平、閉蔵）とは四時のこと、すなわち春夏秋冬である。よつて地には五帯がある。一つの煖帯、二つの正帯、二つの寒帯がこれである。人に五宣、すなわち温、涼、平和、大熱、寒があるのもこれである。地帯が大陽に近ければ万物は動揺し、山沢は鬱蒸し、混濁腐敗の氣が並起する。これがいわゆる発陳の時である。動揺と鬱蒸が一層盛んであつたならば、積陽腐敗の氣が一層起る。これがいわゆる蕃莠の時である。地の位置が大陽から遠ければ、万物は一所に集まり、山沢は湿り冷え、清静寒冷の氣が並び起る。これがいわゆる容平の時である。收斂と湿冷が一層盛んであつたならば、積陰寒冷の氣は一層起る。これがいわゆる閉蔵の時である。これらは風氣によつて調和され、雷雨によつて鼓される。そして曲直、屈伸、大小、軽重といったものを生ずることができるのである。

陽は虚氣である。陰は実氣である。腐敗化物の方である。引力は凝形のものである。これを形成するのは諸の引力であり、これを变化させるのは風化の力であり、これらによつて合聚離散の道が成される。大きな火は乾枯し、小さな火は腐敗する。だから物は水を得て湿し、ここに大きな火を加えれば、沸熱し乾

枯する。また、小さな火を加えれば、蒸し暑くなり腐敗を起こす。燥火が湿風を作るのは、海水に風波が有るようなものである。煖においては温を、寒においては凍を作る。火と湿が調和し備われば風が生じ、火と湿が反し両備しなかつたならば風は生じない。だから夏冬には風が少なく、春秋は風が多い。これをもつて夏日は雲無く風が吹くのを常風とする。昼は海から起り、夜は山から起る。山河兩岸の間十七、十八里を、常風が向かつてきたならば舟船の出帆は不可能である。だから雲が出れば風を起し、片散すればつむじ風を作る。

東西するものがあり、南北するものがあり、東北するものがあり、西南するものがあり、東西南北するものがある。だから上行するものは上風と呼び、下行するものは下風という。四方の風を持つものは颶風という。いわゆる八風というものがあつて、すなわち東北は焱、東は滔、東南は薰、南は巨、西南は、西は颶、西北は厲、北は寒である。天地はこれらを得て万物を作り、草木は之これらを得て鬱氣を散じ、人間や動物はこれらを得て体の全ての部分を形成し、魚や亀はこれらを得て水波に遊ぶのである。

風化もまた天地の大きな作用である。腐敗は変である。風もまた変である。変は諸氣を作り、また、諸差をも形成する。諸差は異なる体を作る。諸氣は諸の味を生じる。風の変は数え切れないほど見られる。見ることが出来るものとは、すなわち「空淡」、「辛質」、そして「塩（鹹）酸」（すっぱさと塩からさ）、「澁（澁）油」（滯ることと潤活に行くこと）、「粘苦甘」

(粘り、苦さ、甘さ)である。まさしく引力がこれらを組み合わせ、てて体を成すのである。有体のものには重力が存在する。重さのあるものは、天火を得て動くことができる。

天氣は下降して雲となり、地氣は上昇して雨となる。雨は地氣より、雲は天氣より発するのである。このようにして天火は動を司り、地氣は薪を形成する。太陽は上に、諸星は下に所在する。太陽の動力は諸星を動かし、諸星の重力は厚土となる。

万物を引っ張り、大きさや重さの差異を生じさせる。だから象氣は速く、形氣は遅いのである。速くあれば弾力を発する。遅ければ遠心力を発するのである。血液の運行はまさしくこれをもつて行われている。人間の心臓は弾力を発し、動血脈は遠心力を作り、静血脈は求心力を作る。手足が動くことができるのは体の重力が存在するからである。体の動きを作るのは足の重力があるからである。それらは、弾力および遠心力をもつて発し、求心力によつて戻す。これが行というものである。

体は前に向かえば速力を形成する。速ければ速いほど、速力はより一層大きくなる。進んでは退き、退いては進む。速く走るものがあり、遅く走るものがあるのは、それらに元氣の差があるからである。それらに元氣の差があるからである。煖体のものがあり、寒体のものがあるのは、それらに元氣の差があるからである。このようにして考えれば、その五体を形成し、異形を作り、全てに遅速があるのは、まさしく先の理由によるものである。

煖寒の組み合わせたものは平である。平体は精神の内を守る。そうであれば病が襲うというようなことがあるのか。煖体

は煖勝である。寒体は寒勝である。勝ちて損じ、敗けて益し、加えて減じて平にする。このようにして体は平となるのである。加えたり減じたりがあつて、煖体はその煖に従い、寒体はその寒に従い、そのように形作られたのである。これは薬が効く所以であつて、同時に治療の法には春夏秋冬の別がある所以でもある。火が集まり固まるものは火引である。寒が集まり固まるものは寒引である。腐化は諸々の質(存在の基となるもの)を作る。又錬洩力というものもある。草木、人間、動物は火を引くものである。雨霜、氷雪は寒を引くものである。地球、砂石、金玉は錬洩である。

火を引きつけて成長するものがある。寒を引きつけて、その上錬洩力をもつて成長しないものもある。火力と腐化が形成するものは様々な味の氣である。寒力、凝固が削り出すものは糞土である。糞土によつて養われ、火力によつて成長するものは草木である。組み合わせた氣を集め、組み合わせた味によつて養われるもの人間と動物である。湿氣、水液が集まり固まったものが雨霜、氷雪である。腐液が集まり固まったものは地球、砂、石、金玉の類である。

空氣は火を得れば水に入る。湿質は火を得れば空から出てくる。火には形が無く、物体にくつついて形を作る。湿質は有形であり、空火と組み合わせたて動きを形成する。合氣とは、いわゆる游氣のことである。つまり四氣は透過にして散大である。氣はあらゆる所に行きわたつており、物には必ず備わつてゐる。だから氣が存在するので引力が組み合わせられるのであ

る。組み合わせた質の氣は細土を形成する。湿氣を組み合わせると水液が形成される。大引は大きなものを削り、小引は小さいものを作る。重さや上下は全てこのような理由で分けられているのである。空氣はこれらを通し、火氣はこれらを蒸す。そうして天地の恵みが成されるのである。空中には人間と動物があつてそれぞれの味を備えている。土上には草木があつてそれぞれの味を有している。少ししか味を備えていないものと、たくさん味の備えているものとの差は、草木花がそれぞれ成分や効能を異にする所以であつて、また、人間と動物に寒煖と賢愚の差がある所以である。

人身には「清淡」、「辛素」、「鹹酸」、「瀋油」、「粘苦甘」というものが備わっている。だから動血脉は氣を含み、血はそれによつて活動しているのである。あらゆる部分の腺はそれぞれの味を分離し、体の働きは順調になるのである。「清淡」、「辛素」は混じりけの無い氣である。「鹹酸」、「瀋油」、「粘苦甘」は腐敗の氣である。混じりけの無い氣と腐敗の氣が組み合わせり調和したものが合氣である。合氣は万物に遍く行き渡つており、それが人間や動物を生かし生命を維持させている。何となれば網魚を小さい器に飼えば、弱まつてそして死ぬ。これは合氣が速く濁るからである。奇麗な水で育てれば長く生きる。これは合氣が濁らないからである。地に穴を掘つて池を作れば魚は自然と生きる。これは生かすべく理があるから生きるのである。生かすことのできない途にあつても止めたのである。このようにして地球の人や物の数を理解し、山海の魚や動物の数を知ら

とができる。

氣は時間がたつと濁り、病を生じさせる。その働きがなくなることによつてそうなる。氣は擦り減つて病を発生させる。うまく組み合わせができなくなることによつてそうなる。だから空燥が多くあつたならば旱ができ、質湿が多くあつたなら腐が生じる。腐毒には腫れものや瘡が多く、早毒には荒々しく勢いのあるものが多い。悪性の流行病や、湿つたできものはこういう理由で発生する。「鹹酸」、「瀋油」、「粘苦甘」を調整しなければ、熱や内臓閉塞、或いは飲食物が胃に溜まつてすっぱい液が出る症状や、寒氣に冒された病を長く患う。このような理由で人間や動物は疾病を免れることないのである。

空中には「有」（実体のあるもの）があつて、「有」の中には「虚」（実体の無いもの）がある。これらが集まり固まつて三腔と身体の全ての部分の流動が行われる。だから「有」があれば辛がある。実体の「虚」があれば氣がある。辛が変化したものが素である。氣が変化したものが淡である。あらゆる氣の変化したものが「鹹酸」、「瀋油」、「粘苦甘」である。こうして空中の「有」は肺に入り、静血脉を鮮やかにし活性する。「有」の中にある「虚」は膜外の組織間隙を発し、動血脉を導引する。氣は清であり、その質は氣である。淡は滋潤であり、その質は水である。辛は乾燥であり、その質は火である。素は骨立であり、その質は土である。「鹹酸」、「瀋油」、「粘苦甘」は、四行が積年腐化した氣である。これらはみな人間の身体に入っている。その氣もまたあちこちに行き渡っている。「塩（鹹）」は刺すことであ

り、「酸」は腐食すること、「澹」は滞ること、「油」は潤活に行くこと、「粘」は鍛えること、「苦」は寒さであり、「甘」は調和である。故に塩からいものを食べれば熱を作り、膿んだ体液を治療して腐化をくい止める。すっぱいものを食べれば痛みを発生させる。膿んだ肉を治療して元通りにする。「澹」に該当するものを食べれば滞る。様々な穴を閉じて腹下しを止める。油を食べれば痛を止める。刺された毒に効き、かさを治す。粘っこいもの食べればくっつくものを作る。色々な毒を治療して痰を作る。苦いものを食べれば腐化を抑える。ほてった熱を冷まして火を消す。甘いものを食べれば痛を止める。酸液を治療して毒抜きする。四味が万物の元となり、七味が万物の生命を維持しているのである。それが「清淡」と「辛素」が「体」を形成している所以であり、「鹹酸」、「瀋油」、「粘苦甘」が生命の維持を司る所以である。そうしてその味は全て人体のあらゆる部分を昇降しているのである。

また、その液はそれぞれ異なっている。涙液と汗液とは腺が異なっている、それぞれの液もまた異なっている。このようにして或る液に効き目のあるものが、他の液には良くないものであるということもある。このような事情が推察できないわけがない。

「清淡」、「辛素」、「鹹酸」、「瀋油」、「粘苦甘」の諸液はあらゆる部に満ち満ちている。腺はこれらの液を分泌し分け、「体」の働きに用いているのである。その液とは、「靈液」、「鼻液」、「涙液」、「耳液」、「肺液」、「肺空液」、「肺管液」、「心包液」、「血

球液」、「尿管液」、「乳液」、「汗液」、「唾液」、「胃管液」、「胃液」、「膽液」、「肝液」、「脾液」、「尿液」、「小腸液」、「大腸液」、「虫様液」、「腸網液」、「門脈液」、「小腎液」、「腎液」、「輸尿管液」、「膀胱液」、「尿道液」、「尿液」、「睪丸液」、「輸精液」、「精液」、「精液」、「陰莖液」、「子宮液」、「子宮腔液」、「靱帯液」、「軟骨液」、「骨液」、「爪液」、「齒液」、「毛液」、「巢白液」、「諸膜液」、「水脈液」である。

火がこれらの主宰であって、或るものは引き、或るものは動かし、それらをもって物事のあらゆる働きを形成する。嗚呼、火こそが体の全ての部分を司っているのである。これが天地の理なのである。天と地と人の氣と空濁とが合わさって三腔が形成される。諸々の容れ物の中には空虚がある。だから流動が起るのである。これをもってすれば、「有」が働きを成すのは氣の空間が存在するからである。「血液」および「靈液」が働きを成すのは水の潤いにある。乾燥は動きを作り、骨立は形を組み立てる。乾燥が動くことができるのは、骨立が形を作ることによるのである。ただ陽だけであれば変化は起らない。陰だけならば動くことができない。陽は陰を含み、陽は陰を含んで、そうして万物は生じるのである。

ものの動きや変化は釜の中の熱湯である。認識は釜の下で焚きつけている薪火である。熱することができるものは天火に存在する。長くあれるものは熱湯に存在する。「屈静」(とどまり動かないこと)と「伸動」(広がり動いていくこと)は共に生じ、そして行を形成する。「静受」、「動応」、「万変」は諸々の働

きを行う。「屈静」がそれらの根本であり、「伸動」は変化を作る。「静力」は形を作り、「動力」は触れば音を生じる。分体には様々な変化がある。それをもって万物の理があることを知るのである。「風化」もまた様々な変化である。それをもって後世になれば死が来ることを知るのである。このようにして物が存在すれば法則が存在する。形があれば動きがある。

陰陽が組み合わさることに理由があるうか。太陽が南の真ん中に来ることに理由があるうか。認識の働きがあることに原因があるうか。万物に法則が存在することに原因があるうか。だからこれによって身体の全ての部分を安らかにし、原因に従って万事に対応するのである。だから一万の質があればそれにとごとく応じ、百の質があればそれにとごとく応じるのである。そこには強弱や寒暖など無い。それをもって天地が万物を生じ育てる営為に助力し、鬼神論が誤っていることを確定することができるのである。嗚呼、分体有則の理とはなんと偉大であらうか。

村上善地堂玄水識す。

二九三三言。

※注釈に特に出典を示さない場合は、『漢語大詞典』・『辭海』・『大漢和辞典』など一般的な辞書に拠った。

【参考文献及び史料】

参考文献

- ▲青地林宗『気海観瀾』（国書刊行会編『文明源流叢書』第二卷、国書刊行会、東京、一九一四年所収）。
- ▲赤松文二郎編『扇城遺聞 郡誌後材』、名著出版、東京、一九七四年復刻版。
- ▲石田秀実『中国医学思想史 もう一つの医学』、東京大学出版会、東京、一九九二年。
- ▲今永正樹『医亦従自然也 村上医家事歴志』、村上記念病院・村上医家史料館、中津、一九八二年。
- ▲岩田広己「志筑忠雄の力学概念の理解と明治初頭理科教科書への影響―「慣性」、「質量」を中心として―」（『日本科学教育学会 年会論文集』、一九八四年所収）。
- ▲宇野哲人全訳注『中庸』、講談社、東京、一九九四年第一八刷。
- ▲大分県教育会編『大分県人物志』、歴史図書社、東京、一九七六年。
- ▲大島明秀「佛國曆象編」（ミヒエル・ヴォルフガング編『中津市歴史民俗資料館 分館 村上医家史料館資料叢書』第一卷、二〇〇三年、四〇〜一〇四頁所収）。
- ▲大島明秀「村上医家史料館所蔵写本『老野子』における「有外子」・「老野子」とその背景」（ミヒエル・ヴォルフガング編『中津市歴史民俗資料館 分館 村上医家史料館資料叢書』

第三卷、二〇〇五年、二二〇五二頁所収。

▲大島明秀「村上玄水写「六祖玄水屈伸録」とその背景―写本「老野子」との関連性を中心に」(ミヒエル・ヴォルフガング編『中津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料館叢書』第六卷、二〇〇五年、一〇二四頁所収)。

▲大島明秀『鎖国』という言説―ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容史―、ミネルヴァ書房、京都、二〇〇九年。

▲大塚恭男「ほか」編『講談社東洋医学大事典』、講談社、東京、一九八八年。

▲金谷治訳注『莊子』第三冊、岩波書店、東京、一九九八年第二二刷。

▲川島真人『蘭学の泉中津に湧く』、西日本臨床医学研究所、中津、一九九二年。

▲川島真人『医は不仁の術 努めて仁をなさんと欲す』、西日本臨床医学研究所、中津、一九九六年。

▲漢方医学大辞典編集委員会編『漢方医学大辞典』、雄渾社、東京、一九八三年。

▲クレインス・フレデリック『江戸時代における機械論的身体観の受容』、臨川書店、京都、二〇〇六年。

▲黒屋直房『中津藩史』、碧雲荘、東京、一九四〇年。

▲古賀十二郎著、長崎学会編『長崎洋学史』上巻、長崎文献社、長崎、一九六六年。

▲子安宣邦『鬼神論 儒家知識人のディスクール』、福武書店、東京、一九九二年。

▲最新医学大辞典編集委員会編『最新医学大辞典』第二版、医歯薬出版、東京、一九九六年。

▲志筑忠雄訳「鎖国論」(『少年必読日本文庫』第五編、博文館、東京、一八九一年所収)。

▲志筑忠雄訳「曆象新書」(国書刊行会編『文明源流叢書』第二卷、国書刊行会、東京、一九一四年)。

▲下毛郡教育会編『下毛郡誌』、大分県下毛郡教育会、中津、一九二七年。

▲創医学会術部編『漢方用語大辞典』、燎原、東京、一九八四年。

▲中医研究院、広州中医学院、成都中医学院編著、中医学基本用語邦訳委員会編『中国漢方医語辞典』、中国漢方、東京、一九八〇年。

▲中村謙介『和漢薬方意辞典』、緑書房、東京、二〇〇四年。

▲南京中医学院編、石田秀実監訳、島田隆司「ほか」訳『現代語訳 黄帝内経素問』上・中・下巻、東洋学術出版社、市川、一九九一―一九九三年。

▲日本学士院編『明治前日本天文学史』、日本学術振興会、東京、一九六〇年。

▲ミヒエル・ヴォルフガング「村上玄水の略歴」(同編『中津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料館資料叢書』第一巻、一〇六頁所収)。

▲山崎有信『豊前人物志』、美夜古文化懇話会、福岡、一九七三年復刻版。

▲山田慶兒『中国医学の思想的風土』、潮出版社、東京、一九九五年。

▲山田慶兒『中国医学の起源』、岩波書店、東京、一九九九年。

▲吉田洋一「解臟記并道原」(ミヒエル・ヴォルフガング編『中
津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料館資料叢書』第一
卷、二〇〇三年、七～三九頁所収)。

▲盧玉起、鄭洪新編著、堀池信夫「ほか」共訳『中国医学の気
黄帝内経医学の基礎』、谷口書店、東京、一九九三年。

史料

▲志筑忠雄訳「鎖国論」(写本、卷之壹：一四丁、卷之貳：一九
丁、卷之三：一六丁、卷之四：二二丁、二六・六糶×
一八・二糶、岡本経邦旧蔵、京都大学附属図書館所蔵写本)。

▲村上玄水著「四元行火吸之論」(写本、仮綴四丁、二七・八糶
×一九・九糶、文化一一年成、村上医家史料館蔵)。

▲村上玄水著「天地分體論」(写本、仮綴一二丁、二七・〇糶×
一七・一糶、村上医家史料館蔵)。

「外療集験方 五」 (二丁～二六丁)

細田富多

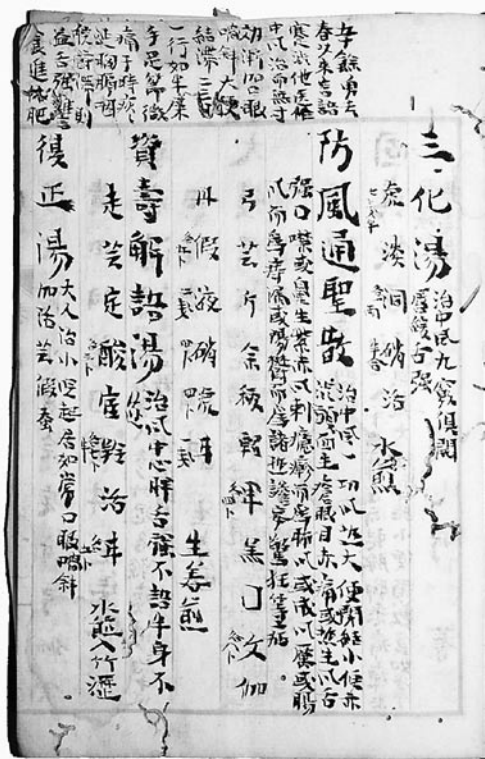
はじめに

村上医家の第七代家督玄水¹ (諱は卓。一七八一～一八四三) が遺した「外療集験方」(縦二一・五糎×横一五・七糎)という写本について、「カスハル書口訣」という分を中心にすでにミヒエルによる紹介があるが²、以下は二丁から二六丁までの分を提供することにした。

1 ミヒエル・ヴォルフガング「村上玄水の略歴」『村上玄水資料1』村上医家史料館資料叢書1、中津市教育委員会、中津、平成一五(二〇〇三)年、一～六頁。

2 ミヒエル・ヴォルフガング「新旧西洋外科術が混在する地方蘭学者の史料 村上玄水写の「カスハル書口訣」を中心に」『村上玄水資料(二)』(中津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料館資料叢書、中津市、二〇〇四年、七一～八八頁)。

図一 「外療集験方 五」二丁 (中津市村上医家史料館蔵)。



【史料】「外療集驗方」

〔二丁表〕

中風 疼

千金三黃湯

治中風手足拘急百節疼痛煩熱心乱惡寒經日不欲飲食

卑 搖 著 小 文 心熱加虎 氣涅加薇 悸加蠟 渴加

瓜呂根

東垣清陽湯

治口眼喎斜類顛緊急胃中火盛汗不出而小便數

耆 竹 周各二錢 甘 紅 屠 桂各一錢

保元湯

治中風脾胃腎素虛元陽衰微不勝風寒卒昏冒不省人事半身不遂

伽微走技

烏葉順氣散

一婢歲十八性質肥白痰半卒然驚惕而絕、已甦。翌日不語吸則

顛彎張呼則如常。脈浮大而動乃■此方而遂愈

姜 貴各二錢 蚕 永各五卜 卑

弓 莞 口各一錢 洞一錢 甘三卜 姜棗煎

〔二丁裏〕

回首散

即前方有活搖蚕三味也

必讀十味判散

治中風血弱筋骨疼痛拳動艱難

走 斤 耆 余 弓 屏 伽 官 伏 芩

人參三四 附子五錢 必讀云、卒然昏仆遺尿手撒汗出如玉絕症已見惟

大進參

附或冀万一

古防風湯

治卒中風口眼喎斜言語蹇澁四肢如故別無所苦

屏 活各三錢 甘一卜 水煎入麝一厘調服

三生飲

卒中昏不知人口眼喎斜半身不遂痰氣上壅者此方主之兼治痰厥

氣厥等證

星二錢 川烏生 走生各一錢 密五卜 生姜煎

〔三丁表〕

三化湯

治下中風九竅俱開唇緩舌強上

虎七錢半 淡 洞各一兩 硝半合 活 水煎

防風通聖散

治中風一切風熱大便閉結小便亦澁頭面生瘡眼目赤痛或熱生風

舌強口噤或鼻生紫赤風刺癩疹而為肺風或成風厲或腸風而為痔

漏或陽鬱而為諸熱譫妄驚狂等症

弓 芸 斤 余 祓 軹 卑各四卜 羔 口 文各八卜 伽

丹 假各五卜 液二錢 硝四卜 虎四卜 甘一錢 生姜煎

〔欄外上〕五十餘ノ男去春以來言語蹇澁、他医作中風治而無寸

効。漸加口眼喎斜大便結滯二三日一行如半屎手足節

微痛于時痰涎胸膈咽喉鬱滯則益舌強難言食進休肥脈

資壽解語湯

無方投藥芸通聖散而有効云

治風中心脾舌強不語半身不遂

走 芸 定 酸各三卜 宦 羚各七卜半 活 甘 水煎入

竹瀝

復正湯

大人治小兒起居如常口眼喎斜 加活芸假蚕

〔三丁裏〕

姜 芸 假 小 文 余 定 斤 弓 伽 伏 貴 田 洞
莞 口 蚕 甘 生姜煎

導痰湯

王肯堂加石菖人參竹瀝名滌痰湯。治中風痰迷心竅舌強不能言

田 星 貴 伏 洞各一兩 甘半兩 生姜煎

大腹皮散

謂七情過極逆氣運倒身冷涎少。用此方治妙也云。氣逆加姜泉

傷食加曲查

腹六卜 蚕五卜 水 水シ 姜 洗 貴各二卜 蘿蔔子 沈

香 洞 雪 假各三卜 生姜煎

〔欄外上〕大腹皮也本治諸腳氣腫痛小便不利

固真飲子

治老人年過稀古兩腿腰脚悉痛痺步履艱難大便秘結小便頻數食
如常脈強緩時瀆者

薇 積 斤 著

〔四丁表〕

屠各一錢 芞 犧 伽 芋 山 補骨各五卜 會十粒 貴
伏各八卜 甘各七卜 水煎

傷寒

證治準繩

云王宇泰曰「余每治傷寒溫熱等證爲庸医妄汗誤下。已成壞證
死在旦夕者以人參一二兩用童子小便煎之。水浸水冷飯之立起
齊周余甘卷一卷二卷

齊周余甘

治小兒瘡疹欲發未發、及解傷酒膈熱口瘡咽痛

水煎溫服以病去身清涼爲度。若表熱加柴胡內熱加黃芩有吐血

衄血或班紫赤

〔四丁裏〕

加生芩牡丹皮熱甚加山梔子黃連或加連翹天瓜粉。尤妙大便硬

加枳壳大黃以利之。頭痛加川芎身痛加羌活胸膈痞悶加枳梗咳

嗽加杏仁有痰加半發班加玄參如老人去芍藥加柴胡茯苓人參

小柴胡湯

加柿蒂治傷寒發熱嘔逆○又治壳疽食頭眩心中拂鬱加壳芽卜洞

丹大○又大陽病七八日脈細惡寒陰陽但虛者不可發汗吐下宜小

柴胡湯誤汗令人耳聾

萬安湯

傷寒病后煩悶不止者投此方而見其機。發機發投某藥治之云

多 伽 匿 貴 田 婆 □ 淡 活 甘

〔五丁表〕

姜棗煎

大小承氣湯

先熱而後厥者手揚足抑煩燥飲水畏熱。大便秘小便赤佛鬱大抵熱深厥。亦深脈沈滑顏面有汗指甲溫皆伏熱也。此二方主之
蒼薇斤木貴甘

陳志仁傷寒每欲狂走四五人扶捉不足脈虛數用柴胡湯反劇。用此湯一服狂定、再服安眩。

黃連解毒湯

治大熱不止、煩燥乾嘔口渴喘滿陽厥極深蓄熱內甚、及汗吐下後寒涼諸藥不能退其熱者

聯 文 屠 丹各二錢 水煎○知母石膏妙

喘滿宜似痰症。誤治則不應內熱甚、而喘滿決此方伎倆嗚呼此方妙。

傷寒陽厥四支冷脈微口反渴自利無反……微喘依本方加桔梗茯苓妙甚

〔欄外上〕 兎角脈二洪大ニシテ力ノ有ハ解毒湯ナリ

〔五丁裏〕

犀角湯

コノ藥ハ傷寒熱五藏ニ入り發熱狂言シ舌根サシコハハリ大便結起臥サハカレツ

余 薰 理各二勺 犀 兎三勺 微二勺 葱二 竹葉三 煎服

陰厥 脈沈弱指甲青而冷 陽厥 脈沈滑指甲紅而溫

竹茹溫膽湯

傷寒日數過多其熱不退夢寐不寧心驚恍惚煩燥多痰不眠者此方

主之

薰各二錢 候八ト 微 聯各五ト 甘三錢 □ 貴 田 筴 伏 洞各一錢 壽■麥冬 生姜三片棗一枚水煎

〔欄外上〕 妙也

〔六丁表〕

赤水醫案

余治傷寒用柴葛解肌湯及柴胡白虎湯而熱不解者加生地白朮則熱無不退

柴葛解肌湯

目痛鼻乾不眠眼眶痛脈來微洪、宜解肌

薰 文 齊 余 活 莞 □ 羔 甘 生姜水煎
本經無汗惡寒去文加卑 夏秋換水藥

一女三月患頭痛身熱口渴水瀉不止。身重不反側日漸昏沈耳聾。眼合夢多乱語六脈洪大觀其色內紅外黑口唇乾燥舌心黑胎不知人事

〔六丁裏〕

此疫症也。小柴胡合二白虎湯服之、驗水便不利熱渴不退以辰砂六一散一兩燈心揚送下驗

理中安蚘湯

傷寒吐蚘者手足冷胃空虛也。此方主之
凡吐蚘不止加聯屠各五ト椒十四粒。若足冷甚者必加走半錢或三ト。

薇三勺或七ト 伽 伏各一錢半或一錢 烏三箇 椒十四粒或

一ト 永一錢半或五ト 水煎

外陽發表湯

冬月正傷寒頭疼發熱惡寒項脊強重脈浮緊無汗頭如斧劈身似火炙者宜

〔欄外上〕 回ノ麻黃湯也

五十年ノ男正月ノ時分風邪ハゲシ。之ヲ療シ大形治シタダ惡寒シテ日ナタブクリナドシテ氣分アマリ惡敷モナクタダ惡少々ト云フニ主支麻各半ヲ加大ニ汗シテ良

〔七丁表〕

此方

卑 杏 枝 甘 弓 芫 活 芸 周 姜 棗 豆 鼓 水 煎

疎邪實表湯

冬月正傷風頭疼發熱惡寒鼻塞項脊強重脈浮緩自汗宜實表散邪宜此方

技 余 芸 弓 活 伽 甘 生 姜 三 片 棗 二 枚 水 煎

○汗不止加蒼○喘加柴杏○胸中飽悶加壳口

一婦人疫後又復而身疼痛麻木晝夜不止者十全大補主之其驗之及三四人云

〔欄外上〕 回ノ桂枝湯也

傷風ノ證汗クミ出スコトク咽ヲカハカスコト甚シク熱前傷風ト脈モ大イニハ見レドモ大熱ノ病ホトニハヤクハ無ケレドモハヤク傷風トサヘ見付タタラハ主支湯ニ文知兎ヲ加テ用レハ一服ニシテ驗アリ

〔七丁裏〕

同陽發表湯ノ條上 熱傷風咳嗽喉痰面熱此素有痰。大鬱熱在內熱極生風或爲風寒

所束不得發越此熱。爲本寒爲標治宜清熱散寒。經曰「火熱則發之又曰風寒外束者可發 二キ一加凶瑞玄參可冷西咳不嚙加呷夜嗽多加理喉痰減田痰盛加勤奴筋熱氣壅輕則加雪籙重則加兌玄珠

和解也。治傷風鼻塞咳嗽胸脇吊痛發熱口渴

り 杏 貴 田 西 可 齊 甘 灸 図

〔八丁表〕

雪 姜 三 葱 二 束 一 風 邪 重 加 屏

半夏桂甘湯

治非時暴寒伏于少陰脈微弱次必下利一名腎寒

田 桂 甘 各 三 勺 生 姜 五 片

通湯

治鄭声脈微自利厥逆

走 三 勺 永 一 勺 五 卜 葱 二 茎 水 煎

九味羌治湯

頭痛腰脊強熱無汗惡寒脈浮緊而有力量 方見感冒入ノ拾遺

二 柴 苓 湯 即 小 柴 胡 湯 合 四 苓 散 退 熱 止 瀉

〔欄外上〕 此藥ニ去地黄加柴胡大驗出於玄珠

〔八丁裏〕

百症ニ云若有頭痛惡寒者小柴ニ加桂值千金。壯年ノ男感冒發熱及十余日、無汗時々譫言口乾尿黃、大便順脈細數啓迪院用參り飲全安

〔九丁表〕

回斯篤兒

寒發熱病 瘧疾也。

所在腸胃及内藏寒發熱病之治法○宜疏解粘穢留飲、粗凝留結、惡液及胆汁壞液之汚物停滯

間時之治法

宜去惡液邪毒為良液也。其藥苦味劑及塩藥良也。其人熱性者

宜塩劑、其人寒性者宜苦味

○エツセンチャ アフシンチ ゴムホシタ 其方

茵陳頂穗^ス六握 薊穗二握 石竜胆花一握 泥菖 良薑各八莖 橙皮 佛手柑各三莖 肉桂四莖

〔九丁裏〕

丁子一莖 焼酒三百莖

右火酒二浸ス

○アレシハルマカ 解毒劑也

宝函云フ 白芷根 竜胆根 芸香草 紫蘊 没藥 竜腦 鹿角霜ヲ合セ製スルモノナリ

○エリキシル プロフリータチス。ハラセルシ

芦薈 没藥各十六莖 泊夫藍八莖

先没藥ニ硫黄精ヲ以湿シ溶シ而他ノ藥ヲ交ヘ合セ而メ此ニ焼

酒ヲ三指横經ニ浸シ此ヲ八日ガ間煖砂ニ置キ自然ニ精氣ヲ引出

シ此ヲ他ニ移シ其跡ヘ又前ノ如ク焼酒ヲ入レテ前ノ如ク引出シ

其汁ヲ混合シテ貯用

○エリキシル アンチヘブル ミカエリス 發汗劑

〔一〇丁表〕

石竜胆 薊草 芸香 蛇含草各三種 竜胆根 石韋根 馬兜

鈴根 獨活根 泥菖根 半夏各八莖 丁子 肉豆蔻 干姜

草機各八莖 右剉搗キ焼酒程好ク注キ浸ス

○エリキシル ヒットリヨリ メインシクチ

良姜十二莖 泥菖根八莖 薈香 紫蘇各四莖 肉桂密漬 丁

子 生姜各廿四莖 肉豆蔻 スソールト ヘノフル各三莖

高南黄 佛手柑皮各一莖 白冰糖此二莖 右為未湿ニ焼

酒ヲ以テシ而鉄製ノ丹礬水ヲ隨宜ニ注キ入レ一二七日浸シ精

氣ヲ出シ而シテ濾過シ貯○又其滓ニ火酒ヲ隨宜ニ浸シ暖所ニ

置キ十五日ノ間浸出シ攪セ置キ貯フ

○ミキステアラ シムブレキス 發汗劑和ラナル

〔二〇丁裏〕

酒石ノ精十六莖 丹礬精八莖 スヒリト テリアチル カム

ボラト センドロム四十莖

右共交三日ノ間微火ヲ以テ徐々温ム

○スヒリト テリアチル カムボラト ヤンドロム

帝里亜加八十莖 泊夫藍^{サフラン}八莖 赤没藥五莖 焼酒二百莖

右三日ノ間固封シ而ノ滴シテ露水ヲ取ル。且ツ蒸露罐ノ兜内

ニ竜腦四莖ヲ掛ケヘシ。

○チンクチュラ アンチモミ

アンチモミニスタルク水ヲ入レ焼酒ヲ交ヘ製スル劑也。

○チンクチュラ タルタリ 下利劑

酒石塩百莖 此ヲ鎔壺^{ルツボ}ニ入レ火ヲ徐々ニ盛シ隨テ酒石吹沸

シ遂ニ溶化流動ス。少間シテ其溶化スルモノ帶

〔一一丁裏〕

緑蒼色トナル。而後其鎔壺下ノ火ヲ去リ寒冷ス。此塩ヲ硝子ニ入レ而シテ此ニ蒲桃酒精ヲ入レ三指横経ノ高サニシテ其硝子ヲ打開キタル日受ノヨキ処ニ置キ浸漸溶化セシメ而後此ヲ熱灰上ニ置キ火氣ヲ程好シテ置クトキハ此酒精血紅色ニナル。此ヲ他ノ器ニ写シ其塩ヨリ血色ヲ出シ尽シ此ヲ罐ニ入レテ露水ヲ滴シ取ル。其血紅色汁是也。即チ所謂酒石大湯煎也

○タルタリユス ヒツトリ ヲラチユス

功能身体ヲ通利シ下利ヲ為シ脾病積聚神志沈重病三日間熱病マロソブゲスワエル ヲ治シ諸道ノ閉塞ヲ開利シ小便ヲ通利ス。服量一トヨリ五トニ至ル。

酒石油丹礬精ヲ合製スル凝固塩ナリ。其法硝子罐ニ分量ニ任セテ酒石油ヲ入此丹礬精ヲ徐々ニ注ギ攪セ合セ火ニ上セ煎拂シ久クシテ水氣飛沸スルコト無迄ニ煎熬シ此ヲ砂上ニ上ケ徐火ヲ以ニ徐々ニ蒸湿氣尽テ外散シ甚々白キ塩ハカリ跡ニ残レルヲ収貯

〔一一丁裏〕

○アルヲニコム チュフリカチユム

丹礬精ノ底ニ凝精スルモノ也。然此多凝固セサレバ其代リニ溶化スル丹礬溶化スル焰硝或ハシケルカラヘルヲポットアスナリ合セテ代用ス

○ニツトリスム アンチモノニコム

焰硝トアンチモノニコムヲ合シテ凝固スルモノ也

○サルヂヂスケハ セイルヒウス

瘡ノ吐劑

〔一二丁表〕

○タルタリコム エメチキユム 吐劑ノ名

製酒石塩トコロキエス メクルロリユムヲ合セ煎シタル劑也

○コロキエス メクルロリコム 吐劑也

泊夫^{サツラン}籃色ノ末也。ヘバルアンチモノニ數々湯ヲ以洗ヒ焰硝ヲ去ルモノ也

○ヘバル アンチモノニ

アンチモノニコム 焰硝 各百廿八錢

右為末攪合石白ニ入レ瓦ヲ以蓋ヲ為ス。然レドモ其上ニ一ツノ穴ヲ開テ置クベシ。此ニテ炭火之火ガツク也。而此内ニヨク熾タル炭火ヲ投シ内ニテ薰シ石ノ白ノ冷タルニ及ンテ白ヲ振ル。此ニ由テ光亮ナルモノ分レ細末底ニ沈ム。其色肝ノ如シ故ニ如此名ク

〔一二丁裏〕

○チヒニコム エメチクム

吐劑瘡部 即アリワヘネチクワ リユランチ也

蒲桃酒廿四錢 コロキエス メクルロリユム八錢ヲ入レ十二時間浸シ濾過ス

〔欄外上〕イヘフコアンナレ根此藥モ瘡吐藥也

瘡ノ下劑

洗藥

明礬一斤 硫黃三斤

丸藥

ヲクリカンキリ加トルシス丸 辰砂二匁 ヲクリカンキリ五

ト トルシス三ト

右三味為丸

〔一三丁裏〕

丹礬 明礬 綠礬各五匁 硫黃五十匁 樟腦五匁

苦莘沐湯

苦莘四斤 龍膽四斤 樟腦二斤

右先水以四斗煎、三斗後入樟腦洗患部

惡瘡ハルサモ丸 卓

没大 乳中 枯小

右三味為丸○如二此凶而一日服百粒二度

〔一三丁裏〕

苦莘湯 卓

治微毒口牙生瘡而出膿者 苦莘游 薔薇花

右三味以洗之後貼紫金散 カトルシス

瘡目及爛目

四十匁唐土 五匁樟腦 三匁辰砂 ハルサモ

右四味ハルサモコッハイを唐土樟腦末二滴シ善クマゼテシメ

リ合さネリ、後蜜ヲ入レネリ終ル也。煉蜜カタク時ハ酒ヲ入

レ用ユ。

猛汞 汞十匁 食塩十一匁 消石九匁 丹礬二十匁 甘汞

猛汞四十八匁 汞三十二匁

屠 輕粉 治微瘡倍傳ナリ

右為末丸シ用ユ

整骨新書 近出来卷木綿ノ傳等アリ 中ニ柏木節ヲ露水ヲ取

リ油ヲ分別スル者ハルサモコッパイハニ異ルコト無ト云

〔一四丁表〕

外療方

洗藥

蘭人呼為ラフメント

〔欄外上〕玄水製「結毒下劑 砂五匁 硫二匁 虎四匁 ドル

五ト 硝十三匁五ト

右五味入龍腦為丸

速貨必兇洗方

主治癰疽疔毒頑惡毒瘡癩疽鵝掌瘡若微瘡結毒下疳糜爛臭氣撲

鼻者並皆主之如癰疽臭爛甚者、洗後以霸膏八錢 樟腦耐五匁

ヘシビタート一匁 和均傳患上 ソツヒル五匁 石灰水

九十六匁

右二味混和蘸絲而洗患所

膽礬洗

主治同前

胆礬五ト 礬石一匁 銅綠三ト 鹽少許

〔一四丁裏〕

嚴酢半杯 燒酎一杯

右六味同以微火煎之減七分爲度蘸絲洗患上

又方 治同前

胆礬十二錢燒枯 石灰水二百四十錢

右二味臨用時混和作劑浸絲洗患部

礬灰洗

主治洗瘡癰腐生肉又治疔瘡凡諸瘡將差者皆洗之能生肌皮

礬灰一錢末 沸湯九十六錢

右製用同前

蘆薈洗

主治癰疽疔毒諸瘡臭爛發紫黑色者屢洗之洗後反作痛不可當者

宜以水和之 蘆薈四錢研以燒酎五合浸

〔一五丁表〕

樟腦五卜研 胆礬二錢研 煨砒五卜 煙草者取汁二百六十錢

右五味和調慢煎以布漉去滓蘸絲洗之

樟腦洗

主治癰疽諸惡瘡癰瘡結毒下疳糜爛諸瘡難瘳及婦人乳腫日久不

消者

樟腦 砂糖 銅綠各二錢 爐眼石一錢半研 燒酎百錢 醋

八十錢 水百五錢

右七味同鍋煎之半時而浸絲布洗患所後浸絲而掩之

沒藥洗

主治癰疽諸瘡下疳蝕爛

沒藥一錢 蘆薈一錢一本作三錢 薔薇蜜三錢

〔一五丁裏〕

一本作八錢若無代用煉蜜 燒酎四十八錢

右四味和調洗法同上

乳香洗 主治同上

乳香三錢 蘆薈 沒藥各一錢 蜜三錢 燒酎四十八錢

右四味和均洗法同前

粉錫洗

主治洗膏瘡漆瘡湯火

粉錫二錢 芎藭露六十二錢或用石灰水又可

〔一六丁表〕

摻粉藥

〔欄外上〕油包鼻内生瘡咽喉乾燥者是微毒在內爲此病也。紫金

散一匁四トニドル三ト入レ咽喉ニ貼シカンフラスト

ニ紫金散四匁トルシス式ト入金瘡コツパイパニテ解

キ鼻内ニ貼

黃丹摻

主治癰疽諸瘍濕爛難燥者、若欲治風毒腫痛鶴膝痺脛膝瘡頑惡

毒瘡不可名狀者、以醋和調攤絲而貼之此方善解血熱消腫散結

滯 鬱金十錢或以黃檗末代之 黃丹三錢 礬灰一錢

右三味研爲末貼患所瘡人呼爲ペレフスシテレイナ

礬灰摻

主治癰疽諸瘍微下疳結毒瘡漏濕爛疼痛解毒去水氣又善止金創

出血諸藥不得禁者

礬灰六錢 胆礬四錢

右二味為末粉瘡所蝨人呼為エスカル也

沒藥粉

主治同前 沒藥七錢 礬石三錢

右二味為末貼之

〔欄外上〕卓以沒藥代紫金名紫金散治。同又治咽喉口内生瘡糜

爛者

〔一六丁裏〕

胆礬摻

主治癰疽諸惡瘡爛蝕不歇臭氣撲鼻者此方可。以代ヘレシビ

タート用

霜胆礬八錢 鹿角灰四錢 赤石脂 乳香 輕粉各二錢

右五味研為末貼患上

又方

治同前 煨胆礬六錢 鹿角灰四錢

右二味為末貼ス

硃砂粉

主治癰疽雜瘡微瘡下疳爛蝕臭穢不觸近者

朱砂六ト 寒水石 石膏 龍腦各三ト

右四味為末粉瘡上

〔欄外上〕龍腦寒水散 卓以之硃砂粉為一一一散

〔一七丁表〕

拔疔散

主治疔瘡發背頑惡腫毒及腫瘡腐敗累年不瘥者

枯礬 綠礬 硝石 食鹽 水銀

右五味研為末入土器安火上燒テ変赤色為度離火蓋土器密封以泥。慢火以燒之二時離火冷而貯之

松香散

主治膿窠瘡遍身腐爛為痒腫痛者

蛇床子 大楓子仁 松脂 枯礬各十錢 黃丹 大黃各五錢

輕粉三錢

右為末香油ニテ調和シ貼ス腐爛甚者以末藥摻之

白芷散

主治蝮蛇咬

〔一七丁裏〕

天南星 半夏 雄黃 白芷各一錢 胆礬燒五ト

右為末摻患部

鉛華散

主治跌撲折傷接骨統筋活血止痛

當歸 鉛華^{唐土} 硼砂各等分

右為末糯米糊調和貼患部以布纏繞患部

楊梅散

治跌撲折傷接筋骨傷損

楊梅皮 無名異 麴粉^{ムコ}各等分

右為末染布家糊二和均シテ用ユ

搜膿散

連年愈サル惡瘡ヲ治ス

〔一八丁表〕

白芍藥三ト 川芎二ト 白芷一ト 輕粉三ト 燒

右為末貼瘡口

百中散 主治痔瘡腫痛者

五倍子三錢 黃柏二錢 輕粉一錢

右為末香油調和貼患部

廣東惡瘡 本草綱目附方

調上二三日即愈百發百中天下第一方出武定侯府內

雄黃一錢半 杏仁三十粒去皮 輕粉一錢 雄猪胆汁

右為末洗淨以雄猪胆汁調上

小兒走馬牙疳 本草綱目附方

雄黃一錢 銅綠二錢

右為末貼之

日久頑瘡不收者 同上

銀朱一錢 石灰五卜 松香五錢 香油一兩

右為末化攤紙上貼之。又治廉瘡不斂

〔一八丁裏〕

疽瘡發背 本草 銀朱 白礬 右各等分煎湯溫洗

黃水濕瘡 本草 銀朱 塩梅

右和搗傳之

〔一九丁表〕

水液部

○^{アクハアカルシス}垂挂兒華濕糸 石灰水也

主治諸瘡瘍焮熱發痛者。蘸絲薰洗之、或和礬灰則去諸瘡腐爛

長肌肉

石灰一升 水二升半

右先煎水至七分灌之於大桶盤容灰攪攪令渾 ……

○^{緑也}クルウン ^{水液也}ワートル 緑水也

主治和白湯洗之治疔腫瘡疽散癩消痛、下疳便毒微瘡結毒頑惡

瘡漏多年不愈臭氣撲鼻者

膽礬二錢 銅青一錢同研 水六十二錢

右三味同煎至減半為度

〔一九丁裏〕

去滓收貯於硝子罐

○^同一方

名烈緑水以其性較烈也

主治烈煎藥故有積黑子滅鬣之効其方 膽礬 焔石 鹽各炒三

錢

右以鹵三升攪和內罐封口置濕処凡十日

〔二十丁表〕

酒釀部

○^テンキチュル ^カンプル 樟腦酎也

主治外漬絲洗之則治癰疽疔毒諸般瘡腫等、和石灰水則散瘡焮

熱腫痛治多年毒瘡、和赤石脂則止下疳糜爛、和速必兒又同、

和沸湯則灌金刃傷有止血消痛使肌肉柔潤之効

樟腦十二錢為末 燒酒一百四十四錢

右大湯煎七日

○テキンキチユラ メラ 沒藥浸

主治諸般頑瘡癰疽疔毒。拔惡肉生新肉又蘸懸治骨節疼痛打撲折傷。又灌之金創止血和痛。又注之耳中治貯膿爛痛不可禁者

○テンキテール スクシーネ 琥珀耐

外洗諸瘡癰疽則止腐長肌肉。滴耳則治貯膿。灌金創則使腫痛忽消散

琥 乳没各二十一錢 燒酒百九十二錢

〔二十丁裏〕

○チエリキシル フロフリタチス

外治癰疽諸毒瘡下疳糜爛

サフラン 沒 蘆薈各十二錢 燒百九十二錢

〔二二丁表〕

醋煮部

○ゴラルアルド 是人姓名也。

蓋此人始製此方。因名焉乎。密陀僧醋也

主治癰疽。初起諸般瘡腫結毒漏瘡疥癬鵝掌瘡湯瀝火爛膏瘡漆瘡癩疽脫癰凍瘡皸裂痔漏脫肛金創打撲等其治各與燒酒清水等合漬絲掩患所安掩咽喉。痛如胸痛腰痛又得如黴瘡結毒一功、惡糜爛臭氣刺鼻不可近累年難愈者以石灰水代水更加灰礬少許、其加灰礬少許和濕湯治口舌爛痛者和薔薇露洗諸眼疾。是瘍医第一捷藥也。其効不可殫述。

密陀僧五十錢研末 醋一升

右二味共内瓦器上罈以微火煎之候葉變紅黃色為率停火帛濾取

清納於硝罈密封。又存其滓和蜜傳靴鞋損傷和醋貼濕癬痒疾諸毒刺虫等皆有効

〔二二丁裏〕

○アネイチ フロンビイ

主治時疫傷寒喝瘧等壯熱如灼大渴煩懣者以四五滴冷水調下。又塗丹毒惡瘡鼠漏結核乳癰乳巖皆有効

煨鉛煨法煮鉛令投硫青然之數攪變灰色為度 研細 二百錢

醋二百五十錢

右浸二三十日一取二澄清一

〔二二丁表〕

傳貼部

○イングエンド バジリコム 名主膏

主治傳癰疽諸瘡去焮熱止疼痛其膿未成者即消己、成者即潰又和諸膏貼之漏孔不合者以速貲必兒。若無此以輕粉什之一。和調漬挿條挿之瘡孔中惡膿^{代之}出盡而瘳氣性皆濕。

乳 沒 松液各研 的列並低捺 番瀝青 黃蠟 牛脂各十二

錢 麻油百錢一本作八香

右八味先蠟油脂内鍋同煮令烱消別煮溶瀝青濾清與前葉相和然後下餘藥攪轉片時許漉布去滓

〔欄外上〕 凡膏之稀者謂イングエンド、硬者謂エンプラスト。

法典ノハジリ名君王膏ト。黃蠟・硬瀝青・松香各

四十八錢

胆八油百九十二錢

右煮テ溶解加ニ篤耨香三十二莖ヲ合攪旋テ冷定ス

○ケレイン 猪云下品 バジリ

即去乳没の列並低擦者也為貧家設之

○エンプラスト ハジリコム

前藥之硬者

〔一二三丁裏〕

○インクエント エケビシヤコム

主治癰疽疔腫丹毒鼠漏乳巖及黴瘡結毒癬瘡腫瘡頑結惡毒瘡一功。難名状之病潰爛難収口有傳此膏速脫壞肉

銅緑五十莖 一作四十莖 礬灰十莖 一作八莖 醋二十八莖 蜜百莖 一作百二十莖

右研銅礬為末先煮蜜以篋子攪之次入醋再攪轉下鍋而投銅礬煉調為膏

〔欄外上〕 法典ノエジツト 主治金創穢汚ヲ清淨シ腐瘡ノ死

肉ヲ分除シ生肉ヲ見 腐壞ヲ良膚ニ復ス

銅青四十莖 礬石八莖 蜂蜜百十二莖 好酢五十六莖

右四味調シテ慢火ヲ以煮稍堅キ軟膏トス

○インクエント ヒユスコム

加入半生半^{十莖}燒膽礬調煉成膏者謂ヒユスコム。雖功用寢均至其拔惡肉則較起越於霸膏

○エンプラスト ミイニイ 黃丹膏

主治諸瘡瘍新肉已滿不能生皮者瘡癰疽癰解毒消痛蝕膿長肉

〔一二三丁表〕

黃丹九十六莖 燒鈹十六莖 黃蠟四十八莖 麻油百九十二莖

右四味以雨水半外煮黃丹蠟油令溶尽不住手攪之候藥為紫色除火待冷温之交投鈹調為膏

○エンプラスト デヤハルマ 名猪脂膏

主治癰疽發背。諸般瘡腫金創打撲而散熱消痛長肌肉

猪脂 密陀僧各四十八莖 礬灰十六莖 白蠟二十四莖 麻油八莖

右五味先以雨水半升和猪密内鍋慢火熬之。次下蠟油攪片時。

更挑一滴投入盆水中試膏凝成珠子。再以雨水半升煎之候去水氣入礬灰離火攪轉為膏

〔一二三丁裏〕

○イングエント アルホム カンフラスト 名樟腦膏

主治諸瘡母、問新久散血熱癰腫痛燥膿殺虫生肌皮法典ノ主治肌膚ノ痒及打癩ヲ治ス。湯火傷ヲ療ス名声アリ

樟腦二莖入乳鉢中和麻油少許研調 黃蠟二十四莖 薔薇油九十六莖 粉錫四十八莖

右煮蠟及油令烱消離火下樟攪轉候温冷之交下粉錫攪調為膏

〔欄外上〕 法典云官粉膏一名白樟膏

白蠟二十四莖 薔薇油九十六莖

右煮テ溶化官粉四十八莖ヲ下シ攪轉シテ候冷、樟腦二莖加テ膏ス

○エンプラスト デサホーネス 名灰鹼膏

主治傳一切瘡瘍退熱毒燥膿汁手足筋攣拘急屈伸不便

灰鹼 黃丹 粉錫各四十莖 樟腦八莖研 乳香油九十六莖如

無此物代用麻油

〔二四丁表〕

右灰鹼先合雨水半升煮而焯之令水氣尽。次入黃丹乳油頻攪轉入粉錫攪和下鍋入樟腦煉為膏

○エンプラスト テヤホンホリゴム 名鉛膏

主治諸般瘡瘍未潰破者貼之則醒熱止痛散頑硬消癰癥結核

煨鉛五十六錢 寒水石二十四錢 入瓦罐微火煨之至發炗声噴水圧之又發又圧如此凡七度 粉錫四十錢 乳香二十四錢 白蠟百九十二錢 龍葵油百四十四錢 代用薔薇油又麻油

右六味投蠟油於鍋內慢火熬令炗停火下諸葉攪之片時調為膏

○エンプラスト コミイニイ 名麻人膏

主治肺痿肺癰胸肌作痛筋骨攣痛痿痺冷痛

〔二四丁裏〕

麻子人三十二錢以麻油浸 月桂実十二錢剉 肉豆蔻四錢研

黃蠟五十六錢 野菊油四十八錢 乳香 沒藥各二十錢 松液 杉淚各八錢

右九味先投蠟油於鍋內慢火煎熬候消下鍋。次下麻子月桂肉豆

蔻攪轉再慢熬。下松液杉淚次乳香沒藥濾去滓

○エンプラスト ヌテキテコン 磁石膏

主治傳諸瘡壞証斂口去痛。塗貼針刺折入肉裡者經宿便出

磁石八錢 密陀僧百四十四錢 乳 沒各二十錢 松液 杉淚 各二十四錢 月桂油十六錢 劉寄奴油百四十四錢 黃蠟 四十八錢

右密劉油合雨水半升同煎使調和候。水氣尽入蠟溶下鍋入諸葉攪均之。

〔欄外上〕 以布漉入磁鉢中尚攪之冷硬成膏

〔二五丁表〕

○九一膏 外科撮要

〔欄外上〕 微温

主治傳癰疽諸瘡開口吸腐肉之聖膏也

香油^{ゴウヤク} 松液各二十目 蜜蠟十六錢 酢^サ十錢 ホルトカル油三錢 牛脂 鹿脂 鷄脂 椰子油 礬灰末 胆礬燒末 硝子末 乳香末 銅綠各二錢

右油脂松蠟酢入瓦鍋以慢火煎。松蠟溶消而待黃沫出離火漉去滓攪轉令冷而下。餘葉末一味攪轉又以順次下之。每下攪轉止以貯器中

青龍膏又名琥珀膏 外科撮要

〔欄外上〕 微寒

〔二五丁裏〕

主治傳癰疽疔瘡下疳諸膿腐。諸瘡腫速去壞肉強吸膿汁無不有効

麻油一合七十七錢或百錢 蜜蠟七錢五ト 松液七錢 酢七錢 金密陀僧四錢五ト末 胆礬二錢五ト末 枯礬末二錢五ト 石榴皮末二錢 沒藥末六錢五ト 乳香三錢末 琥珀五錢末 銅綠五錢

右油蠟松酢入鍋慢火以煎之攪轉待黃沫出離火。漉去滓而攪轉令涼末藥八味以順次下之每一味攪轉止

○木香水銀膏 法典

疥癬其他肌膚ノ諸患ニ塗リ之ヲ治スル名声アリ 黃蠟十六錢

胆八油三十二匁 古家猪脂塩蔵者六十四匁 土木香根酢二漬
シ和カニ煮節ヲ用イ擦リ涙セル者九十六匁

〔二六丁表〕
海塩八匁

右五味先蠟油ヲ煮溶シ次ノ三味ヲ混和平均シ又水銀十六匁ニ
篤麝香等分ヲ以テ磨殺シ銀点見ルヘカラザルニ至リ之ヲ調シ
軟膏トス又一方水銀無シ

鐵桶膏

治發背將潰己潰時根脚走散不收束者

〔欄外上〕 正宗

銅緑五匁 明礬四匁 胆礬三匁 五倍子微炒一兩 白芨五匁
輕粉 麝金各二匁 麝香三ト

右為末用陳米醋二碗杓内漫火熬至一小杯候起金色黃泡。為度
待温用上藥一匁攪入膏内毎用頓温用新筆塗膏瘡根上以綿紙蓋
其瘡根

〔二六丁裏〕

鼻^傳腫久不消者七日変色十五日而瘡 樟脳耐二匁一作八匁 番
礪三ト一作五ト 二味和均先以針微撥動患所乃將業傳之

又方 薔薇露十匁 礬灰 粉錫各一匁 鷄子黃一顆 右合傳
腫上

茴香滴方

【注釈】

〔二丁表〕

○千金三黃湯 …… 「千金」を冠するのは、『千金方』から引用

したことを意味する。通行の『千金方』は北宋の校正医書局
が校訂・初刊した版本に由来する。

○東垣清陽湯 …… 中国の金元時代に活躍した四大家の一人で
ある李東垣（一一八〇～一二五一）による湯薬。彼らの考え
が日本の後世派の漢方医に大きな影響を与えた。

○保元湯 …… 処方は、中国明代の魏直によって書かれたとさ
れる『博愛心鑑』巻上に掲載。参耆湯（『痘疹活幼至宝』巻
終）という異名がある。

○烏薬順気散 …… 処方是中国で一五一年に発行された『太
平惠民和剂局方』に初めて現れたようだ。

○頤 …… 顎。

〔二丁裏〕
○回首散 …… 処方は『古今圖書集成・医部全録』（卷一六七）
に掲載してある。

○必読十味對散 …… 「必読」は中国明代末期の医家李中梓が編
著した『医宗必読』を示している。『内経』に基いて、多様な
薬の用方、本草、内経、傷寒など約六五門に分けたもので、
日本でも刊刻された。十味對散は、一二世紀後半に中国の王
碩が著した『易簡方』や『古今方彙』など多くの文典に見ら
れる散薬である。

○古防風湯 …… 中国の『万病回春』に収載されている清上防
風湯のことか。

○寢洩 …… 悩みとどこおる。

○三生飲 …… 多くの文典に掲載。

○壅^よ … ふさぐ。ふせぐ。

〔三丁表〕

○三化湯 … 処方は、中国元代医師朱震亨が撰した『活法機要』や甲賀通元訂『古今方彙』などに収載。

○防風通聖散 … 中国の南宋時代に劉河間が著した『宣明論』

(二一七二年刊)に収載されている散薬である。

○癩疹 … 疹の一種。中国の清代乾隆年間に吳謙が政府の命

で編輯した『医宗金鑑』はこう説明している「癩疹者、乃心

火灼於肺金、又兼外受風濕而成也。發必多痒、色則紅赤、癩

癩於皮膚之中、故名曰癩疹」(痘疹心法要訣■癩疹、注)。

○資寿解語湯 … 中国明代に方賢が著した『奇效良方』に収

載。

○復正湯 … 明代龔廷賢撰『寿世保元』や『古今方彙』に収

載。

○緑礬 … 硫酸塩鉱物、melanterite。

〔三丁裏〕

○王肯堂 … 明代の医家(一五四九〜一六一三)、字は宇泰、

号は損庵、また念西居士とも号した。金壇出身。膨大な古典

を紐解きながら、イエズス会士マッテオ・リッチ司祭

(Matteo Ricci, 1552-1610) から西洋外科術を学び、東西両医

学の折衷で名を挙げた。

○大腹皮 … ビンロウヤシ (Areca catechu L.) の果実の果皮

を乾燥したもの。別名檳榔皮。

○腿 … 股。

〔四丁表〕

○証治準繩 … 『証治準繩』万曆三〇(一六〇二)年自序、中

国、明代に王肯堂によって編纂された名作。『証治準繩』は六

つの著作から構成されている(『雑病証治準繩』八卷、『雑病

証治類方』八卷、『傷寒証治準繩』八卷、『瘍科証治準繩』八

卷、『女科病証治準繩』六卷、『幼科証治準繩』九卷)。玄水が

利用したのは、このうちの『傷寒証治準繩』だと思われる。

○衄血 … 鼻血。

〔四丁裏〕

○小柴胡湯 … 処方は『傷寒論』及び『金匱要略』に由来。

○万安湯 … 処方の背景は未定。

〔五丁表〕

○大小承気湯 … 処方は『傷寒論』に由来。

○薔薇斤木貴甘 … 処方の出典は未定。

○黄連解毒湯 … 処方、中国唐時代に王燾が著した『外台

秘要方』に収載されている。

〔五丁裏〕

○犀角湯 … 処方、中国唐時代の官吏・王燾が編纂した

『外台秘要方』(七五二年完成)に収載されている。

○竹茹温膽湯 … 中国明時代の龔廷賢が万曆四三(一六一五)

年に発表した『寿世保元』に収載。

〔六丁表〕

○赤水医案 … 明代の医師孫一奎(一五二二〜一六一九)の

著書『赤水玄珠』にある医案。

○柴葛解肌湯 …… 処方は、陶節菴著『傷寒六書』（卷三）に収載されている。

〔六丁裏〕

○理中安虻湯 …… 浅田宗伯（一八一五〜一八九四）の『勿誤藥室方函口訣』に収録してあるが、処方の出典は未定。

○虻 …… 虻虫、はらのむし。

○外陽発表湯 …… 処方の出典は未定。

〔七丁表〕

○疎邪實表湯 …… 処方は、『傷寒六書』や『古今方彙』に収録。

○麻木 …… しびれること。

〔八丁表〕

○半夏桂甘湯 …… 処方は、朝鮮第一の医書『東医宝鑑』（二六二三年刊）に収載。

○九味羌活湯 …… 処方は、『東医宝鑑』に収載されている。

○玄珠 …… 孫一奎の『赤水玄珠』。

〔九丁表〕

○回斯篤児 …… ドイツ人外科医ハイステル (Lorenz Heister, 1683-1758)。

○エッセンチャ アフシンチ ゴムホシタ …… (ラテン語) Essentia Absinthii Composita。

〔九丁裏〕

○「エッセンチャ」アレシハルマカ …… (ラテン語) Essentia Alexipharmaca。

○宝函 …… 伍乙志著、橋本宗吉訳『西洋医事集成宝函』（大阪、文政二年刊）のこと。

○エリキシル プロプリータチス パラセルシ …… (ラテン語)

Elixir proprietatis Paracelsi。エリキシル (Elixir) は老化や腐敗を阻止する薬である。このエリキシル剤は、ルネサンス初期の著名な医師・錬金術師パラケルスス (Paracelsus, 1493-1541) が考案したものである。

○エリキシル アンチヘブル ミカエリス …… (ラテン語)

Elixir Antifebrile Michaelis。ミカエリスはドイツ・ライプツィヒ大学の医療化学教授ヨーハン・ミハエリス (Johann Michaelis, 1606-1667)。

〔一〇丁表〕

○エリキシル ヒットリヨリ メインシクチ …… (ラテン語) Elixir Vitrioli Mynsichti。ドイツ人薬剤師フォン・ミンシヒト (Adrian von Mynsicht, 1603-1638) が開発したもの。

○ミキステアラ シムプレキス …… (ラテン語) Mixtura Simplicis。

〔一〇丁裏〕

○スピリト テリアチル カムボラト ヤンドロム …… (ラテン語) Spiritus Theriacalis Camphoratus Androm [achi]。

○チンクチュラ アンチモニ …… (ラテン語) Tinctura Antimonii。別名で Tinctura metallorum (金属のチンキの意)。

チンキは或る薬品をアルコールに溶かした液体である。
○チンクチュラ タルタリ …… (ラテン語) Tinctura Tartari。

【二丁表】

○タルタリユス ヒツトリ ヲラチユス … (ラテン語)
Tartarus Vitriolatus 硫酸カリウム。

【二丁裏】

○アルヲニコム チユフリカチユム … 未定。

○ニツトリスム アンチモニコム … (ラテン語) Nitrum
Antimoniatum。

○サルヂヂスケハ セイルヒウス … (ラテン語) Sal
digestivus Sylvii。ライデン大学教授シルビウス (Franciscus
Sylvius, 1614-1672) の消化剤。

○瘧 … おごり。三日熱など、間欠的に発熱し、震えを發す
る病氣。

【二丁表】

○タルタリコム エメチキユム … (ラテン語) Tartarum
Emeticum、ニアンチモン(Ⅲ)酸ニカリウム三水和物。

○コロキエス メクルロリコム … (ラテン語) Crocus
Metallorum。

○ヘバル アンチモニ … (ラテン語) Hepar Antimoni。

○アンチモニコム … (ラテン語) Antimonium、アンチモン。

○焰硝 … 煙硝。硝酸カリウム、硝石。

【二丁裏】

○チヒニコム エメチコム … (ラテン語) Vinum Emeticum。

○アリワヘネチクワ リユランチ … 未定。

○イヘフコアンナレ … 未定。

○「ヲクリカンキリ … (ラテン語) Oculi Cancri、カニの目の
意。ザリガニ類の胃石。

○トルシス … (ラテン語) dulcis。じじじは、Mercurius
dulcisのことである。

【二丁裏】

○緑礬 … 硫酸第一鉄の七水和物。

○ラフメント … (ポルトガル語) Lavamento、洗薬の意。ラ
テン語名は Lavamentum。

○ハルサモ … (ポルトガル語) balsamo、軟薬の意。

【二丁裏】

○カトルシス … 未定。

○爛目 … ただれめ。目のふちが赤くただれる病氣。

○ハルサモコツハイ、バルサモコツパイハ … (ラテン語)
Balsamum copaivae。植物名は Copaifera officinalis L。

○灰鹼 … 石鹼石 (soapstone)。『本草綱目』(土部)にも収載。

【二丁表】

○速費必児洗方 … 伍乙志著、橋本宗吉訳『西洋医事集成宝
函』(文政二年刊)によれば、ソツピルは「腐蝕白靈砂」の意
である。

○礬石 … 硫酸アルミニウム・カリウム。明礬。

○糜爛 … ただれ。

○「レ」シビタート … (ラテン語) ↓オランダ語)
Precipitat 沈殿物。じじじは、Mercurial Precipitat じじじ。

○繇 … 綿。

○蕪 … 浸す。

【一四丁裏】

○蘆薈 … アロエ (Aloe) を「ロエ」と読んでこの漢字を当てたもの。

○屢 … しばしば。

【一六丁表】

○カンフラスト … (ラテン語) *Camphoratum*、樟腦。

○ペレフスシトレイナ … 未定。

○エスカル … 未定。

○紫金散 … 『聖恵』、『普濟方』、『医方類聚』など、数々の処方がり。

【一七丁表】

○枯礬 … 焼き明礬のこと。

○白芷 … セリ科 *Umbelliferae* のヨロイグサ (*Angelica dahurica* BENTHAM et Hooker)。その根は漢方薬として用いられる。

○蝮蛇 … まむし。

【一七丁裏】

○鉛華 … 白粉の異名。鉛白。

○楊梅皮 … ヤマモモの樹皮。

【一八丁表】

○丹礬精 … 硫酸第二銅。

○小兒走馬牙疳 … 走馬の牙疳。熱に伴って発生する壊死性歯齦炎。李時珍『本草綱目』(人部五)は、こう記している。

「走馬牙疳。以小便盆内白屑取下、入瓷瓶内、塩泥固濟、煨紅、研末、入麝香少許、貼之。此汴梁李提領方也。又方。用婦水人尿桶中白垢、火煨一錢、銅綠三分、麝香一分、和勻、貼之。尤有神効。」

【一九丁表】

○垂挂児華濕系 … (ラテン語) *Aqua Calcis*、白灰水。

○クルウン … (オランダ語) *groen water*、緑水の意。

○ケルウン … (オランダ語) *groen water*、緑水の意。

○ケルウン … (オランダ語) *groen water*、緑水の意。

【二十丁表】

○テンキチユル … (オランダ語) *Tinktuur*

Kampfer。樟腦チンキの意。ラテン語名は *Tinctura*

Camphorae。

○テキンキチュラ … (ラテン語) *Tinctura Myrrhae*、

没薬チンキの意。

○テンキテール … (ラテン語) *Tinctura*

Succini、琥珀チンキの意。

【二十丁裏】

○エリキシルフロフリタチス … (ラテン語) *Elixir*

Proprietatis [Paracelsi]。

○サフラン … *Safran*、鬱金。

【二一丁表】

○コラルアルド … 未定。

○密陀僧 … 一酸化鉛 *Litharge*。名称はペルシヤ語の

「*mildassa*」が訛って伝えられたとされている。

【二二丁裏】

○アネイチ フロンペイン … (ラテン語) Acetum Plumbi°

【二二丁表】

○イングエント バジリコム … (ラテン語) Unguentum Basilicum°

○法典ノハジリ名君王膏ト … (ラテン語) basilicus´「王様
G」。

○的列並低捺 … (ラテン語) Terebintina´テレピン油°

○番瀝青 … ばんれきせい、蛮人の瀝青(＝ピッチ)。この
は、薬用の pix (オランダ語 pek) のことを指している°。

○ケレイン 猶云下品 バジリ … (オランダ語) cleijn Basil´「小やうざん
シリコム」(Basilicum) の意味°。

○エンプラスト ハジリコム … (ラテン語) Emplastrum
Basilicum°

【二二丁裏】

○インクエント エケビシャコム … (ラテン語) Unguentum
Aegyptiacum°

○ヒシム … Aegypti のこと°。

○銅緑 … 銅青、緑青。銅器の表面に生じる錆°。

○インクエント ヒュスコム … (ラテン語) Unguentum
Fuscum°

○エンプラスト ミイニイ … (ラテン語) Emplastrum
Minii°

【二三丁表】

○エンプラスト デヤハルマ … (ラテン語) Emplastrum

Diapalma°

【二三丁裏】

○イングエント アルホム カンプラスト … (ラテン語)
Unguentum Camphoratum°

○官粉 … 鉛白のこと°。
【二四丁表】

○エンプラスト テヤホンホリコム … (ラテン語)
Emplastrum Diapompolicum°

○竜葵油 … 竜葵はイヌホウズキともいふ (Solanum nigrum,
L.)°。

○エンプラスト コミイニイ … (ラテン語) Emplastrum
Cumini°

【二四丁裏】

○エンプラスト ステキテコン … (ラテン語) Emplastrum
Sticticum°

○劉寄奴油 … 劉寄奴はキク科の多年草 (Artemisia anomala,
S. MOORE)°。

【二五丁表】

○外科撮要 … 上州の青木緞副かんだいが明和五(一七六八)年に撰
した『外科撮要』°。

【二六丁表】

○正宗 … 『外科正宗』のこと。中国明代の医家陳実功ちんじつこう
(一五五五～一六三六)が万曆四五(一六一七)年に発表した

名著。卷一は疾病の病因・診断・治療を取り上げ、卷二、三及び四は数々の図版を踏まえながら外科疾病の症例と治療法を描写している。

「外療集験方 五」(二丁～二六丁) の特徴について

ミヒエル・ヴォルフガング

【研究ノート】

村上医家の第七代家督玄水¹(諱は卓。一七八一～一八四三)による「外療集験方」は、残念ながら部分的にしか残っていない²。現存するのは、第三巻及び第五巻のみである。この二冊(縦二二・五糎×横一五・七糎)は表紙も紙も同様なものなので、執筆作業はほぼ同時期に行われたと推測できる。第五巻の内容は以下の通りである。

(一丁)

雑記

(二丁～八丁)

一連の漢方系の散薬と湯薬

(九丁～一二丁)

蘭方系の薬方(片仮名表記)

(一三丁～一八丁)

主に蘭方系の薬方(漢字名)

(一九丁～二四丁)

主に蘭方系の薬方(片仮名表記)

(二五丁～二六丁)

主に蘭方系の薬方(漢字名)

(二七丁～三二丁)

「カスハル書口訣」。カスパル・

シャムベルゲル(Caspar Schamberger, 1623-1706³)に

遡る腫物の診断法や一連の膏薬

(三三丁～三六丁)

「南蛮流秘密金瘡之治術」という題

目の下に「金龍膏」、「白和膏」、「ラフメント」など一連の薬方

(三七丁～四二丁)

蘭方系の膏薬方(片仮名表記)

(四三丁～四八丁)

「吉雄釋家秘録」として「イングエ

ント バシリコム」、「イングエント カンフラスト」など阿蘭陀通詞吉雄家に伝わった一連の膏薬方(片仮名表記)

(裏表紙見返し)

西洋の医療箱のスケッチ⁴

この写本がいつ成立したかは明らかではない。第三巻に含まれている「琴玉之大事」の最後に「右文政^{庚辰}年書之」と記されているので、第五巻は、一八二〇年代に執筆されたと思われる。玄水は文政六(一八二三)年頃長崎を訪れたとされており、この巻が長崎で入手した情報を反映している可能性もある。

第五巻の内容は多岐にわたっている。いわゆる南蛮流や初期紅毛流のような一七世紀に遡る古い文書とともに一八世紀蘭学の先駆者吉雄耕牛(一七二四～一八〇〇)など江戸後期の資料が

混在しており、漢方系のものも確認できる。巻頭に列記されている湯薬と散薬の大半は、中国医学に由来している。「千金三黄湯」(『千金方』)、「必読十味剉散」(『医宗必読』)、「傷寒論」、『本草綱目』など、ところどころ処方底本が示されており、「東垣清陽湯」(李東垣)、「王肯堂」など、その処方を考案した人物名を記している場合もある。

興味深いことに、それらの処方には、数々の一字薬名が見られる⁵。遠藤次郎と中村輝子によれば、このような名称は、室町時代の医書に初めて現れたが、一般に流布したのは、それを採用した『衆方規矩』が広まった江戸時代であった。字のほとんどが生薬の正名または異名に由来しているので、一字薬名は簡便化のためであり、隠し字の意味合いはほとんどない、と遠藤・中村は指摘している。玄水が出典を示している「資寿解語湯」(明・方賢『奇效良方』より)も、そのことが確認できる一例である。原文での功能主治(「治心脾中風、舌強不語、半身不遂」と玄水の記述(「治風中、心脾舌強不語半身不遂」)はほぼ一致しており、処方の一字薬名も明白である。

「外療集験方」『奇效良方』

走	附子
芸	防風
定	天麻
酸	酸棗仁
宦	官桂

羚羊 羚羊角
活 羌活
甘 甘草

村上家には、同様な一字薬名が見られる薬籠がある。その位置づけについて遠藤・中村・ミヒエルは、以下のように述べている。

「村上家の薬箱には、『傷寒論』・『金匱要略』の範囲を超えた多くの種類の生薬が収められていた。別稿で報告する各薬袋に記された生薬の一字薬名の検討結果からも明らかのように、この薬箱は、基本的には、『衆方規矩』に代表される後世派の系統に位置するものである。その中で、蘭方薬の存在も注目されたが、その種類は限定されていて、十分とは言えない。蘭方を導入し始めた時期のものではないかと推定している。薬袋に記されたアルファベットもこれを示唆している」⁷

玄水の「集験方」は、まさに同様な状況下で生まれた写本であり、この薬箱との関連性を思わせる内容である。

「外療集験方 五」の九丁には、一八世紀外科学の巨匠ローレンツ・ハイステル (Lorenz Heister, 1683-1758) の名(「回斯篤児」)がある。ここから二六丁にいたるまで列記されている処方

は、ハイステルの著作にはみられないが、西洋医学を反映している。片仮名表記の薬名のほとんどはラテン語のものであるが、すでに一七世紀に定着した「イングメント」(unguento) 軟薬の意)と「エンプリラスト」(emprasto) 膏薬の意) はポルトガル語の発音を示している。処方のみくのみくは「ペラセルス」(Paracelsus, 1493-1541)、『アドリアンム」(Adrian von Mynsicht, 1603-1638)、『ニコエリス」(Johann Jakob Michaelis, 1606-1667)、『セヘルヒウス」(Franciscus Sylvius, 1614-1672) など、医療化学者として知られている人物名も見られる。また、三四丁の裏側に記されたローマ字表記のラテン語による専門用語 (antiacida, antosthmatica [= Antasthmatica], anthelminthica, antimetrica, antepileptica, antihypnotica, anthysterica, antihypochondriaca, antiarthritica) は、玄水が専門性の高い参考資料を閲覧したことを裏付けている(図一)。解毒剤「アレシハルマカ」の項目に見られる「宝函」は、その文献名を示している。日本で「宝函」と呼ばれていたのは、ドイツ・ケーニヒスベルク大学教授ヨハン・ヤーコプ・ヴォイト(Johann Jacob Woyt, 1671-1709) が著したいわゆる『医薬宝函』である。正確な書誌は次の通り。

Gazophylacium medico-physicum, oder, Schatz-Kammer medicinisch- und natürlicher Dinge: in welcher alle medicinische Kunst-Wörter, inn- und äusserliche Kranckheiten nebst derselben Genes-

Mitteln, alle Mineralien, Metalle, Erztze, Erden, zur Medicin gehörige frembde und einheimische Thiere, Kräuter, Blumen, Saamen, Säfte, Oele, Hartze &c.; alle rare Specereyen und Materialien, und viel curiöse zur Mechanic gehörige Kunst-Griffe, in einer richtigen lateinischen Alphabet-Ordnung auff das deutlichste erkläret, vorgestellt und mit einem nöthigen Register versehen werden. Leipzig. In Verlegung Fr. Lanckschens sel. Erben, 1709. 「すべてこの医学の術語、内科的、外科的煩い並びにその治療薬、すべての鉱物、金属、鉱石、土類及び医療用の異国と地元の動物、薬草、花、種子、液、油脂など、すべての香辛料と物質並びに多くの珍しい治療術の技について正しいアルファベット順で明白に説明、紹介する索引つきの医学及び自然物の宝蔵」

ラテン語のできないギルド出身の外科医や薬剤師のために編纂されたこの本は、病名、生薬名、薬品名など医薬学の学術用語に関する明白で分かりやすい解説でたちまち有名になり、著者の死後も版を重ねながらさらに拡充されていった。一六四一年、ドイツ人医師シュメレンチン (Johannes Christophorus Schmallentin) が第一〇版を基に作成したオランダ語版が発表された。

Gazophylacium Medico-Physicum of Schat-Kamer der
Genees- en Natuur-Kundige Zaakken [...] Nu na den
Tienden Druk vertaalt, vermeerdert en met Aammer-
kingen verrijkt door Joann. Christ. Schmellentin, Med.
Doctort' Amsterdam. Amsterdam, Jansoons van
Waesberge, Hendrik Vieroot, Abraham en Isaak Graal,
1741.

このオランダ語版は、同世紀後半に日本にも上陸し、「シカツ
トカアメル」(Schat-Kamer = 宝蔵)、「ウフイトシカツトカーム
ルブーク」(Woyt Schat-Kamer boek)、「失芻貲的」(カシムルボツ
孤) (Schat-Kamer boek)、「窩葉都之書」(ツライエツ
て)、蘭学者の書物で取り上げられていた¹⁰⁰。和訳書として、と
りわけ大坂蘭学の基礎を築いた橋本宗吉(一七六三〜一八三六)
が一八一九年に刊行した『西洋医事集成宝函』は注目に値する。

玉函渥斯・雅谷歩・伍乙志著、橋本宗吉訳 『西洋醫
事集成寶函』大坂、河内屋太助、文政二年。

「コロキエス メクルロリコム (Crocus Metallorum)」、「バ
ル アンチモニ (Hepar Antimoni)」、「レ」シビタート
(Precipiat) など「外療集驗方 五」のいくつかの薬品名とそ
の説明は『西洋医事集成寶函』の記述に類似しているが(図二
参照)、後者にはローマ字表記の用語が一切含まれていないの

で、玄水は、ヴォイトに遡る別の資料を利用したことになる。

「外療集驗方 五」の二二丁から一八丁にかけて、処方名は漢
字で記されている。白礬、銅緑、銀朱、胆礬、胆礬燒、枯礬、
緑礬、硝石、食塩、水銀、朱砂、寒水石、石膏、霜胆礬、赤石
脂、礬灰、黄丹、壩眼石、猛汞、汞、丹礬、甘汞、竜胆など、
調合される数々の鉱物や、ヘレシビタート (Precipiat)、フク
リカンキリ (Oculi Cancrī)、トルシス (dulcis)、ハルサモ
(Balsamo)、バルサモコッパイハ (Balsamum copaivae) のちう
な名称が示すように、この処方のはほとんどは西洋医学に由来し
ている。その中には、梅毒の治療に用いられた水銀治療の例も
ある¹⁰¹。

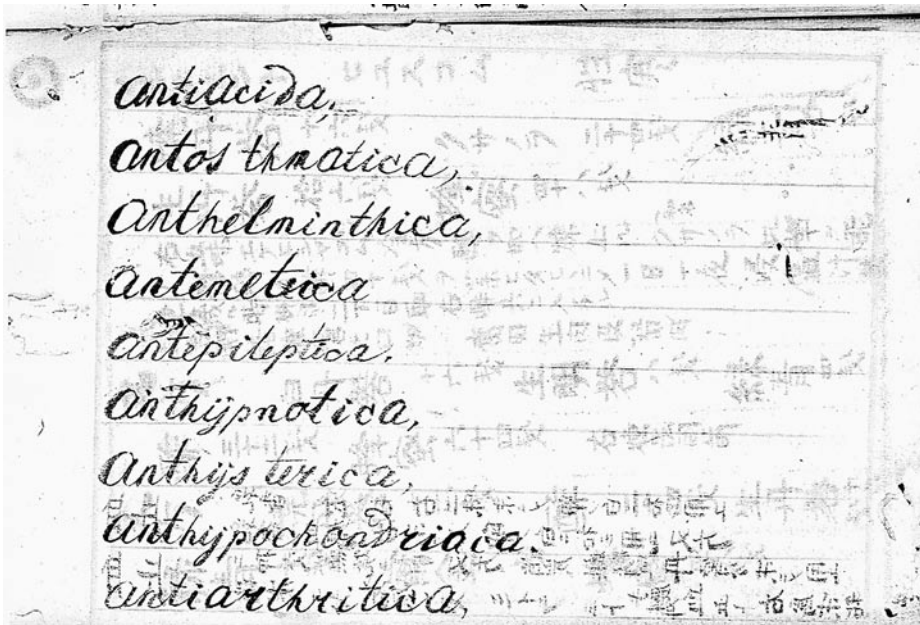
「猛汞 汞 食塩十一錢 消石九錢 丹礬二十錢 甘
汞 猛汞四十八錢 汞三十二錢 屠 輕粉 治徽瘡瘡
傳ナリ」(一二三丁)

「外療集驗方 五」の一九丁から二四丁にかけて、再び片仮名
表記の蘭方系薬方が列記されているが、「水液部」、「酒釀部」、
「醋煮部」及び「伝貼部」という分類は、薬品名をアルファベッ
ト順で示したヴォイトの「医薬宝函」ではなく、薬品を分類す
る薬局方 (Pharmacopoeia) の参照を示唆している。三ヶ所に見
られる「法典」が指す書物は未定である。

二五丁及び二六丁の薬方は漢字で書かれている。「九一膏」及

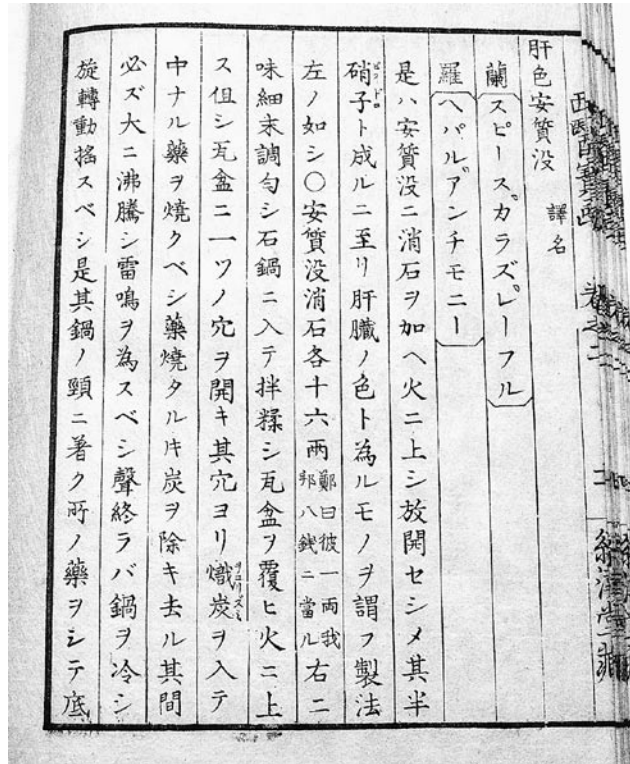
び「青竜膏又名琥珀膏」は、上州の青木絢嗣あきたが明和五（一七六八）年に撰した『外科撮要』によるものであり、「鉄桶膏」は中国明代の医家陳実功ちんじつこう（一五五五〜一六三六）が万曆四五（一六一七）年に発表した『外科正宗』から取り入れられている。また、「木香水銀膏」の出典として、上述の「法典」が挙げられている。

あらゆる文献を利用した玄水の旺盛な知識欲は印象的である。彼は村上家に現存する資料以外の書物を利用できなかったに違いない。また、ところどころに見られる彼が独自に考案した処方や治療法は、柔軟な知性と経験を重んずる姿勢を示すものである。「外療集験方」の大半が行方不明になっていることは、実に残念なことである。



図一 「外療集験方 五」三四丁の裏（村上医家史料館蔵）。

図一 ヘパール アンチモニ (Hepar Antimoni) に関する説明。伍乙志著、橋本宗吉訳『西洋医事集成宝函』より（岡山大学附属図書館資源生物科学研究所分館蔵）。



- 1 ミヒエル・ヴォルフガング「村上玄水の略歴」『村上玄水資料Ⅰ』村上史家史料館資料叢書Ⅰ、中津市教育委員会、中津市、平成一五（二〇〇三）年、一～六頁。
- 2 ミヒエル・ヴォルフガング「新旧西洋外科術が混在する地方蘭学者の史料 村上玄水写の「カスハル書口訣」を中心に」。『村上玄水資料（二）』（中津市歴史民俗資料館 分館村上史家史料館資料叢書、中津市、二〇〇四年、七一～八八頁）。
- 3 ミヒエル・ヴォルフガング「カスバル・シャムベルゲルとカスバル流外科（Ⅱ）」『日本医史学雑誌』第四二巻第四号（一九九六年）、二一～四五頁。ミヒエル・ヴォルフガング「カスバル・シャムベルゲルとカスバル流外科（Ⅰ）」『日本医史学雑誌』第四二巻第三号（一九九六年）、四一～六五頁。
- 4 ミヒエル・ヴォルフガング「新旧西洋外科術が混在する地方蘭学者の史料 村上玄水写の「カスハル書口訣」を中心に」。七二頁より。
- 5 遠藤次郎、中村輝子「村上家薬箱の一字薬名の検討」。『中津市歴史民俗資料館 分館村上史家史料館蔵の薬箱及びランビキについて』。中津市歴史民俗資料館 分館村上史家史料館資料叢書 IV、中津市、二〇〇五年、一～七九頁。
- 6 遠藤次郎、中村輝子「村上家薬箱の一字薬名の検討」。中津市歴史民俗資料館 分館村上史家史料館資料叢書Ⅳ、六二頁。
- 7 遠藤次郎、中村輝子、ミヒエル・ヴォルフガング「中津市歴史民俗資料館 分館村上史家史料館蔵の薬箱について」。中津市歴史民俗資料館 分館村上史家史料館資料叢書Ⅳ、五四頁。
- 8 ヴォイトの略歴については下記の人名事典を参照。August Hirsch: Biographisches Lexikon der hervorragenden Ärzte aller Zeiten und Völker. Wien/Leipzig, Urban & Schwarzenberg, 1884-1888. Vol. V, p. 999.
- 9 記者シュメレンチンに関する情報はないが、オランダ東インド会社の喜望峰拠点の史料には、ドイツStaden出身の医学博士 Joannes Christophorus Schnellentin が、一七四一年にTolsduyn号の喜望峰に到着したことが記録されている。Arnold E. Leutink: Harde Heelmeesters -

Zeelieden en hun dokters in de 18de eeuw. (1991), pag. 221-224 参照。
興味深いことに、彼は同年にメノー派指導者 Hans de Ries の宗教書を
ドイツ語に訳し、アムステルダムで『Ein Kurz Bekännusz der
fünämsten Hauptstückten des Christlichen Glaubens』として発表した。
た。

10

日本における受容については、松田清著『洋学の書誌的研究』京都、臨
川書店、一九九八年、六一二〜六一四頁参照。

11

享保年間頃に中国から水銀の利用が日本に伝わったが、その加減が難し
かったので、普及しなかった。出島蘭館医 C. P. ツェンペリーが安
永四年（一七七五）に紹介したファン・スウィーテン水 (Gerhard van
Swieten, 1700 - 1772) で、水銀による治療法が本格化した。詳細に
ついては、以下の文献参照。高橋文「C. P. ツェンペリーと日本
（第四報）水銀水療法について」『薬史学雑誌』第二九卷第一号
（一九九四年）、四七〜五四頁。高橋文「C. P. ツェンペリーと日本
（第五報）続水銀水療法について」『薬史学雑誌』第二九卷第一号
（一九九四年）、五五〜六三頁。

【付録】 村上家薬箱の薬袋に記された生薬の一字薬名（遠藤次郎、中村輝子「村上家薬箱の一字薬名の検討」。中津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料館資料叢書Ⅳ、六五～六八頁より（抜粋）。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	B	C	D	?	黄芩	茯苓	唐木香?	猪苓	沢瀉	桔梗	海人草	紫蘇葉
陳皮	薄荷	白芷	半夏	黄耆	黄芩	茯苓	唐木香	猪苓	沢瀉	桔梗	芒硝	紫蘇葉
貴老	甄活	莞	守田	戴椹	黄芩	茯苓	唐木香	猪苓	蒲	房圖	芒硝	水状元

14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37
童	候	餘	淡	精	芹	老	假	芸	凶	溘	愛	齊	軹	婆	洗	棗	枳	謝	有	西	雪	青皮	乾姜
青皮	香附子	芍藥	厚朴	朮	当歸	甘草	荊芥	防風	羌活	知母	麥門冬	葛根	連翹	藿香	檳榔	大棗	枳實	地黄	麻黃	前胡	桑白皮	青皮	乾姜
童皮	永嘉聖脯	候莎	餘容	淡伯	山精	山蘄	桂枝	國老	假蘇	銅芸	羌活	溘	愛韭	雞齊	連軹	兜婁婆香	洗瘴丹	大棗	枳殼	生地黃	卑相	西天蔓	延年卷雪

61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38
来	玫	女	泉	星	苔	籛	茹	塊	查	健活血	殼	花	冬	過	滿	鈞	聯	■	薰	虎	丹	根	武
浮小麦	玫瑰花	菊花	沈香	天南星	依蘭苔	地骨皮	竹茹	土茯苓	山查子		罌粟殼	接骨木花	忍冬	貝母	滿奈	鈞藤鈞	黃連	？	柴胡	大黃	山梔子	栝藎根	アラビアゴム
浮小麦	玫瑰花	菊花	沈香	天南星	依蘭苔	地骨皮	竹茹	土茯苓	山查子		罌粟殼		忍冬	貝母	滿奈	鈞藤鈞	黃連		柴胡	大黃	山梔子		
来	玫瑰花	女節		天南星	イスラント苔	三戸籛	竹茹	土十茯苓	山查子		罌粟殼	接骨木花	忍冬	過草	マンナカラブリナ	鈞藤鈞	黃連		地薰	無聲虎	木丹	栝藎根	
85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62
德	胡	良	瑞	酸	玉	豆	萋	液	削	烏	會	王	延	戌	屠	密	喬	砂		葉	■	黒	翁
杏仁	胡黃連	良姜	天花粉	酸棗仁	？	赤小豆	遠志	滑石	三稜	烏梅	五味子	牡丹皮	延胡索	菝葜	黃柏	木香	丁香	縮砂	烏藥	アルテア葉	？	？	木通
杏仁	胡黃連	良姜	天花粉	酸棗仁			遠志	滑石	三稜	烏梅	五味子	牡丹皮	延胡索	菝葜	黃柏	木香	丁香	縮砂	烏藥			玄參	木通
德兒	胡黃連	良姜	瑞雪	酸棗仁		赤小豆	萋繞	液石	削堅	烏梅	會及	花王	延胡索	菝葜	山屠	蜜香	香嬌	縮砂	樟	アルテア葉		黒參	丁翁

109 硫 108 紫 107 井 106 倉 105 伏 104 · 103 頭 102 扑 101 □₈) 100 倍 99 小 98 周 97 麩 96 游 95 擲 94 紅 93 楸 92 邪 91 角 90 羔 89 蠣 88 嬰 87 芥 86 羸

硫黃 紫苑 阿膠 粳米 伏竜肝 草菓 白頭翁 ? 朴硝 牛膝 土細辛 升麻? 神麩 竜胆 百合 紅花 木瓜 角石 石膏 牡蠣 車前子 栝蓏仁

紫苑 阿膠 粳米 伏竜肝 草菓 烏頭 牛膝 細辛 升麻 神麩 竜胆 百合 紅花 木瓜 白芥子 角石 石膏 牡蠣 桃仁 車前子 栝蓏仁

硫黃 紫苑 東阿井水 陳倉米 伏竜肝 草菓 烏頭 朴硝 百倍 小辛 周麻 神麩 陵游 擲 紅藍花 楸木瓜 白芥子 角石 石羔 牡蠣 嬰鬼 芥苡 果羸

133 辰 132 蘓 131 玄 130 沒 129 乳 128 甲 127 羚 126 茵 125 益 124 慈 123 · 122 微 121 藁 120 蔓 119 蚕 118 子 117 練 116 力 115 印(卵)

辰砂 蘇方木 玄參? 紫諺 乳香 穿山甲 羚羊角 茵陳蒿 益智 ? 蟬退 人參 藁本 蔓荊子 白彊蚕 紫蘇子 川練子 牛蒡子 地榆 纈草根? 水牛角? 山藥 麻子仁 白扁豆

辰砂 蘇方木 五味子 沒藥 乳香 穿山甲 羚羊角 茵陳蒿 益智 蟬退 人參 藁本 蔓荊子 白彊蚕 紫蘇子 川練子 牛蒡子 地榆 纈草根 水牛角 山藥 亞麻仁 白扁豆

辰砂 蘇方木 玄及 沒藥 乳香 穿山甲 羚羊角 茵陳蒿 益智 蟬· 人微 藁本 蔓荊子 白彊蚕 紫蘇子 川棟子 大力子 纈草根 水牛角屑 薯蕷 亞麻仁 白扁豆

1 3 4 龍	竜骨	竜骨	竜骨	1 5 8 ■			
1 3 5 洩	訶子	訶子	洪翁	1 5 9 健			
1 3 6 牙	麦芽	麦芽	麦芽	1 6 0 礪	礪砂		礪砂
1 3 7 杜	杜松子	杜松子	杜松子	1 6 1 □	塩?		
1 3 8 木	接骨木		接骨木	1 6 2 馬	馬錢子		馬錢子
1 3 9 枯	枯礬	枯礬	枯礬	1 6 3 □			
1 4 0 鐵	鉄粉	鉄粉	鉄粉	1 6 4 離	防已	防已	解離
1 4 1 蓼	蓼菓子?	蓼菓	蓼菓	1 6 5 犀	犀角	犀角	犀角
1 4 2 定	天麻	天麻	定風草(薬性論)	1 6 6 京	蓮肉	蓮肉	京藪
1 4 3 惠	恵布里古	恵布里古	恵布里古(三)	1 6 7 薏	薏苡仁	薏苡仁	薏苡仁
1 4 4 茴	大茴香	大茴香	大茴香	1 6 8 消			
1 4 5 塩	芒硝?			1 6 9 熊	熊胆	熊胆	
1 4 6 之	ジギタリス葉?		ジギタリス	1 7 0 驅			
1 4 7 脂	赤石脂	赤石脂	赤石脂	1 7 1 節	竹節人參	菊花	節華
1 4 8 母	益母草	益母草	益母草				
1 4 9 脣	脣麦子	脣麦	脣麦				
1 5 0 諺	没薬	紫諺	紫諺				
1 5 1 棟	苦棟皮	苦棟皮	苦棟皮				
1 5 2 椒	山椒	山椒	山椒				
1 5 3 陸	商陸	商陸	商陸				
1 5 4 呉	呉茱萸	呉茱萸	呉茱萸				
1 5 5 芙	阿片	阿片	阿芙蓉				
1 5 6 面	シナ花	セメンシナ	セメン				
1 5 7 肉	肉豆蔻	肉豆蔻	肉豆蔻				

村上医家史料館 文書資料目録

第一部 医学

平成二年の村上医家史料館開館以来、数多くの人々が膨大な所蔵資料の全容把握に携わってきた。平成一五年以降は、従来の目録に基づいて再調査し、補訂を加え閲覧・検索できる状態に整えることを念頭に置いた。本目録は一般の方々の使用の便宜を図り、資料検索に必要な情報に絞り掲載する。次年度以降は、医学以外の分野の資料目録の掲載も計画中である。より多くの方々から利用いただければ幸甚である。

史料名	カナ表記	写本・版本	著者・製作者・翻訳者等	発行地	出版者・発行者など	発行年・製作年(西暦)	形態	寸法(cm)	番号	注記	著者・制作者・訳者標目
医学啓蒙 御定目、帆足先生評明稱義啓全	イガクケイモクモク	写	帆足万里著「書写者不明」			嘉永3 (1850)	1冊41枚	24.5×17.1	1	後ろに「御定目」と堀内寛編輯とあり	帆足万里 (1778-1852) ＜ホフジ・バンリ＞
医事雑報	イジザツポウ	刊	越原茂唃斯述物部誠一郎記	大阪	大阪府病院	明治9 (1876)	1冊67枚	15.5×11.0	2	「1号・2号・3号・4号」。エルメス又は大阪病院教師。藤井克三印刷。	Christian Jacob Emerin (1842-1888) ＜エルメレン＞ 越原茂唃斯・越原茂唃斯・亞爾茂唃斯＞。 物部誠一郎 ＜モノベ・セイイチロク＞
医艦提綱内象銅版図	イハンテイイコウゾクイハンズ	刊	宇田川藤齋著			文化5 (1808)	1冊17枚	35.0×22.0	3	「村上氏藏書印」印、1-3巻：神経至症候	宇田川藤齋 (1769-1834) ＜ウタカワ・シンサイ＞
医療正始 附医院類案	イリヨウセイイシ	刊	【独】昆斯骨夫著、【蘭】越面宝幾訳、伊藤玄朴重訳	江戸	青麴閣「須原屋伊凡」。巻4、5、6(天保7)、巻16、17、18(天保13)。	天保7 (1836)	1冊	25.7×18.0	4	そもそも24巻。 底本：Ignaz Rudolf Bischoff: Grundsätze der praktischen Heilkunde durch Krankheitsfälle erläutert: zum Gebrauche für Wundärzte. Prag: Haase, 1823-1825. → De leer der koortsen door ziektegeschiedenissen opgehelderd. Uit het Hoogdutch vertaald door C. van Eldik. Nijmegen, Vieweg, 1826.	昆斯骨夫＜＝ドビュコフ【蘭語読みの表記】＝Ignaz Rudolph Bischoff (1784-1850)。 Cornelis van Eldik ＜クヌホキ？＝越面宝幾＞。 伊東玄朴 (1800-1871) ＜イトウカ・ダンボク＞
疫論 後編 腐敗疫部坤(外題)	エキロン	刊	◆◆歌郎突、公私布律備著】新宮涼庭訳述、門人有馬信齋・加藤邦安・大窪章言纂訂			文政7- 天保6 (1824)			5		Christoph Wilhelm Hufeland (1762-1836) ＜フーエラント＝扶歌蘭度＝扶歌蘭士＝◆◆歌郎突＝扶＞。 Georg Wilhelm Christoph Construch (1764-1837) ＜コンストラリエック＝公私布律備＝工私貌爾軀＝＞。 新宮涼庭 (1787-1854) ＜シンノウ・リョウテイ＞。 有馬信齋 ＜アリマ・シンサイ＞。 加藤邦安 ＜カトウ・クニヤス＞。 大窪章言 ＜オオクボ・＞。

遠西医方名物考	エンセイレ ホウメイブ ツコウ	刊	宇田川藤齋 撰、宇田川裕 菴校補	江戸	青藜閣「須 原屋伊八」	文政 8 (1825)	7冊	25.6×17.6	6	文政 6-8、「7-9」、「16-18」、「22 -24」、「25-27」、「28-30」、「31 -33」、「34-35」	宇田川藤齋 (1769-1834) <ウタカワ・シンサイ> 宇田川裕菴 (1798-1846) <ウタカワ・ヨウアン>
遠西医方名物考 補遺	エンセイレ ホウメイブ ツコウサホ イ	刊	宇田川藤齋 撰、宇田川裕 菴校補	津山	風雲堂 蔵 版	天保 5 (1834)	2冊	25.6×17.6	7	「1-3」、「5-6」	
外台秘要方	ガイタイヒ ヨウカタ	刊	山脇東洋「著」		清水敬長 【翻刻】	延享 3 年序 (1746)	22冊	27.0×18.0	8	開披不能、「村上氏藏書印」印、 富士 6-356、(外臺秘要方=漢籍) 重訂唐王燾先生「外臺秘要方」 =「1・2」、「3・4」、「5・6」、「7・8」、 「9・10」、「11・12」、「13-14」、「15・16」、 「17-18」、「19-20」、「21-22」、 「23-24」、「25-26」、「27-28」、 「29-30」、「31」、「32」、「33」、 「35-36」、「37-38」、「39」、「40」	山脇東洋 (1705-1762) <ヤマウキ・トウヨウ>。 清水敬長 <シミズ・ユキオサ?>
解剖訓蒙	カイボウキ ンモウ	刊	[米和堅] 約 懇列第著、松 村矩明・安藤 正胤・村治重 厚・横井信之・ 中泉正訳	大阪	松村九兵 衛	明治 9 (1876)	4冊	22.4×15.1	9	「6」、「9」、「16」、「18」のみ。「醫 手議會處印」印あり	Joseph Leidy (1823-1891) 約懇列第<ヤクヒレダイ=ジョ ゼウ・ライダイ>。 松村矩明 <マツムラ・ノリヲキ>。 安藤正胤 <アンドン・セイイン>。 村治重厚 <ムラジ・ジュウコウ>。 横井信之 <ヨコイ・ノタクキ>。 中泉正 <ナカイズミ・タダシ>
家塾虎狼痢治則	カジュウコ ロリチソク	写	緒方洪庵著、 書写者不明			安政 5 (1858)	1冊3枚	26.8×19.7	10		緒方洪庵 (1810-1863) <オカタ・コウアン>
仮名雲林神笥乾 集	カナウンリ ンシソク ウ	刊	古林昆宜			寛永 12 (1635)	1冊146枚	13.9×20.4	11		古林昆宜「正胤」 (1579-1657) <コリン・シン・ケンギ>

史料名	カナ表記	写本・ 版本	著者・製作者・ 訳語者等	発行地	出版者・発 行者など	発行年・製作 年(西暦)	形 態	寸法 (cm)	番号	注 記	著者・制作者・訳者標目
君達先生夜話外	キンドチセ ンセイヤク					1862	1冊12枚	24.5×17.5	12	2冊合綴、後半は「晚成堂記聞」とあり	
系統記載解剖新 論	ケイトウキ サイカイボ ウシノンロ ン	写	【蘭】 ヲンス フェルト述				1冊181	25.5×18.5	13	長崎精得館」での講義録。原本は、 フレスのウトレヒト陸軍軍医学校 解剖学教科書底本：Handleiding tot de stelselmating beschrijvende ontleedkunde van den mensch door J. A. Fles. 2. druk. Utrecht, 1866. 790 pp. フンスフェルトの在日期间： 1866-1879	Constant George van Mansvelt (1832-1912) <フンスフェルト=清私欲尔 多=満>
外科医法	ゲカイホウ	刊	【独】 ストロス フェル著、【蘭】 シユエルマン 訳		「済衆精舎 蔵」と版 心にあリ、 嶋村屋利 助發兌	慶応 1 (1865)	6冊	22.8×15.2	14	「巻2」：63丁、「巻3」：42丁、「巻5」： 61丁、「巻10」：28丁、「巻13」： 36丁、「巻15」：35丁。 底本：Georg Friedrich Louis Stromejer: Handbuch der Chirurgie. 2 Bände Freiburg im Breisgau, Herder, 1844-1864. Louis. Stromejer: Handboek der Chirurgie. Utrecht: Van der Post Jr., 1858.	George Friedrich Louis Stromejer (1804-1876) <ストロライエル=ストロメー ル=斯厚魯默児=思多樂茂謁 兒>。 Bernardus Franciscus Suernan (1783-1862) <シユエルマン>。 佐藤舜海 [尚中] (1827-1882) <サトウ・シユンカイ>
原生学卷之五・人 身究理卷之六	ゲンセイガ ク	写				明治 9 1876	1冊75枚	23.0×16.0	15	青梓半葉10行の罫紙を使用	
日講記聞原病学 各論	ニッコウキ ブンゲン ビョウガク カクロン	刊	【蘭】 越爾茂 廻斯	大阪	官版、大 阪府病院 蔵版	明治 9 (1876)	1冊39枚、 巻1	22.3×15.0	16	「1」、物部誠一郎序、岡澤貞一郎 例言、校、三瀬諸淵訳。	Christian Jacob Emeritins (1842-1888)。 物部誠一郎 <モノベ・セイイチロウ>。 岡澤貞一郎 <オカザワ・テイイチロウ>。 三瀬諸淵 (1840-1877) <ミセ・モロヲチ>。

原病学論	ゲンビョウガクツウロク	刊	蘭教師亞爾茂 聯斯義、村治重厚・熊谷直温・安藤正胤 紀聞	〔東京府〕	三友舎蔵版	明治7 (1874)	3冊、巻1-2、巻3、巻6-7	22.2×15.0	17	挿図あり	村治重厚 (1846-1916) <ムラジ・ジュウゴウ>。熊谷直温 <クマガイ・チオツツ>。安藤正胤 <アンドンウ・マサタネ> 記聞。Christian Jacob Ermerins (1842-1888)
原病各論	ゲンビョウガクロン	刊	堀内利國口譯、明石退蔵筆記、三好義道校訂		日盛社蔵版	明治8 (1875)	1冊24枚、巻1	22.5×15.3	18	明治7 [1874] 横井信之撰序あり。	堀内利國 <ホリウチ・トシタニ>。明石退蔵 <アカシ・タイゾウ>。三好義道 <ミヨシ・ヨシミチ>。横井信之 <ヨコイ・ノブユキ>。
校正方輿旨	コウセイホウウヨゾゲ	刊	有持桂里述		京撰書房	嘉永6 (1853)	7冊	25.5×18.0	19	「3」、「4」、「7」、「8」、「10」、「11」、「15」別名「小兒方彙」	有持桂里 <アリモチ・ケイリ>
古今幼科摘要	コキンヨウカテキヨウ	刊	下津寿泉選述			宝永6 (1709)	1冊145	13.8×19.5	20		下津寿泉 <シモツ・ジュセン>
虎狼治準	コロリチジュン	刊	緒方洪庵訳		三都書賣	安政4 (1857)	1冊32枚	26.0×18.2	21		緒方洪庵 (1810-1863) <オカタ・コウアン>
虎狼治準	コロリチジュン	写	緒方洪庵訳				1冊28枚	26.8×19.8	22		
濟急方	サイキキウホウ	刊	佐野義行著			寛政1 (1789)	1冊81枚	25.3×18.0	23		佐野義行 (1757-1829) <サノ・リユキ>
三藏舟解	サンゾウベンカイ	刊	岡本一抱子著		帝畿(京都か?)、西村市郎衛門蔵版	元禄13 (1700)	散61丁	21.7×15.7	24	書名は柱題による。巻4 (4-13丁)・5 (1-25丁)・6 (1-17丁) がある	岡本一抱子 (1654-1716) <オカモト・イツボウジ>
詩括〔宗伯の免許認定奥書〕	シカツ	写				寛永17 (1640)	1冊90枚	23.1×20.0	25	医学の教科書と考えられる。「宗伯の免許認定奥書」を後ろに張り付けている。序＝「醫は必ず師に順いて三たび版を折るべし。多聞益き者は是を朋と為せ。先ず大字を讀んで次に註を讀え。しかる後に方の善き惠徳を執れ。」	村上宗伯 (1610/20-1670) <ムラカミ・ソウハク>

史料名	カナ表記	写本・ 版本	著者・製作者・ 翻記者等	発行地	出版者・発 行者など	発行年・製作 年(西暦)	形態	寸法(cm)	番号	注記	著者・制作者・記者 標目
矢以物見杜経験 集	シボルトケン イケンシユ ウ	写	作成者不明、 村上玄水卓写	江戸?			1冊30枚	25.0×17.2	26		Phillip Franz von Siebold (1796-1866) ＜シボルト＝矢以物見杜＞
傷寒方	シヨウカン ホウ	刊	中沢養亭著		出版者不 明	安永6 (1777)	1冊43枚	12.7×18.3	27		中沢養亭 ＜ナカサマ・ヨウテイ＞
傷寒論	シヨウカン ロン	刊	【漢】張仲景 著			享和1 (1801)	1冊117	18.4×12.8	28		張仲景 (150?-219?) ＜Zhang Zhong-jing＝チヨ ウ・チュウカケイ＞
傷寒論新註	シヨウカン ロンシン チュウ		帆足先生指 教、嶋原賀米 佐之・金川難 波直同著、日 出勝田如校			弘化1序 (1844)	6冊	24.5×16.7	29	「村上氏蔵書印」印、(傷寒論＝漢 籍) 帆足万里指教勝田如校正巻1: 49丁、巻2:36丁、巻4:35丁、 巻5:32丁、附録:42丁、巻不明 の1冊49丁は巻3か。また、巻1 の裏表紙に「十一月十六日起筆同 十八日畢」とあり、巻2の裏表紙 に「十一月十九日起筆同廿二日終 之」とあり、巻4の裏表紙に「十一 月廿七日起筆同廿九日終之」とあ り。賀米佐之は賀来千里の長男、 帆足萬里の門人。	帆足万里 (1778-1852) ＜ホラス・バンリ＞。 賀来佐之＜カク・ヌケキ＞。 難波直＜ナンバ・タダシ＞?。 勝田如＜カツタ・ヒトシ＞?。
焦窓雑話	シヨウソウ ザツワ	刊	和田東郭著			文政4 (1821)	5冊	24.5×17.0	30	文政1の序がある。「初編」、「2編」、 「3編」、「4編」、「5編」。	和田東郭【泰紳】 ＜ワダ・トウカク＞
蕉窓方意畔地巻	シヨウソウ ホウイカイ	刊	和田東郭著	大坂	河内屋藤 兵衛		1冊39丁	25.1×17.8	31	「巻下」、哲哲郎校正、清水康之仲 幾録、巻末に紹介新刊あり、散。	和田東郭 ＜ワダ・トウカク＞
人身究理 三・四	ジンシン キユウリ	写	湖西哲見				1冊80枚	22.9×16.0	32	ローセ著、ユーア訳註、緒方章 詠「人身究理學小解」ジンシンキユ ウリガクシヨウカイ	湖西哲見＜コセイ・テツジ＞ Theodor Georg August Roose (1771-1803)。 M. S. Ypma。 緒方洪庵 (1810-1863) ＜オカタ・コウアン＞
斯泰涅爾小児科	スタイナー シヨウニカ	刊	【独】斯泰涅 爾著、長谷川 泰訳		行餘堂蔵 梓	明治8 (1875)	2冊(1巻 55丁、3巻 63丁)	18.4×12.5	33	巻1、巻3。 底本: Johann Steiner: Compendium der Kinderkrankheiten für Studierende und Aerzte. Leipzig: Vogel 1872.	Johann Steiner (1832-1876) ＜スタイナー＝斯泰涅爾＞。 長谷川泰 (1842-1912) ＜ハセガワ・タイ＞

斯篤魯黥兒砲痕論	ストロマイエルホワイロン	刊	[独] 斯篤魯黥兒著、佐藤舜海訳	江戸	嶋村屋利助 発行 津衆精舎 蔵板	慶応1 (1865)	2冊 (1巻 29丁；2 巻63丁)	18.1×12.1	34		George Friedrich Louis Stromeyer (1804-1876) ＜ストロマイエル＝ストロメル＝斯篤魯黥兒＝思多樂蔑謁兒＞。 佐藤舜海 [尚中] (1827-1882) ＜サトウ・シュンカイ＞
西医略論	セイイリキ クロ。Xvi luelun	刊	[英] 合信著、 菅茂村同撰				1冊20枚	25.4×17.0	35		Benjamin Hobson (1816-1873) ＜合信＝He xin＝ホアリン＞。 菅茂村＜カン・モサキ＞
正入回世見宜方 夏巻	セイニユウ カイセイケ ンギホウ	写	古林昆宜				1冊93枚	15.5×21.0	36		古林昆宜 (1579-1657) ＜ワリン・ヤシ・ケンギ＞
青囊秘録	セイノウヒ ロク	写	華岡青洲口述				1冊32枚	23.8×16.9	37		華岡青洲 (1760-1835) ＜ハナオカ・セイシユウ＞
整理発蒙	セイリハツ モウ	刊	[蘭] 李◆ U9088◆撰鳥 村鼎甫訳述	京都	勝村治右 衛門?	慶応2 (1866)	3冊	22.8×15.5	38	「巻二」、「巻五」、「図式」。全14冊	Douwe Lubach (1815-1902) ＜リ・ブツク＝李◆U9088◆＞。 鳥村鼎甫 [鼎鉞仲] (1830-1881) ＜シ・ムラ・チイホ＞。
全体新論図	ゼンタイシン シロソズ	刊					1冊60枚	25.8×17.6	39		
症徴積聚編	センバイセ キシユウヘ ン	写	大橋尚因				1冊26枚	25.6×19.8	40		大橋尚因 (1707) ＜オオハシ・シヨウイン＞
叢桂偶記 巻2	ソウケイギ ウキ	刊	原南陽	水戸	須原屋安 次郎	寛政12 (1800)	1冊34枚	25.1×17.3	41		原南陽 (1752-1820) ＜ハラ・ナンヨウ＞
増補重訂内科撰 要	ゾウホジュ ウナイナイ カセンヨウ	刊	[蘭] 我爾德 児著、宇田川 晋訳		京撰書肆	文政9 (1826)	1冊76枚	25.1×17.4	42		Johannes de Gorter (1689-1762) ＜ヨ・ハネス・ ヂ・コルチル＝我爾德児＞。 宇田川晋 ＜ウダガワ・ゲンズイ＞
続瘍科秘録	ゾクヨウカ ヒロク	刊	緒方洪庵著、 村上田長写	[潮来 天王 町]	自筆亭	安政6 (1859)	5冊	25.8×16.6	43	1、2、3、4、5。本間棗軒 (1804-1872)、華岡流の外科医。	本間棗軒 (1804-1872) ＜ホンマ・ソウケン＞

史料名	カナ表記	写本・刊本	著者・製作者・ 翻訳者等	発行地	出版者・発 行者など	発行年・製作 年(西暦)	形態	寸法(cm)	番号	注 記	著者・制作者・訳者 標目
泰西疫論 (前編卷之下坤)	タイセイエ キロシ	刊	新宮涼庭訳述		発理堂西 軒	文政7 (1824) 跋	1冊30丁	26.3×18.0	44	別称 = 疫論、小石龍跋(1-5) 参照。 巻末に「驅瘴齋著述書目」あり。 Georg Wilhelm Christoph Consruch: Klinisches Taschenbuch für practische Ärzte. Leipzig: Johann Ambrosius Barth, 1816-1817. (1804, 1810) Geneeskundig handboek voor praktische artsen door G.W. Consruch, naar het Hoogdutch door N.C. Meppen. Amsterdam: R.J. Bernrop, 1824-1827. Amsterdam, 1834.	Christoph Wilhelm Hufeland (1762-1836) <フーエラント=>。 Georg Wilhelm Christoph Consruch (1764-1837) <コンストラリユツク>。 新宮涼庭 (1787-1854) <シンライチ・リヨウライ>
中條秘伝方	チュウジョウ ウヒデシホ ウ	写					1冊35枚	14.7×23.1	45		
適々齋丸散方府	テキテキサイ イ	写	緒方洪庵著、 村上田長写			元治1 (1864)	1冊7枚	24.2×17.4	46		緒方洪庵 (1810-1863) <オカタ・ユウアン>。 村上田長 <ムラカミ・デンチヨウ>。
天行古列羅病治 方	テンコクワ シラビヨウ チホウ	写	石川櫻所著、 書写者不明				1冊6枚	26.9×19.7	47		石川櫻所(良信) (1825-1882) <イシカワ・オウシヨ>
天正記	テンシヨウ キ	写	曲直瀬玄朔 著、書写者不 明				1冊50枚	27.0×19.6	48	曲直瀬玄朔は道三の養子	曲直瀬玄朔 (1549-1631) <マナセ・ゲンサク>
頭腫癩毒	トウハハバ イドク	写	村上玄水卓写				1冊42枚	24.8×17.3	49	『和蘭局方』を玄水が写した。	村上玄水卓 <ムラカミ・ゲンスイ・タク>
内外新法	ナイガイシ ンホウ	刊	緒方郁藏訳		獨笑軒 蔵 (板)	慶応2 (1866)	3冊	22.4×15.3	50	1、2、3	緒方郁藏 (1814-1871) <オ カタ・イクゾウ> = 緒方洪庵
内外新法	ナイガイシ ンホウ	写					2冊	26.5×18.1	51	『1〜6上、6下〜7。刊本『内外新法』 とは書名は同じだが内容は違う。	

内科新説	ナイカシンセツ	刊	[英] 合信氏著、菅茂材撰	平安	天香堂	安政 7 (1860)	3冊	25.8×18.2	52	上中下	Benjamin Hobson (1816-1873) ＜ホフソン＝合信 He xin＞。 菅茂材 ＜カン・モサイ＞
内科秘録	ナイカヒロク	刊	本間棗軒	[潮来 天王町]	自準亭	元治 1 (1864)	5冊	25.8×16.6	53	1、2、3、4、5	本間棗軒 (1804-1872) ＜ホン・マ・ソウケン＞
南北経験医方大成鈔卷之一	ナンボクケンイケンイホウタマセイシヨク	写	就安齋玄幽校録				1冊14枚	18.8×12.0	54	漢籍。原著は元時代の孫允賢 ^{クワン}	安齋玄幽 ＜アンザイ・ゲンユク＞
日講記聞	ニッコウキケン	刊	[蘭] 抱燭英氏口授	大阪	大阪医学本校；製本所大阪河内屋吉兵衛	明治己巳 (1867)	5冊	22.6×14.8	55	1、2、4、5、8。(1巻：題言＋目次+27丁；2巻：目次+29丁；4巻：目次+33丁；5巻：目次+21丁；8巻：目次+33丁；)。写本は元治元年に田長が行う。後に「矢剝児柱(ソーボルト) 経験方」が記されている、全表紙に「村上姓」の墨書。	Anthonus Franciscus Bauduin (1822-1885) ＜ボードウイン＝ホウドエイン＝抱独英＝抱道英＝臆度英＝抱＞
配合録 医則括要 完	ハイゴウロクカ	写	新宮涼庭 ^[述] 、書写者不明			文政 6 原著 (1823)	1冊77枚	22.8×16.1	56	「甲子之未夏上次…雲浦遊人村上恒字誌」と墨書あり。	新宮涼庭 (1787-1854) ＜シンクワウ・リョウテイ＞
秘伝小児初生方	ヒデンシヨウカニシヨセイガタ	写	村上養元写			延宝 4 (1676)	1冊43枚	25.6×19.5	57	国書総目録と富士川本目録に同一の書名がある。	村上養元 ＜ムラカミ・ヨウゲン＞
病学通論	ビョウガクツウロン	刊	緒方洪庵		出版者不明	明治 8 (1875)	2冊	27.7×15.9	58	2、3	緒方洪庵 (1810-1863) ＜オガタ・コウアン＞
婦嬰新説	フエイシンセツ	刊	[英] 合信氏、菅茂材撰		平安、天香堂	安政 6 (1859)	2冊	25.8×18.2	59	上下	Benjamin Hobson (1816-1873) ＜ホフソン＝合信 He xin＞。 菅茂材 ＜カン・モサイ＞
扶氏経験遺訓	フシケンイケンイケン	刊	[独] 扶氏著、緒方洪庵訳		適々齋藏	安政 4 (1857)	19冊	26.1×18.2	60	1、6、7、8、10、11、12、12、13、14、13、14、15、17、19、20、21、23、24、25、附録上、附録中、附録下、(1は24.8*17.3。12、13、14は25.2*17.9)。	Christoph Wilhelm Hufeland (1762-1836) ＜フーフェランド＞ フ＝扶歌蘭度＝扶歌蘭士＝ ◆◆敬郎突＝扶>。 緒方洪庵 (1810-1863) ＜オガタ・コウアン＞

史料名	カナ表記	写本・ 版本	著者・製作者・ 翻訳者等	発行地	出版者・発 行者など	発行年・製作 年(西暦)	形態	寸法(cm)	番号	注記	著者・制作者・記者標目
蒲郎加児都解剖 書	ブロンカー ルトカイボ ウシヨ	写	[蘭] 蒲郎加 児都著、藤林 普山訳				1冊90枚	23.4×16.0	61		Steven Blankaart (1650-1704) ＜ブロンカールト＝蒲郎加児 都＝武蘭加児＝武蘭加児都 ＞。 藤林普山 (1781-1836) ＜フシヤシ・フサソ＞。
布斂稀微毒薬劑 篇	ブレシキ バイドクヤ クザイヘン	写	[奥] 布斂稀 著、吉雄権之 助訳述				1冊10枚	25.0×17.2	62	吉雄権之助 = 吉雄耕牛の末子。	Joseph Jacob Ritter von Plenck (1738-1807) ＜ゾ レンキ＝牙骨夫布斂吉＝牙骨 夫・嘩・布斂吉＝布斂稀＝前泄 弗牙谷勃・布連吉＞。 吉雄権之助 (1785-1831) ＜ヨシオ・ヨシノスケ＞
方集	ホウイ	刊	健齋甲賀通元 [編]？			延享 4 (1747)	1冊211枚	13.0×20.0	63	延享 4年望月三英の序がある。更 に「延享 2年甲賀通元の重訂古今 方集序」も有る。	
抱氏日講筆記	ホウシニツ コウヒツキ	写	[蘭] 抱氏述？、 書写者不明			1867	2冊(2巻 58丁、4 巻41丁)	25.0×17.7	64	2、4	Antonius Franciscus Bauduin (1822-1885) ＜ボードウイン＝ホウトエイ＝ 抱狹英＝抱道英＝剛度英＝抱 ＞。
勃氏産科新説卷 之三	ボツシサ ソカシンセ ツ	写	[蘭] 抱氏述？、 書写者不明			1867	1冊103 枚	25.0×18.0	65	表紙無し	Antonius Franciscus Bauduin
満氏口授敷列斯 解剖新論	マンシコウ ジュフレイ シカイボウ シンロン	写	[蘭] 敷列斯 著、[蘭] 満氏＝ マンスフェル ト] 口授、書 写者不明				1冊160 枚	25.9×18.5	66	長崎「精得館」での講義録。底本は、 ユトヒヒト陸軍軍医学校解剖学教 科書 (J. A. Fles 著)。	C. G. van Mansfield (1832-1912) ＜マンスフェルト＝満＞。 J. A. Fles ＜フレイヌ＝敷列斯＞
訳鍵凡例并附言	ヤクケンボ ソレイ	刊	藤村普山著			文化 7 歳 (1810)	1冊27枚	23.9×17.0	67		藤林普山 (1781-1836) ＜フシヤシ・フサソ＞
山脇東門先生随 筆	ヤマウキト ワモノゼン セイ	写	山脇東門 [著]、村上恒 写			元治 1 (1864)	1冊54枚	24.0×16.9	68	「于時京師有乱浪華又不穩」の時 に写した。	山脇東門 (1736-1782) ＜ヤマウキ・トワモノ＞。 村上恒＜ムラカミ・コウ＞。

瘍科秘録	ヨウカヒロク	刊	本間棗軒著	江戸	和泉屋金右衛門	弘化4 (1847)	10巻、10冊	25.8×16.6	69	四之上、「四之下」,「五」,「六之上」,「六之下」,「七」,「八之上」,「八之下」,「九」,「十」	本間棗軒 (1804-1872) <ホソバ・ソウケン>
蘭療方	ランリョウホウ	刊	[蘭] 安米の蘭法著、広川彌沢	[潮来 天王町1]	自筆亭藏?	享和4 (1719)	1冊146丁	21.0×14.6	70		? <アンミドリ=安米の蘭>。 広川彌 <ヒロカワ・カイ>
笠峯千歳魂 第二	リュウホウセンザイコソ	写	新宮颯齋口授			明治	1冊11丁	26.5×20.0	71	1丁「表紙」;2-4丁「傷寒源頭辨」;5丁「風寒辨」;6丁表「傷中辨」;6丁裏-7丁「營衛辨」;8丁「陰陽症辨」;9丁「兩感辨」;10丁-11丁表「桂麻葛草蒸辨」。	新宮涼庭 (1787-1854) <シンザウ・リョウテイ>
療治瑣言前編	リョウジザゲン	刊	松下見林著			天保13 (1842)	2冊	25.5×18.5	72	中、下。颯齋方府のごとか	松下見林 (1637-1703) <ソウジヤウ・ケンリン>
論奥丹証卷之下	ロンオウベンシヨウ	刊				1793	1冊31丁	27.2×19.6	73	表紙なし、破れあり、飛丁あり、儒教に基づく天体論	松下見林 (1637-1703) <ソウジヤウ・ケンリン>
[無題]	[無題]	(刊活字)				明治以降か?	1冊	26.1×16.7	74	人体各部の絵と文	
[無題]	[無題]	写	村上養元写			寛文10 (1670)	1冊48枚	14.5×19.6	75	化滯丸	村上養元 <ムラカミ・ヨウゲン>
医事間見録	イジケンクソロク	写	村上田長 (1839-1906) <ムラカミ・ヂンチヨウ>。			明治11 (1878)	1冊33丁	24.5×17.0	76	筆跡から作者を判断、「心遠居蔵版」罫紙を使用、半葉10行赤罫紙	村上田長 (1839-1906) <ムラカミ・ヂンチヨウ>。
医術第二混人混物 [内題]	イジュツ	写	村上玄水卓			1825	3丁	26.2×15.4	77	筆跡から作者を判断、黒塗り部分は「爲五爲四」、書名は内題による。	村上玄水卓 (1781-1843) <ムラカミ・ヂンスイ>
医要集全只一策	イヨウジュク	写	村上長庵写?			明和4 (1767)	1冊13丁	27.5×20.5	78	尚古堂とあり、『惠徳法』の抜き書き (3~9丁)。	村上長庵 <ムラカミ・チヨウアン>
解臟記序文	カイゾウキ	稿	帆足万里著			文政11 (1828)	1冊2枚	27.0×17.7	79	折本形式の4ページ分	帆足万里 (1778-1852) <ホアシ・バンリ>
解臟記併道原 [E141 稿]	カイゾウキ	稿	村上玄水卓著				1冊15枚	26.5×18.8	80		村上玄水卓 (1781-1843) <ムラカミ・ヂンスイ>

史料名	カナ表記	写本・ 版本	著者・製作者・ 翻記者等	発行地	出版者・発 行者など	発行年・製作 年(西暦)	形態	寸法(cm)	番号	注記	著者・制作者・記者 標目
[無題]		写				1872	1冊9丁+ 罫紙1枚	25.0×16.8	81	解剖ノート。鉛筆書き、版心に「鐘 淵紡績株式会社」とある罫紙一枚 の挟み込みあり、	
[解剖図彩色：肺・ 腸]	カイボウズ サイシキ	稿	片山東籬・佐 久間玉江作				2枚	30.4×20.2	82		片山東籬 <カタヤマ・トウリ>。 佐久間玉江 <サケラ・ギョウコウ>
[解剖図下書き1]	カイボウズ シタカキ	稿	片山東籬作				1枚	26.3×32.2	83		片山東籬 <カタヤマ・トウリ>
[解剖図下書き2]	カイボウズ シタカキ	稿	片山東籬作				1枚	26.7×34.0	84		片山東籬 <カタヤマ・トウリ>
[解剖図下書き3]	カイボウズ シタカキ	稿	片山東籬作				1枚	27.1×37.2	85		片山東籬 <カタヤマ・トウリ>
賀来氏證治	カクシヨ ウシ	写	村上玄水卓写			天保3 壬辰四 月廿日 (1832)	1冊2丁+ 表	27.0×20.0	86	梅毒の話	村上玄水卓 (1781-1843) <ムラカミ・ゲンスイ>
家帯	カソウ	記	〔三代〕村上 玄水著			辛丑年 =寛文1 (1661)、 享保6 (1721)、 天明1 (1781)、 天保12 (741) のいずれ か	1冊20丁	21.0×14.1	87	巻不明、日誌、裏に和歌あり、「安 禎覺」への言及あり。	(三代)村上玄水卓(1781-1843) <ムラカミ・ゲンスイ>
経験日用方全〔題 簽〕	ケイケンニ チヨウホウ	写	村上良一(春 海)纂集?			1850	1冊51丁	23.6×16.0	88	版心に字引あり、半葉10行罫紙、 「 ■ 林 ■ 居薬局之印」印、村上良一 (春海)纂集と記載。	
経験方集	ケイケンホ ウシユウ	写	村上玄水卓			文政6 (1823) 以降	1冊46丁	27.0×19.5	89	表紙に「村上」とあり、著者は筆 跡による判断。	村上玄水卓 (1781-1843) <ムラカミ・ゲンスイ>

經驗良方	ケイケン リョウホウ	写			1839	1冊13枚	19.0×14.0	90	「村上調合所」印、破損大	
外療集驗方五	ゲリョウ シュウケン ホウ		村上春海		嘉永 5 (1852) 以降	1冊111丁	22.5×15.8	91		村上春海 <ムラカミ・シュンカイ>
玄水家帯一一書	ゲンスイカ ソウ	記	〔三代〕村上 玄水		宝永 (1701) 以降	1冊80丁	24.0×18.8	92	巻末に「元禄十五午林鐘十五鳥 書浮焉」とあり。	〔三代〕村上玄水卓 (1781-1843) <ムラカミ・ゲンスイ>
玄水家帯卷之三 〔内題〕。〔外題〕 卷二	ゲンスイカ ソウ	記	〔三代〕村上 玄水		享保 5 (1720)	1冊37丁	22.1×16.0	93		〔三代〕村上玄水卓 (1781-1843) <ムラカミ・ゲンスイ>
玄水家帯卷壹〔題 簽]	ゲンスイカ ソウ	記	〔三代〕村上 玄水		天明 6 (1786)	1冊75丁	26.9×29.0	94	紀玄俊が写した写本、花押あり。	〔三代〕村上玄水卓 (1781-1843) <ムラカミ・ゲンスイ>
古今良方〔題簽]	コキンリョ ウホウ	写	村上春海	(風雲堂藏 版)	天保 8 (1837)	1冊98丁	24.0×15.3	95	春海の自筆、メモの挟み込みあり、 上地堂良一宗玄写本、貼紙あり、 東都尚古堂藏版という薄い写しあ り、「白■医生」・「村上■」、 「■■■ 土印」印あり	村上春海 <ムラカミ・シュンカイ>
古今良方〔題簽]	コキンリョ ウホウ	写	村上春海		天保 8序 (1837)	1冊44丁	23.8×16.5	96	古今良方卷之一中津村上良一玄秀 纂集と記載あり、半葉 11 行罫紙	村上春海 <ムラカミ・シュンカイ>
醫案必讀〔ほか]	イアンビツ ドク	写	不明、端本		1825	20枚	26.5×18.5	97	数種の資料の寄せ集め、玄水の手 書きなど、半葉 11 行罫紙。	
虎狼痲病私録	コシラビヨ ウシロク	稿	村上春海?		安政 6 (1859)	1冊3枚	26.3×19.4	98		村上春海 <ムラカミ・シュンカイ>
嘲	サウ	写	村上玄水卓			1冊4丁	27.5×20.0	99	著者は筆跡による判断、題名は鳥 が羽を整える意味、玄水・辛島に よる島津の看病日誌も記載。	村上玄水卓 (1781-1843) <ムラカミ・ゲンスイ>
集驗方三(琴玉)	シュウケン ホウ	写	村上玄水卓			1冊	22.5×15.6	100	著者は筆跡による判断。	村上玄水卓 (1781-1843) <ムラカミ・ゲンスイ>
集驗良方	シュウケン リョウホウ	写	村上玄秀維藏	〔華林堂藏 書〕	天明 6 (1786)	1冊65枚	26.7×19.0	101	村上玄秀岳著とあり、天明 6 から 文化 9 にかけての日誌の寄せ集め、 メモの挟み込みあり。	村上玄秀 <ムラカミ・ゲンスイ>

史料名	カナ表記	写本・ 版本	著者・製作者・ 翻記者等	発行地	出版者・発 行者など	発行年・製作 年(西暦)	形態	寸法(cm)	番号	注 記	著者・制作者・記者標目
神経系症状	シツケイケ イシヨウコ ウ	写					1枚	23.7×16.7	102	断片。	
丹方彙篇鶴膝風 経験方	タンホウイ ヘン	写				1867	1冊50丁、 横本	8.6×19.2	103	鶴膝風は結核性関節炎の一種。	
仲景弁脈法、景 岳全書	チュウケイ ヘンミヤカ ホウ	写					1冊24丁	26.5×18.5	104	医学の雑記帳。	
守善堂朝野僉載 卷之一	チヨウヤセ ンサイ	写	村上玄秀			明和6 (1769)	1冊13丁	27.8×19.8	105	「明和6年春大坂京町守善堂鈴木 俊民先生に於イテ勤学ス」とある。	村上玄秀 <ムラカミ・ゲンシュウ>
朝野僉載	チヨウヤセ ンサイ	写	村上玄秀				1冊85枚	14.0×19.8	106		村上玄秀 <ムラカミ・ゲンシュウ>
朝野僉載	チヨウヤセ ンサイ	写	村上玄秀				1冊18丁	14.0×19.5	107	伊東織衣、蘭■の侯爵を記す、前 に論語のことが書いてある。後には 医学のことが書かれている。	村上玄秀 <ムラカミ・ゲンシュウ>
道原第一	ドウゲン	写	村上玄水卓			1825	3丁	26.2×15.4	108	筆跡から作者を判断、半葉9行罫 紙	村上玄水卓 (1781-1843) <ムラカミ・ゲンスイ>
痘瘡集験	トウソウウ シュウケン	稿					1冊5枚	22.8×15.5	109	半葉9行罫。	
[無題]		写					1冊25丁	24.9×17.0	110	東洋医学の記述。半葉10行罫紙。	
日新 講義 記聞 虎 狼 病 病 説	ニッシンコ ウギキブ ン	写	大阪病院教 師、村上田長 写			1867	1冊49丁	23.0×16.0	111	田長による講義ノート、緒方郁子 文重訳の写し	村上田長 (1839-1906) <ムラカミ・ゲンチヨウ>。
間見賀義簿	マミケンジ ツギボ	写	村上玄秀維嶽			文久2 (1862)	1冊34丁	13.6×19.6	112	表紙に「華林堂主人雲浦学人」と あり玄秀による、前半は万治元年 から	村上玄秀 <ムラカミ・ゲンシュウ>
[無題]	[無題]	写	村上玄水卓				1冊8丁	28.0×21	113	医学、兵学、儒学の記述。著者は 筆最後に「鄭重」とあり、跡によ る判断、兵学の総あり、後半は儒 教史について。また、玄水・辛馬 による島津の看病日誌も記載。	村上玄水卓 (1781-1843) <ムラカミ・ゲンスイ>

[無題]	[無題]	写	村上玄水卓			1720	1冊3丁	27.8×19.0	114	半葉9行罫紙、後半部分は玄水の医学の雑記帳。	村上玄水卓 (1781-1843) ＜ムラカミ・ゲンスイ＞
[無題]	[無題]	写	村上春海?			1825	1冊42丁	27.0×20.0	115	薬方。半葉9行罫紙。	村上春海 ＜ムラカミ・シュンカイ＞
村田淳良書体書	ムラタジュンリョウカノイタノシヨ	記			明治期		1冊3丁	18.5×14.0	116	「村上田長先生の覺ヲ乞」とあり。	
問症	モンシヨウ	写	村上老矣子				1冊36丁	12.5×18.0	117	「鄭氏」黒印。村上老矣子は玄水以前。	村上老矣子 ＜ムラカミ・ロウエイシ＞
楽園手集	ヤクエンシユシュウ	記	村上玄水卓著				1冊20枚	24.2×17.2	118		村上玄水卓 (1781-1843) ＜ムラカミ・ゲンスイ＞
六祖玄水医案	リクソウゼンスイイアン	写	村上玄水卓				1冊28枚	24.8×17.1	119		村上玄水卓 (1781-1843) ＜ムラカミ・ゲンスイ＞
立効散外	リッコウサンカイ	写	村上田長				2枚	26.8×19.5	120	断片	
良医格言	リョウイカクゴゲン	写			元治1 (1864)		1冊3丁	24.0×16.3	121	師匠の医学の心得を写したものでか?	村上田長 (1839-1906) ＜ムラカミ・デンチヨウ＞。
[無題]	[無題]	写			2月17日		1枚	16.2×39.0	122	卜嚙による医療。	
[無題]	[無題]	写	村上養元?		文久3年 12月 (1863)		1冊12丁	26.5×19.0	123	医学に関する記述。	村上春海 ＜ムラカミ・シュンカイ＞
[無題]	[無題]	写	村上春海				1枚	17.9×56.7	124		
[雑報]	[無題]	写					1冊105丁	14.7×21.5	125	漢方の記述	
[雑報]	[無題]	写					1冊23丁	19.4×13.5	126	漢方の記述	
[雑報]	[無題]	写					1冊31丁	18.2×12.2	127	漢方の記述	
[無題]	[無題]	写	村上玄水卓				1枚	16.4×56.7	128	診断書。次郎大夫君の病状。	村上玄水卓 (1781-1843) ＜ムラカミ・ゲンスイ＞
医院開業願下書き	イインカイギョウカネガシタガキ	写	村上田長		明治19年 6月11日 (1886)		1枚	27.5×19.5	129		村上田長 (1839-1906) ＜ムラカミ・デンチヨウ＞。

史料名	カナ表記	写本・ 版本	著者・製作者・ 翻訳者等	発行地	出版者・発 行者など	発行年・製作 年(西暦)	形態	寸法(cm)	番号	注記	著者・制作者・記者 標目
大分県医士会規 則	オオイトケン シイシカイ キヨク	写				明治期	2枚	23.9×16.2	130		
会場規則附録	カイシヨウ キョクワロ ク	写	下毛郡醫事会 議所			明治10年 1月 (1877)	2丁	27.7×19.3	131	「醫事會議所印」	
管内脚気患者明 細表	カンナナイ カツケカン シヤスイサ イヒヨウ	写				明治期	1枚	24.0×33.0	132	半葉10行罫紙(青)	
[無題]	[無題]	写	村上田長?			明治8年 4月10日 (1875)	1冊11枚	24.6×17.1	133	1875年ニューヨークの新聞記事の 抜粋。版心に「心遠居藏版」とあ る半葉10行罫紙(赤)、結核関連 の記事。	村上田長 (1839-1906) ＜ムラカミ・デンチヨウ＞。
第一号死亡救助 規則乙號附録	ダイイチゴ ウシボウ キユウジヨ キョクオツ コウワロク	写				明治17年 3月 (1884)	1冊4頁、 活字	21.2×15.1	134		
下毛郡医師組合 規則	シモゲケン シツクミア イキョク	写	下毛郡醫事會 議所			明治期	1冊4丁	24.0×16.2	135	半葉10行罫紙(青)	
集會規則書	シユウカイ キョクシヨ	写				明治9 (1876)	1冊6丁	26.8×19.6	136	「醫事會議所」印、同意者の名前 が列挙。	
衆方規矩	シユウホウ キク	コピー					3枚	17.0×29.5	137	衆方規矩32～37頁をコピーした もの。	
[無題]	[無題]	写	村上田長			明治期	4枚	26.0×18.9	138	明治期の診断書1通とほか3枚。	村上田長 (1839-1906) ＜ムラカミ・デンチヨウ＞。
[無題]	[無題]	写	大分県			明治15 (1882)	1冊3枚	23.9×16.3	139	地方病の通知書。	
着到簿	チャクトウ ボ	記	下毛郡醫事總 會議			明治17年 3月6日 (1884)	1冊13丁	37.5×13.5	140	「下毛郡醫事總會議之印」印	

[無題]	[無題]	写	大分県			明治26年 9月9日 (1893)	1枚	24.2×16.6	141	伝染病に関する訓令の改正通知。 紫ペン書。	
[無題]	[無題]	写					1冊6枚	14.1×21.2	142	症状と処方を書いてある。断片。	
[無題]	[無題]	写					8枚	17.5×25.6	143	江戸期版本の目録の断片。半葉 13行青枠縦書の村上記念病院の 野紙、2、3、4、5、6、13、21、 21の8枚	
[無題]	[無題]	ペン 書き					12枚	17.4×25.5	144	江戸期版本の目録の断片。一二枚 の内訳は半葉13行青枠縦書の村 上記念病院の野紙1枚、横書半葉 13行青枠の野紙6枚、ノートの切 れ端2枚、400字原稿用紙3枚。	
内科各論	ナイカカク ロン	写	口述者不明、 村上貞写					24.2×16.4	145	虫喰いによりひつつき、開披不能。 村上貞の講義ノート。	
外科書口演	ゲカシヨコ ウエン	写	口述者不明、 村上貞写				1冊72丁	24.0×16.0	146	破れあり、版心に「積善堂出版」。 村上貞の講義ノート。	村上貞(春海) ＜ムラカミ・ソルミ＞
内科各論	ナイカカク ロン	写	大谷周庵講 述、村上貞筆 記				1冊70丁	24.0×16.0	147	村上貞の講義ノート。	大谷周庵(1887-1888) ＜オオタニ・シユサフン＞。 村上貞(春海)
薬物学	ヤクブツガ ク	写	高山氏口述、 村上貞筆記				2冊(前 編71丁、 后編59 丁)	23.8×15.9	148	村上貞の講義ノート。	高山＜タカヤマ＞。 村上貞(春海) ＜ムラカミ・ソルミ＞
診断学	シンダンガ ク	写	口述者不明、 村上貞写				1冊69丁	24.0×16.0	149	村上貞の講義ノート。	村上貞(春海) ＜ムラカミ・ソルミ＞
組織学各論	ソシキガク カクロン	写	口述者不明、 村上貞写				1冊66丁	24.7×16.7	150	「積善堂出版」の野紙。村上貞の 講義ノート。	
[病理学]	(ビヨウリ カク)	写	口述者不明、 村上筆記				1冊98丁	24.3×16.5	151	水損、表紙なし。村上貞の講義ノ ート。	
眼科学他	ガンカガ ク					不明	1冊+4点	24.5×16.8	152	141頁、水損甚大、開披不能、及 古紙21枚。	

史料名	カナ表記	写本・ 版本	著者・製作者・ 翻記者等	発行地	出版者・発 行者など	発行年・製作 年(西暦)	形態	寸法(cm)	番号	注記	著者・制作者・記者 標目
診断学	シンドンガ ク	写	口述者不明、 村上筆記				1冊57丁	24.0×16.0	153	第五高等中学医学部講義ノート。	村上貞(春海) 〈ムラカミ・ハルミ〉
第三期外科学	ゲカガク	写	口述者不明、 村上筆記				1冊42丁	24.0×16.0	154	第五高等中学医学部講義ノート。	
胸腹部外科		写	口述者不明、 村上筆記				1冊98丁	24.0×16.0	155	第五高等中学医学部講義ノート。	
大谷医学博士講 義循環器系統内 化学	ジュンカソ キケイトウ ナイカガク	写	大谷周庵口 述、村上貞写				1冊52丁	24.0×16.0	156	第五高等中学医学部講義ノート。	
外科学筆記	ゲカガク ヒツキ	写	口述者不明、 村上筆記				1冊92丁	24.0×16.0	157	第五高等中学医学部講義ノート。	
細菌学	サキンガク	写	口述者不明、 村上筆記				1冊29丁	24.0×16.0	158	第五高等中学医学部講義ノート。	
局所解剖学	キョクシヨ カイボウガ ク	写	口述者不明、 村上筆記				1冊29丁	24.0×16.0	159	第五高等中学医学部講義ノート。	
田中医学士講義 内 神経系統病 科学	シンケイテ イトウビョ ウナイカガ ク	写	田中医学士口 述、村上筆記				1冊?丁		160	第五高等中学医学部講義ノート。	
病理学細菌偏	ビョウリガ ク	写	口述者不明、 村上筆記				1冊66丁		161	第五高等中学医学部講義ノート。	
Innere Krankheit Prof. Dr. Otani		写	大谷周庵講 述、村上貞筆 記				5冊	21.4×17.0	162	村上貞の講義ノート。 「Infektionskrankheit No.1. Infektionskrankheit No. II. Von Jan 36 Meiji. Infektionskrankheit No. III. Infektionskrankheit No. IV. Mj 36 26th Jul.」	
Chirurgie nach Dr. T. Tashiro		写	田代正講述、 村上貞筆記				2冊	21.4×17.0	163	村上貞の講義ノート。	

Psychiatrie nach Prof. Dr. S. Orani, No. 1, von Jan. 36 Meiji		写	大谷周庵講述、村上貞筆記	明治36年	1冊	21.4×17.0	164	村上貞の講義ノート。	
Chirurgie nach Dr. S. Tashiro		写	田代正講述、村上貞筆記		1冊	21.4×17.0	165	村上貞の講義ノート。	
上肢外科		写	村上貞筆記	明治期	2冊	20.2×16.1	166	第五高等中学医学部講義ノート。「田代先生講義」(=田代正)	
各論		写	村上貞筆記	明治期	6冊	20.2×16.1	167	第五高等中学医学部講義ノート。	
[無題]		写		江戸期	3枚	16.6×46.5	168	コレラに関する記述	
[無題]		写		江戸期	1枚		169	未調査	
[無題]		写		江戸期	1枚		170	未調査。神経系症候についての断片	
Innere Krankheit Prof. Dr. Orani, Nerven No 2		写	大谷周庵講述、村上貞筆記	明治期	1冊	21.4×17.0	171		
病理学 腫瘍偏		写	村上貞筆記	明治期	1冊67丁	23.5×15.8	172	製本された講義ノート。医学士西 ■氏講述	
病理学 原因論		写	村上貞筆記	明治期	1冊	23.5×15.8	173	製本された講義ノート、第五高等 中学医学部。	
病理学 血行障害 偏		写	村上貞筆記	明治期	1冊	23.5×15.8	174	製本された講義ノート。第五高等 学校医学部教授栗本東明氏口演	
■外科病理学		写	村上貞筆記	明治期	1冊	23.5×15.8	175	製本された講義ノート、第五高等 中学医学部。	

索引

C	Crocus Metallorum	120
E	emprasto	119
G	Gazophylacium Medico-Physicum	120
H	Heister' Lorenz	101
	Hepar Antimoni	120
M	Michaelis' Johann Jakob	119
	Mynsicht' Adrian von	119
P	Paracelsus	119
	Precipiat	120
S	Schamberger' Caspar	117
	Schat-Kamer	120

U	unguento	119
W	Woyt' Johann Jacob	119
あ	アクハアカルシス	106
	アネイチ フロンピイ	107
	アルヲニコム チユフリカチユム	102
	アレシハルマカ	101
い	医宗必読	101
	一字薬名	124
	インクエント アルホム	118
	カンフラスト	107
	インクエンド バジリコム	107
	インクエント ヒユスコム	108
	インクエント エケビシヤコム	108
う	Schat-Kamer boek	120
	Schmellenin' Johannes	
	Christophorus	119
	Sylvius' Franciscus	119

え	エツセンチャ アフシンチ	101
	ゴムホシタ	101
	エリキシル アンチヘブル	101
	ミカエリス	101
	エリキシル プロプリータチス	101
	パラセルシ	101
お	王宇泰	98
	黄連解毒湯	99
か	回首散	97
	外陽発表湯	100
	外療集驗方	97
	臥雲堂	14
き	九味羌活湯	151
く	薬箱	118
		124
う	宇田川榛齋	71
	呈宇田川榛齋先生書	71
	烏薬順気散	97

シカットカームルブーク	120	犀角湯	99	クウルウン	ワートル	106
三生飲	97	柴葛解肌湯	99	外科正宗	121	
三化湯	97	柴苓湯	100	外科撮要	121、146	
鎖国論	73	サルヂヂスケハ	セイルヒウス	玄真	71	
黄帝内経素問	73	固真飲子	98	五行	73	
五防風湯	97	五帶	73	古防風湯	97	
ゴラルアルド	107	コロキエス	メクルロリコム	黄帝内経素問	73	
け						

四行	73	四元行火吸之圖	73	す		
資寿解語湯	97	志筑忠雄	73	スソールト	ヘノフル	101
釋圓通	74	小柴胡湯	98	スヒリト	テリアチル	カムボラト
證治準繩	98	千金方	118	センドロム	101	
西洋医事集成宝函	120	千金三黄湯	97			
せ						

チヒニコム	エメチクム	102	ち			
チンクチュラ	アンチモミ	101	タルタリユス	ヒツトリ	ヲラチユス	102
陣実功	121	通湯	100	テキンキチュラ	メラ	107
帝里亜加	101	テニエリキシル	フロフリタチス	テンキキチュル	カンブル	107
天地分體論	71	テンキテール	スクシーネ	東垣清陽湯	97	
と				道原	71	

へ	へバル アンチモニ	102
ふ	復正湯	98
	仏教天文学	71
	佛國曆象編	71
ひ	必読十味剉散	97
は	梅毒	120
	橋本宗吉	122
	八社宮	12
	バルサモコッパイハ	103
	半夏桂甘湯	100
ね	年中書紳録	11、12、13、14
に	ニツトリスム アンチモニコム	102
な	南蛮流秘密金瘡之治術	117

ら	ラフメント	103
よ	吉雄耕牛	118
	吉雄釋家秘録	117
や	屋形家系図	1
も	諸光	12
む	村上玄水	95、96、117
み	ミキステエラ シムプレキス	101
ま	萬安湯	98
ほ	防風通聖散	97、149
	保元湯	97
	梵曆運動	71

を	ヲクリカンキリ	103、160
ゑ	エリキシル ヒットリヲリ	101
	メインシクチ	101
	エンプラスト コミイニイ	108
	エンプラスト デサホーネス	108
	エンプラスト デヤハルマ	108
	エンプラスト テヤホンホリゴム	108
	エンプラスト ヌテキテコン	109
	エンプラスト ハジリコム	108
	エンプラスト ミイニイ	108
ろ	老野子	71、72、75
れ	曆象新書	73
り	六祖玄水屈伸録	71、75
	理中安蚘湯	99
	李東垣	118

Wolfgang MICHEL, Yoichi YOSHIDA, Akihide OSHIMA (ed.), Regional Physicians and Medical Treatment. Nakatsu Municipal Museum for History and Folklore - Medical Archive Series, no. 8, City of Nakatsu Board of Education Kawaharada Printing Co., Nakatsu, March 2009.

CONTENTS

Preface

Wolfgang MICHEL, Yoichi YOSHIDA, Akihide OSHIMA: Genealogical Table of the Yakata Family in Yabakei (Nakatsu)	1
Yoichi YOSHIDA: On the Medical Prescriptions of Regional Physicians in the Late Edo Period	11
Akihide OSHIMA: Gensui Murakami's "Treatise on the Division of Heaven and Earth" (Tenchi Buntai-ron) and its Background	71
Tomita HOSODA: Gensui Murakami's "Collection of Surgical Prescriptions" (Gairyō Shūkenhō)	96
Wolfgang MICHEL: On Murakami's "Collection of Surgical Prescriptions" (Gairyō Shūkenhō)	117
Catalogue of the Murakami Medical Archive: Part 1 (Medicine)	129

● 執筆者一覧

Michel, Wolfgang (W・ミヒェル)
九州大学大学院言語文化研究院教授

吉田 洋一 (よしだ・よういち)
久留米大学文学部講師

大島 明秀 (おおしま・あきひで)
熊本県立大学文学部講師

細田 富多 (ほそだ・とみた)
中津市

中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書Ⅷ
ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀 共編

史料と人物 Ⅱ

平成21(2009)年3月

発行者 中津市教育委員会
刊行 中津市歴史民俗資料館
〒871-0055 大分県中津市1385番地
TEL 0979-23-8615
印刷 株式会社 川原田印刷社

